

アレクシア様を分からせたくて！

ゆっくり妹紅

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その男は、転生先の中世風のファンタジー世界で仲間を庇つて死んだ。

——はずだつたのに、何故かまた中世風のファンタジー世界に転生。

ここまで良かつたが、厨二病に絡まれて怪しい組織の一員になり、頭が痛くなつた所へ、ミドガル王国の第2王女アレクシアの従者として働くことが決定！

それから始まる、アレクシアのちよつかい！ブラックな労働環境！唐突な無茶ぶり！

そしてストレスが溜まりきつた男は誓つた。  
「絶対に分からせてやる!!」

これはアレクシアの無茶ぶりやそれに巻き込まれた人たちへのフォローや、シャドウガーデンの運営に巻き込まれながらも、分かれを遂行するために奮闘する男の物語!!

と見せかけた曇らせ分からせの物語である。

追記

オリ主のルイス・エアのイメージ←

ご利用させて頂いたサイト

「はりねず版男子メーカー2」

http://picturew.

me/ja/image\_mak

er/1453974

目 次

1 冊目	1
2 冊目	7
3 冊目	14
4 冊目	19
5 冊目	25
6 冊目	31
7 冊目	35
8 冊目	41
9 冊目	46
10 冊目	52
11 冊目	57
12 冊目	62
13 冊目	68
14 冊目	73
15 冊目	79
16 冊目	85
17 冊目	92
18 冊目	104
19 冊目	112
20 冊目	118
21 冊目	124
わからせ！（番外編）：とある従者のバレンタインデー	133
	141
	150

番外編：アレクシア・ミドガルの日記

22 冊目  
23 冊目  
24 冊目  
25 冊目  
26 冊目  
27 冊目

番外編：ユウトが体験したトラウマや日常話 その壱

217 207 200 188 176 168 160

「…………ね…………！」

気がつけば体が動いていた、と言えばいいだろうか。倒したはずの魔王が起き上がり魔法をこのパーティのリーダーと言える彼女に当てるつもりだと分かった瞬間、彼女を突き飛ばしていた。

直後に飛んできた魔力のビーム。体が貫かれ焼かれる不快な感覚と重い吐き気、そして体が別の何かで蝕まれるような感覚。それで、放たれたものがただの魔力砲ではなく、何かしらの呪い——それも魔法に耐性がある自分でさえ防ぎきれない強力なものが付与された魔法だと分かり、背筋がゾツとすると同時に、彼女を庇えてよかつたと安堵する。

「いつた……ユウト！ いきなりなにす……!?」

「しぶ、とい……やつだ、な……」

先程の魔法の影響か、魔力をたくさん収束することが出来なかつたものの、込められるだけ込めて放つた俺の魔力弾は魔王にあたりその体を完璧に吹き飛ばした。そして同時に自分の中の何かが切れた様な感覚がし、地面に倒れ込んだ。

「「ユウト！」」

暗くなっていく視界の中、あの無表情な武闘派聖女であるマリアが、毎回俺をからかっては倍返しにされて半べそかくシーフのユラが、そして聖剣に選ばれた勇者のレイが泣きながら駆け寄ってくる。良かつた、思いつきり突き飛ばしたから怪我してないか不安だったんだけど……走つて来れるぐらいなら大丈夫かな。

そう安堵した瞬間、目の前が真っ暗になつた。

\*\*\*\*\*

☆月☆日

てな感じで死んだはずだったのに、何故か俺はまた転生していた。  
いや、なんでやねん。転生1人1回までとかルールで決まってないん  
ですか？

……まあ、これは今更言つても仕方ないので現状の整理だ。まず、  
俺が転生した世界は1度目の転生先同様中世風のファンタジー世界  
であり、加えて俺は今年で10歳になる。まあ、そんな世界だが前の  
転生先と違うところは魔力関連のところだろうか。まず、この世界で  
も魔力自体は存在する。しかし魔法と言う概念は存在せず、魔力自体  
の使い道は身体と武器の強化がメインとなつていて。更にこの世界  
の魔力は自分の体から離れると途端に制御が効かずに霧散すると  
いつた性質があるせいで実戦での遠距離攻撃手段としては実用化さ  
れてない。そのせいか、魔力伝導率が高い剣が戦闘の主流となつてお  
り、近接戦闘が基本的な戦闘手段として成立し、それを駆使して戦う  
ものたちを『魔剣士』と呼び、これが最もポピュラーな戦闘職だ。

……脳筋かな？

まあ、それは置いといて。次の違いは物質の魔力の通りがめちゃく  
ちゃ悪いことだ。比較的魔力を通しやすいと言われるミスリル、その  
中でも最高品質なものでも伝達率は50%ぐらいしかない。

……バグかな？

いや、これで一体どうやつて戦えばいいんだつて思うほどにこの世  
界の魔力関連の事情は酷い。前の転生……もう前世でいつか。前世  
の魔法が恋しい……。

まあ、取り敢えず今は前世の魔王を討伐しに行つたのと同じレベル  
の魔力操作と剣技及び身体能力にすることだ。幸い、うちの家の庭は  
まあまあ広いし、魔力操作の方は魔力弾を出すのは相変わらずだが、  
切り札である时限式の身体強化のように前世の技術の方も幾つか再  
現出来た。剣の鍛錬も順調だし、前世の全盛期に戻れるのもそんな遠  
くはないだろう。

俺の3度目的人生はここからだ!!

……そういえば、息子さんのシドくんが頻繁に夜中どつか出かけて

いるのが最近再現出来た魔力探知で分かつたけど、何やつてるんだろ  
？

気になるしちよつとついて行つてみるか。

### ☆月♪日

色々ありすぎて考えをまとめたい。

### ☆月→日

これからも頑張ろう+シドくん追跡してみようと思つた昨夜、色んなことがあった。箇条書きでまとめると。

- ・シドくんは転生者だつた。
- ・彼がかなりの実力者だつた。
- ・彼は『陰の実力者』に憧れる厨二病だつた（重要）
- ・とんでもない発明品を作つていた。
- ・そして昨日はその発明品のテストとして盜賊団を襲つた

はい、という訳で中々濃い時間を過ごしちまつたよ。因みに彼には俺の経歴……つまり2回転生していることを伝えており、一応協力関係を結ぶことになった。彼からしたら俺が転生者であること、現段階では俺の方が彼より魔力操作や剣技といった部分は勝つていて、いうのが理由だろう。

さて、そんなことがあったのだが今俺らはとあることをしている。

それは昨日倒した盗賊団に襲われた商人の馬車にあつた『悪魔憑き』と呼ばれている肉塊——元人間を使つた実験だ。

まず、この『悪魔憑き』というのはどういったものなのかを簡単に纏めると、突然体が腐り出して死に至る不治の病、と言つたところだろうか。そしてその名前から分かるように、『悪魔憑き』になつてしまつた者は教会が引き取つて虐殺している、という話まである。流石中世、ここは前世と変わらんな（）

話を戻して、俺ら……というかシドが行っているのは魔力制御の練習だ。そもそもな話、この世界では魔力関連の技術は自己流で何とかしていくのが常識みたいなところがある。一応、俺のやり方をシドに教えてもいいのだが、あくまでそれは俺の感覚であってシドがそれに合うかは別の話。極端な話になるが相性が最悪で進歩が全く見れないということも有り得る。そのため、この『悪魔憑き』には悪いけどシドの練習の被検体になつてもらつた。

普段であればこういつたことは効率的でもやらせないけど、俺の予想だけど上手く行けば……

1ヶ月ほどシドの魔力操作に関してや再現出来た技術に関しての内容が続く。

♪月→日

あれから1ヶ月が経つた。まず結論から言うとシドの魔力暴走を完全に制御することが出来、そして予想通り「悪魔憑き」の肉塊は元の姿であろうエルフの少女になつた。そしてシドは後からそれに気が付き驚いていたが、そこでエルフの少女が目を覚ましかけ、2人して慌てたがなにか閃いたのかシドが「僕に任せて」と自信ありげに言い、いきなり距離を取つて木箱の上に片膝を立てて座つた。俺はとりあえずシドを信じて彼の言つた通りに腕を組んで壁にもたれかかつた。——もし時を巻き戻せるなら、俺はシドの言うことを聞かずに自分から説明すべきだつた。

——そんな後悔は置いといて、シドは目を覚ました少女に説明した。

箇条書きでまとめると。

- ・教典に記された三人の英雄が『魔神、ティアボロス』を倒し、世界を救つたお伽噺は本当だった（大嘘）
- ・魔神は死の間際、その英雄達に呪いをかけた（大嘘）
- ・結果として『英雄の子孫』はその呪いの影響で腐りかけの肉塊になり、何者かの陰謀で『悪魔憑き』と呼ばれ始めた（大嘘）

・『デイアボロス教団』が黒幕（大嘘）

——なんということでしょう。

聞いたこともない話をまるであつたかのようにな話すこのアホを見て俺は白目を剥きかけた。いや、こんな誰だつて分かる作り話だ、と思い少女の方を見ると、ガツツリ信じてしまつていた。

——なんということでしょう。

そしてここで俺の存在に気がついた少女に「あなたは?」と聞かれ、答えようとした瞬間、シド——『シャドウ』と名乗つた——は俺のことを自分の相棒の『エル』と紹介しやがつた！

そしてシドは『デイアボロス教団』に立ち向かう組織として『シャドウガーデン』と名付け、完全に乗り気になつた少女——アルファと名付けられた——はノリノリで組織の資金稼ぎやら人員の確保とか考え出してしまつた……

とりあえず、癖が強い！シドもそうだし、コロツと騙されてるアルファも!!こんなことで頭抱えたの前世のパーティ以来だわ……頼むからこれ以上癖が強い人間には会いたくない……神様、マジでお願いします。

そういうや、父さんが大事な話があると言つていたがなんだろうか？

♪月。日

父さんの話を一言で纏めると「王都に行つてアレクシア王女の従者として働く」だつた。

え？ 10歳なのに労働強いられるの？ この世界の労働基準法はどうなつてんだ、労働基準法は！

因みに理由としては王国の騎士である父さんが王都にいる友人に俺の事をべた褒めした手紙をしそつちゅう送つていたらしく、そろから「そんな優秀なら」という訳で護衛兼従者兼友人としてアレクシア様に仕えろ、ということになつた。

父さん騎士だつたのかよとか、なんで田舎の方にいんのとか、色々聞きたいはあるが、謝つてくる父さんを見ると怒りたい気持ちは無くなつた。まあ、行くのは1週間後と猶予を持たせてくれたのは幸いだつた。とりあえず王都に行くまでにアルファには自分が教えら

れる技術は全て教えておこう。特にアルファは自衛のために力を身につけるのは間違いでは無いはずだ。シドは……まあ、あいつ個人に教えてなくても俺の動きやアルファに教えるところを見て勝手に自分のモノにしていくだろうから放置だ。あいつは努力家だし、俺の事を追い越すのもそんな遠くない未来だろう。

そして、それが楽しみな自分がいる。

## 2 冊目

♪月×日

ついに王都へ行く日となつた。

お見送りとしてうちの家の執事やメイドたちを初めに、カゲノー一家の皆様が来てくれた。アルファは来てないことにちよつとだけ落ち込んだが、馬車の中で1冊目の日記帳を読み返していたら手紙が入つており、そこに自身を助けてくれたこと、再会を約束することが書かれていたことで俺は思い出した。

俺、一年に一度はこつちに戻つてこれること言つてなかつたじやん。

……とりあえず次アルファに会つたら謝り倒すしかないな。

あー、悩みの種が新たにできたせいで明日にはアレクシア王女に会うつてことなのにもうお腹痛い。頼むからシドみたいな癖が凄いやつじはありませんように！これ以上増えたら俺の胃が死ぬから……マジで頼む。

♪月÷日

ただのクソガキじやねえか!!

♪月＜日

アレクシアの従者生活2日目。

アレクシアのクソガキぶりに我慢できなくて思わず昨日の日記に、クソデカ文字で汚いことを書いてしまつたが、これは仕方ない。

いやね、顔合わせした時はなんか取り繕つてるような気はしたけども、普通に礼儀正しい子だなーって思つたんだ。これなら胃が爆発せずに済むと思ったんだ。

でも悲しいかな、俺のそんな考えは2人きりになつた瞬間ぶつ壊れた。

彼女の本性は腹黒かつ性悪で、目つき悪いやら、身長低いやら、笑顔が下手くそやら、めちゃくちやボロクソ言われた。一体どんな日々を送つたらあの歳であそこまでひねくれるんだ、つてぐらいやばかつた。

そしてこの本性について他人にバラすな、と言われた時に思わず口を滑らしてしまい、笑顔のグーパンを有難く貰つた。美少女のグーパンはご褒美つて前世で聞いたけどそんなことは無かつた。というか王家の教育はどうなつてんだ、教育は！

……まさかアレクシアも転生者じやないだろうな？

## ♪月11日

アレクシア様の従者生活3日目。今日はアレクシア様の剣の稽古に付き合う羽目になつた。一応彼女の剣を見させてもらつたが……はつきり言つて俺よりはあるとは思うけど、平均的に見たら才能はないと思う。けど、努力を積み重ねた真っ直ぐなもので、俺自身もさらに研鑽を積もうと感じたほど、彼女の剣は個人的に好きなものだつた。ちょっとだけ見直したよ。

あと今回のことでの確信したけど、この世界の剣術……というか武術と言うべきものは前世、前々世と比べるとまだ未熟などころがある。これは最終的に魔力量によるゴリ押しが出来てしまうからというのがあるが、これつてやっぱり筋筋じゃ……

まあ、それはともかく模擬戦の時に抜刀術のようなものは変に使えなくなつたということは確かだろう。その剣技をどこで教わつたつて聞かれても返答に困るし。

というわけでここで俺の数少ない切り札が使えなくなるのはかなり痛いところではあるが……まあ、割り切るしかないか。模擬戦で使

う事態にならなければいいわけだし。  
よし、明日も張り切つてこー！

暫くアレクシアのことや彼女のからかいに関する内容が続く

### ♪月〆日

アレクシア様の従者生活10日目。何となく彼女の人となりが分かつてきたかなーと思つていたのだが、そんな主は何が面白いのか、今日も俺の休憩時間にやつて来ては性懲りも無く俺の目つきの悪さについてめっちゃ貶してきた。

仕方ないだろ!!この死んだ魚のような目つきの悪さは生まれつきなんだよ!!前々世からの呪縛は2回転生しても解けないんだよ!!これも全部前世の魔王が悪い!……いや、流石に可哀想だな。やめておこう。

いやでもね?俺は思うんだよ。余計目つきが悪くなつてるのはクソガキアレクシア様やうちの親のせいもあると思うのよ。

まず、この従者の仕事めちゃくちゃブラックなんだよ。拘束時間がなんと朝5時から夜の9時までと脅威の16時間!そしてさつき書いたように休憩時間の合間にアレクシア様がからかいに来るから実質休憩時間はなし!!こんな大人でも体と心が壊れるだろ。前世の寝ずの張り込みを3日やつたとか、魔族の精神攻撃で廃人になりかけたといった極限状態と比べたらマシだけどさ……。あれ、前世でもろくな目にあつてない?

……これ以上考えると悲しくなつてくるからもうやめよう。

とりあえず休憩時間の時に見つからないような場所を複数見つけておくか……。

### ☆月〆日

(ミミズがのたくつたような字が書かれていているが、なんて書いて

あるか分からぬ)

### ☆月〇日

昨日の日記が謎の暗号みたいな感じで終わってしまったがこ  
ればっかりは仕方ないとと思う。昨日、休憩時間中に突如現れたミドガ  
ル王国の第一王女であるアイリス様から模擬戦の誘いを受けた。ア  
レクシア様のちよつかいよりは100%マシだと思つた俺は了承し、  
お互い木剣を使つた模擬戦をやつたのだが。

アイリス様、歳の割には強すぎ+体力ありすぎ。

あの年齢であそこまでの強さとか、ヤバいだろ。才能が大きな要因  
だとは思えるが、それに驕ることなく研鑽を積み重ねて得た剣、つま  
りレイと同じタイプだ。結果としては今のアイリス様よりももつと  
上の存在を知つていたこと、前世の戦闘経験のおかげで何とか全部引  
き分けまで持ち込めたが、時間や体力を気にせずドンドンせがんでき  
たのは未恐ろしい。そしてそれを見ていた執事長の計らいでその日  
は早上がり出来たが子供の体で全盛期と同じ動きをしたせいで、部屋  
に着いてからはすぐに眠つてしまつたという訳だつた。

後、昨日のことでのわかつたけど前世の頃と同じように、常に2手先  
を予測しながら戦うというのはこの体ではキツイみたいだ。結果と  
しては課題点が見つかったことは大きい。とりあえ  
ずマルチタスクの練習も追加しないとなあ……あれ苦手だから気乗  
りしないけど。

因みにアレクシア様のちよつかいの方が1000倍マシだと思つ  
た模擬戦だったのだが、今日会つたアイリス様から「これからもよろ  
しく頼む」と言われてしまつた。

どうやら神は俺に死ねと言つているらしい。

そして何故か不機嫌なアレクシア様から「タマ」と呼ばれ、投げた  
お金を咥えて拾つてこいというまさかの犬扱いを受けた。  
うん。

あのクソガキ、絶対分からせてやる!!

\*\*\*\*\*

「初めまして、今日からアレクシア様の従者となりましたルイス・エアです。よろしくお願ひします」

ルイスの第一印象はパツとしないやつだつた。死んだ魚のような目のせいでお世辞にもカツコイイとは言えない容姿。

「ええ、よろしくお願ひします」

と、そんな風に彼とコンタクトを交わしてから少し話してみるとルイスは反応が中々面白い。試しにちょっとからかってみると口調こそ丁寧ではあるものの、口元が思いつきり引き攣っていて、その様子が面白くてつい笑ってしまった。そして今の私のことを誰にも言わないよう命令したら「性格ブサイクかよ」と真正面から言われ、思わず手が出てしまつたのは仕方ないと思う。

彼が従者になつて7日目、今日も彼が休憩時間中に鍛錬していたためそれを止めさせる為にからかう。これを見つけたのはたまたまで、彼にとつての休憩時間と呼ばれる時間帯はいつも私の前からコソコソ隠れながらどこか行くものだから、何か弱みでも握つてそれでからかおうと思つて探し、そして見つけたと思つたら1人で剣を振るうルイスの姿。私が初めて見つけた時は、仮想の敵でも想像しながら戦つていたのかとても素振りとは思えない剣の振りや身のこなしをしていた。

素直に凄いと思つた。どれだけ努力をすればそこまでいけるのか分からぬけれど、想像できないほどの研鑽を重ねてきたのは分かつた。

でも、この調子で休憩時間も潰してまで鍛錬なんでしたらルイスの体は壊れてしまう。そう思つた私は彼をからかつて鍛錬を止めさせることをやつたことをしている。……無論、そこに彼の面白い反応を見たいというのもあるが。

「ルイスの目つきつて本当に悪いわよねえ。ただでさえ愛嬌ないのに余計に無愛想に感じるわ」

「あんまり言わないでくださいよ、気にしたことなんですから……」「そしたらムスッとせずに笑顔見せればいいじゃない」

「人の気にしてるところを突いてくる人に見せる笑顔はないです」

「……あんた、いい度胸してるじゃない?」

自分が誰の従者なのか分かってるのかしら?

そして次の日、また私の目を盗んでどつかで鍛錬しているであろうバカ従者を探していたところ、激しく何かをぶつけ合う音が聞こえたためそこの方へ行つてみると。

「はああああっ!!」

「ふっ!」

お姉様と木剣で打ち合っているルイスの姿。恐らく模擬戦をしているのだと思うが、私が驚いたのはあのルイスがお姉様相手に引けを取らない試合をしていることだった

こう言つては失礼だと思うが、ルイスの剣は基礎に忠実な剣だ。だからこそお姉様相手にはすぐ負けるだろうと思つていたのだが、現実はお姉様の攻撃をルイスは全て防ぐだけではなく、反撃までしていた。

そしていつまで続くか攻防は唐突に終わりを向けた。

「せあつ!」

「はあつ!」

——バキッ!!

互いに持っていた木剣が折れた。鍛錬用の木剣が折れるなんて聞いたことないけど、それほど2人の剣戟が凄まじかったということなのだろうか。だが、私はこの後さらに驚くことになる。

「……また折れましたね」

「そうですね、これで3本目ですか」

3本目。2人は確かにそう言つた。つまり、あの二人は先程のような激しい戦いを3回もしていただことになる。だが、そんなことより

も。

「アイリス様はお強いですね」

「ふふつ、貴方の方こそ見事な剣でしたよ」

なんで、なんでお姉様とそんな仲良く話しているんだ。ルイスは私の従者じやないのか。なんでお姉様はルイスとそんな楽しそうに話すんだ。

——なんでお姉様に対しではそんな笑顔を向けるんだ。

何故だか分からぬけどそんな想いが込み上げ、胸が苦しくなるような感覚に襲われた私はその場を走り去った。

——次の日、何ともない顔で現れたルイスがムカついたから「タマ」と呼んで、投げた金貨を犬のように拾つてくるように命じ、そしてそれを実行した彼を見たらなんか満足出来た。

### 3 冊目

%月☆日

俺がタマと呼ばれて約半年がたつた。あの日から俺は人目がないところでは大扱いされており、段々とストレスが溜まって行つたのだが、今日ふとアレクシア様の方を見た結果とあることに気がついてしまつた。

——あの王女、人をペツト扱いすることに愉悦を見出し始めてる！いや、何で10歳で性癖を開拓してるんだよ。確かにアレクシア様は王女だが、あつちの意味での女王になつちゃマズイだろ。こんなのが王族、特にシステムのアイリス様にバレたら凄い飛んだ話だとは思うけど、最悪その原因であろう俺の首が飛んでしまう可能性がある。いや、素質はあつたと思うけどさ？

とりあえず性癖だけはノーマルのままにしてもらう為に、何とかしないといけない。でもどうしたらいいのか分からぬのも事実であり、あの腹黒性悪王女様の実態は言わないようご本人から命令されているから周りに相談もできない。しかしこのまま放置したらそれはそれで問題になるわけで……分からせの方もどうすればいいか全く思いつかないし……正に八方塞がりだ。

早く地元に帰りてえ♪

%月♪日

ついに出来た！アレクシア様に見つかれないように隠れて練習していた魔力の斬撃が出せるようになつた！——有効射程は10mだけど！

前世の経験ありでその体たらくかよ、とツッコミが入りそなうだが言い訳をさせて欲しい。いやね？最初の日記に書いたようにこの世界の魔力つて、人体から少しでも離れると途端に制御が効かずに霧散しちやうっていうバグみてえな性質しちゃつてるんだよ。前世ではそんなことが無かつたから、剣から魔力の斬撃出すためには剣に魔力を

圧縮させて纏わせた後に剣を振つて振り終わりと同時に魔力を止め、というふうにすれば良かつた。……こつちはこつちで習得するのに10年かかつたし、バカみたいに難しかつたけど。

まあ、それは置いといてこちらの世界で再現出来たのは大きな進歩だ。射程こそ今は短いものの、あとは細かい調整や考察を重ねて将来的には50mぐらいにはしたい所だ。

斬撃ですらこんなに時間かかるのに魔力弾や魔力砲はいつになつたら実現できるのか、正直不安ではあるけども焦らずゆっくり確実に行こう。焦つたところですぐに上達するわけじゃないしね。

%月↓日

今日はシドとアルファから手紙が届いた。それを知つたのが今日のお昼あたりで、しかも休憩時間の終わり間際だつたせいで読むのは仕事が終わつてからになつた。

癖が強いとは思つても数少ない友人からの手紙というのはやはり嬉しいもので、そしてそれが顔に出ていたのかアレクシア様に理由を聞かれた。素直に答えたなんか考えるような素振り見せてたが……まあ俺の主様のことだし、どうせ幼少期の弱みでも聞こうと思っているのだろう。というか日に日にドS王女の階段を昇つている気がする。俺が金貨を咥えて持つてくる度に顔を赤らめて笑みを浮かべるのはやめて欲しい、マジで頼むから。

まあ、それは置いといて2人からの手紙だ。

シドの方からは、どうやら俺がこつちに来てからも『悪魔憑き』の人たちを見つけては治していったこと、遊びとして作った『シャドウガーデン』を心を休めるための拠り所の場所としてそのままにしつくということ、ついでに彼の前世の武術とかを教えて いるということが。

アルファの方は『シャドウガーデン』の人員確保が順調であること、そして新しく加わった仲間たちのこと、いつか俺に会わせたいということが書かれていた。

元気になつてゐるようで安心したけど、ふと『悪魔憑き』のことが気になつた。俺はアルファの一件があるまで『悪魔憑き』というのは知識としては治せない病、というふうに解釈していたが実態は魔力暴走によるもので、それを制御できるほどの魔力操作が出来れば治すことが出来るということであり、この長い歴史の中で誰も治療法を出せなかつたとは考えづらい。それに、教会が積極的に『悪魔憑き』を集めているというのも今思えば何かきな臭く感じる。

……少し調べてみた方がいいかもしれない。こういうのは前世の経験上、特に教会関連は裏があることが殆どなわけだし、手紙で感じたシドとアルファの『シャドウガーデン』に対する熱量の違いももしかしたら関係しているかもしねれない。

%月○日

1週間ほど日記を書くのが空いてしまつたが、その成果はあつた。結論から言うとシドのホラ話は全て事実である可能性が高い。この結論に至つた時は信じられなくて読んだ文献の重要な部分を書いたメモを何度も見直したり、考察をやり直したりもした。それでも間違いである確率は低かつた。

……正直頭が痛い。アルファは恐らく独自に調べた結果シドの話が本当だと確信し、あれほど積極的に動いているのだろう。じゃないと手紙に『シャドウガーデン』に関することがあんなに書かれている理由が分からぬ。あと、シドが自分の話したことが本当だというのは分かつてないとと思う。もし分かつてたらもつと色々書くと思うし。さて、問題はこのことをシドに伝えるかだが……恐らく放つておいていいだろう。これがまだ少人数だつたら良かつたのだが、それなりの数になつていることがアルファの手紙から分かるし、何よりシドに救われた人達があいつのことで幻滅して欲しくないというのがある。もし、バレたらその時は俺からも説明して何とかするしかない。

とりあえず、俺の方でも組織の運営とかで手伝えることがあつたら手伝うようにしよう。今の労働環境でやれるかは別として、だけど。

%月\*日

今日アレクシア様の稽古に付き合つての最中にぶつ倒れてしまつた。

医者からは疲労が原因と言われた。従者兼護衛としての激務、親元を離れて知り合いがない所で働いている精神的疲労が主な所だろうと診断されたが、最近は寝る間を惜しんで書物を漁つていたことがあるから恐らくそれもあるだろう。つい、全盛期と同じ感覚でやつてしまつていた……

これからは自身の体力をしつかり把握した上で動かないと。

そして執事長がそんな俺の事を気遣つてくれて、明日から暫く地元に帰つて休むように言い、馬車の手配までしてくれた。本当は断りたかったのだが、上司命令となつたら従う他なく、先程荷造りを終えて日記を書いている。

俺の帰省のことはアイリス様がアレクシア様に伝えてくれるらしいので、そこは安心していいだろう。それに休みを出してくれた執事長には申し訳ないけども、『シャドウガーデン』の新しい仲間やシドたちに会えるのは楽しみではある。

……でも、アレクシア様のことがやつぱり気になつてしまつたたり、俺の中では彼女の存在がかなり大きくなつてゐるんだろう。朝一で出るから一言言えないのもちよつと寂しいところではある。1週間後には戻れるようになつたいところだな。

\* \* \* \*

——ここ一週間、ルイスの様子がどこかおかしかつたのは気づいていた。休憩時間中に鍛錬をせずに色んな本を読み込んでメモをしていたからだ。最初は気まぐれかと思っていたけど、5日間も本に穴が空くような気迫で読み込んでいて、目にクマが出来てゐるのを見れば流石に違和感を抱く。勉強なら邪魔するのは悪いだろうとちよつかいをかけるのを止めてはいたものの、流石に気になつてしまい声を

かけてみた。しかし返ってきたのは「ちよつと気になることがあつて調べ物してるだけですよ」の一辺倒で、それならば一緒に調べ物を手伝つてあげると言つても「自分のことにアレクシア様を巻き込むことは出来ません」と断られてしまった。

そのこつちの気遣いを無にするような態度にムツとしてその日からあいつの休憩時間の時に探しに行くのを止めた。——止めてしまつた。

そして昨日、ルイスは私との剣の稽古の途中にふらついたかと思つたらその場で倒れ込んでしまつた。

——あの時のことと思い返すと、今でも背筋が凍る。どんなに大声で呼びかけても、どんなに体を揺すつても全く反応しないルイス。幸い、その時居合わせていた師範代のお陰ですぐに適切な処置をとることが出来、医者の診断でも大きな怪我などはなく、疲労が原因ということで他の人たちは一安心していた。

が、私はそうでは無かつた。私は今回ルイスが倒れた原因に心当たりがあつたからだ。普段から休憩時間中に剣の稽古をしていること、最近はクマが出来るほどに何かを調べていたこと。これらが原因というのはすぐに分かつた。

——もし、私が意地を張らずにしつこくルイスに手伝うことを、もしくは休養をとることを伝えていたらこんなことにはならなかつたんじやないか。

無論、ルイスが自身の体調管理を怠つていたことも問題ではあると思うが、主である私が気づいていたのにも関わらず何もしなかつたのは問題だ。

あいつのことだから私が謝つても「悪くない」と言うだろうが、気づいていたのにも関わらず放置していたケジメをつける必要がある。

そのため、朝起きてルイスに謝罪と労いの言葉をかけるために彼を探している私の元にお姉様がやってきて。

「ルイスなら早朝にもうここのを出て、地元に帰つたわよ

「え——」

頭が真っ白になつた。

%月&gt;日

今日やつと実家に着いた。父さんや執事長達は俺が帰ってきた理由を手紙で知っていたらしく、泣きながら俺の事を抱きしめてくれた。

……それで俺も涙腺が緩んで泣いてしまったのはちょっと恥ずかしいし、何としてもアレクシア様にバレないようにしなければ。

あ、そのアレクシア様で思い出したけど、父さんは従者の件を辞めてもいいと言つてくれた。俺の事を気遣つてくれての提案だとは思うけど、断つた。なんやかんやアレクシア様の従者として過ごしてきた期間が楽しかったのは勿論ある。が、一番の理由はアレクシア様の性癖をノーマルに留める使命が俺にあるからだ。今の状態のまま成長したら未来の旦那様が可哀想だし、俺の精神衛生上宜しくない。

まあ、こんなこと言う訳にはいかないので、アレクシア様の従者として過ごす日々が楽しいこと、色々な学びがあるから続けたいという旨を熱弁したら、無理しないことを条件に続けることを許してくれた。とりあえず一安心だな。

ちなみにシドとクレアさんにも会つたけど、シドと仲がいいからつてことで俺のことを敵対視しているあのクレアさんが不器用な言葉ながらも心配してくれたことはすごい驚いた。なお、それが表に出ていたのかその後めちゃくちや怒られ、シドのやつは笑つていやがつた。とりあえずあいつは後ではつ倒——（なにかに驚いたのか、文字が乱れている）

今日帰つてくるつて伝えた記憶ないのに、アルファが日記書いてる最中に来ててびっくりした。まあ、自力でしかも早い段階で『ディアボロス教団』の存在を突き止めていたことを考えたら俺の帰省を把握していてもおかしくないだろう、別に思考を放棄したわけじゃない。

そんな彼女とも少し会話したが、どうやらとある獣人の子の教育……と言つたら聞こえが悪いが、どう教えたらいいか難儀しているよ

うだ。

まあ、前世ではとあることが原因で一時期王都の騎士団の指南役として働いていたことがあつたし、教えるということに関してはアルファやシドよりもノウハウは分かつてゐるし、明日見てみるか。

%月「日

えー、件の子になんか懐かれました。

まず、昨日の流れとしては新しく入った『シャドウガーデン』のメンバーの子達と顔合わせしたのだが、全員女性+美人だらけで驚いた。そして自己紹介したのだが、向こうからしたらアルファやシドから話を聞いていたとはいへ、この半年以上1回も姿を見せなかつたやつがいきなり現れても困惑するというもの。まあ、こういうのは非常に筋思考でんまり気が進まないけども、実際に自身の力を見せつけるのが手つ取り早い。

という訳で1番強いと感じた獣人の女の子——デルタを指名し模擬戦をしたのだが……多分このデルタがアルファが言つていた問題の子なんだろう。言い方は失礼ではあるが、彼女は頭を使わずに野生の勘と才能をフル活用して戦うタイプの子であり、こういうタイプは何も教えずにひたすら数をこなした方が実力が伸びる、ということを模擬戦終了後アルファとシドに伝えたうデルタの専任指南役になつた。

個人的には他の子の方も見てあげたかつたが、シドですらお手上げ状態なため明確に方針が立てられる俺が適任ということでのまま押し切られた。

まあ、そんな訳でデルタとは模擬戦しつつ休憩時間で色々話してたらなんか懐かれた、というわけだ。

どうして（電話猫）

%月「日

今日は家でやることないので厨房を借りて軽食を作つてから散歩しに行つてくると親に伝えて、隠れ家に行つた。

作つてきた軽食を振舞つたところ、皆からは絶賛されデルタからは「もつと食べたいですー！」とせがまれたためつい自分の分を分けてしまつた。お陰でその後は空腹に少し悩まされたが、美味しそうに食べる彼女の姿に満足感を得られたので結果オーライだろう……次からはもう少し多めに作つてこようかな。

そしてその後はデルタと模擬戦をする。彼女の戦闘センスは正に天才だ。単純な才能であれば前世で人類側最強と呼ばれたレイよりある。が、問題はその分頭があまり宜しくないことがある。そのせいでも彼女は搦手といったものには比較的弱い。これの克服方法は俺が知る限り2つ。1つは頭を良くすること。もう1つは勘を極限まで鋭くすること、だ。

デルタの場合では後者の方で実力を上げることにするため、ひたすら模擬戦だ。そしていい動きが出来たら終わつたあとにそこを褒めて伸ばしていく。基本的にはこれの繰り返しだ。

それにも……本人言つたら失礼ではあるがデルタはまるで人懐っこい大型犬みたいな感じがする。だからだろうか、この子の近くにいるとなんか癒されるんだよな……そのせいか、気が緩んでいたのもあつて褒める時に思わず頭を撫でてしまつた。やつちまつたと思つたけど、当の撫でられたデルタは「エル様の撫で方、気持ちいいのです」と受け入れていた。その様子が前世使役していた狼型モンスターのポチすけを彷彿させたけど……いくら何でも無防備すぎやしませんかねえ……でも可愛いし、癒されたからその点について言及できなかつたけど。

……アレクシア様もデルタみたいになれとは言わないけど、少しば見習つて欲しいとは思う。具体的には人を貶すの止めてくれ、特に目つき。

\*\*\*\*\*

「こうして会うのは初めてだね。シャドウの相棒のエルだ。基本的に

は王都にいるから皆と会う機会は少ないと思うけど、よろしくね」  
アルファ様とボスから聞いていた、『シャドウガーデン』創設時から所属しているコサン?の1人であるエル様を初めて見た時の印象は「弱そう」の一言に尽きたのです。目つきはなんか死んでるような感じで、霸気もあまり感じないし、そもそも全くデルタたちの前に姿を表さなかつたから疑いの目線を向けていたのです。それは他のみんなも同じようで、ベータに至っては凄い目で見ていました。

「……貴方たち、エルになんて態度を——」

「アルファ、彼女たちは何も悪くないから何も言わなくていいよ。俺だつて同じ立場だつたら同じこと考えるからね」

そしてそんな雰囲気を察したアルファ様がデルタたちに一喝しようとしたのをエル様は止めて、寧ろ私達を庇うような発言をしたのです。そして続けて。

「本当だつたら言葉を尽くして俺の事を認めて欲しいところではあるけど、俺もいつまでもここに残る訳には行かないし、手つ取り早く実力で信じてもらうことにするよ。そうだな……そこの獣人の子、多分君が1番強いと思うんだけど、相手してもらつてもいいかな?」

「へ?」

「デルタを指名するとは、流石我が相棒といつたところだな」

「お前やアルファでもいいんだけど、手を抜かれてるって思われる可能性を少しでも減らしたいからね。という訳でデルタ……だよね? 手合わせお願ひしてもいいかな?」

「は、はいなのです!」

「うん、よろしくね。あ、そうそう——」

「全力で殺しにきなよ。じゃないとキミは俺に勝つことは出来ない」

「——っ!」

1拍置かれてエル様が言つた言葉にはとてつもないプレッシャーみたいのがあつたのです。そして同時にわかりました——この人は、デルタより上にいる存在だと。

そうして始まつた模擬戦だつたのですが、結果は――

「なるほど。確かにこれはシャドウ達が悩むわけだね」「はあ……！はあ……！」

完敗なのでした。デルタは疲れて全然動けないのに、エル様は汗を軽くかいている程度で息切れなんてしておらず、何かを別のことを考えている程の余裕がありました。

「さて、エルのことを見た者はいるかしら？」

『……』

「……いないみたいね。お疲れ様、エル」

「ありがとう、アルファ。あ、デルタも水飲みな」

「あ、ありがとうなのです……」

「そういえば、アルファが昨日話してた子つて――」

エル様から貰つた水を飲んでいた中、アルファ様とボス、エル様の3人でなんか話していたのですがそこまで聞く余裕はなかつたのです。

「シャドウ、アルファと話した結果、君の修行相手は俺が専門で見ることになつたからよろしくね」

「え!?」

「時間もあんまりないから早速始めるよ。ほら構えて」

「は、はいなのです！」

そのことをいきなり伝えられて驚いたけど、すぐに模擬戦をやりました。エル様の修行はアルファ様やボスがやるような型を練習するようなことはなく、ひたすら模擬戦をやりまくるものでした。悔しいですが、攻撃を掠らせることも出来ずに完敗してしまいますが、エル様はデルタがいい動きをした時は褒めてくれたのです。そのせいか、修行はいつもよりも楽しかったのです！エル様は良い人なのです！

その次の日、エル様がやつてきて「お腹すいてるだろうから」ということでサンドイッチとかを持ってきてくれたのです！しかも、エル様自ら作つたものでとても美味しかつたのです！でも、もつと食べたくてエル様の分まで食べてしまつたのは反省なのです。

そして模擬戦をまた何度もやったのですが、褒められていた時に頭を急に撫でられました。最初はちょっと驚いたのですが、とても気持ちよくて凄い良かつたのです！

でも……

「アレクシア様もこんぐらい愛嬌があればなあ……」

アレクシア様って誰なのです？

## 5 冊目

%月 日

今日も今日とてデルタと模擬戦をしたが、やはり成長が凄まじい。始めて3日目だというのに攻撃が当たりそうな場面がもう増えてきた。どうやら俺は彼女の成長力をちゃんと見極めきれていなかつたみたいだな、反省しないと。

模擬戦終了後、いつものように褒めていたんだけど撫でなかつたことを不満に思つたのか、デルタがこちらに頭をグリグリと押し付けてくるという行動を取つた。

何故か脳内で宇宙に猫が浮かんだ。

アルファが気づいて注意してくれたものの主人に怒られた犬のようにしょんぼりしていたデルタを見ていると何か申し訳なくなりこつそり撫でてあげた。かなり喜んでくれたが、やはり犬のようしか思えない。

というか、考えてみたら3日とも模擬戦ばつかだつたな……ずっと鍛錬ばっかりやるのは効率が悪い、というのは前世の師匠から身をもつて教わつたし、デルタのお陰で鈍つっていた前世の勘とかも戻り始めてるからそのお礼も兼ねてピクニックでもしよう。デルタのことだから沢山食べるだろうし、ちょっと多めに作つておこう。あとはほかのメンバーのためにも色々作つておこうかな。

そういえばポチすけは元気にしているだろうか。あいつを置いていく前に、もつと撫でてあげればよかつたなあ……

%月 日

宣言通り今日はピクニックに行つてきた。肝心のお弁当に関しては流石に家で作ると色々言われそうなので、材料を買ってから隠れ家に行き、そこで作つてからピクニックに行つた。お金に関してはアレクシア様が投げた金貨を咥えて持つてきてたのを「褒美」として貰つていた十従者として働いて手に入れた給料もあるので問題はない

かつた。

隠れ家で料理をする、と言つても設備が揃つてゐる訳では無いのでサンドウイッチや卵焼き、簡単なサラダしか作れなかつた。本当であれば、ステーキとかも作つて持つてきたかったんだけど、入れる容器がないので泣く泣く断念。ちなみに「デルタも手伝う！」と彼女も手伝つてくれたが……まあ、彼女が作つたものは少し不格好なものになつてしまつた。その事でデルタは落ち込んでいたが、料理というのは経験が大事だ。最初から全て思い通りのままに出来る人なんていない、ということと、暇さえあれば教えると言つて励ました。

そんなこともあつてから始まつた。ピクニックは中々有意義な時間だつた。デルタはやはりと言うべきか、美味しそうに沢山食べてその後は眠くなつたのか眠つてしまつた……俺の膝の上で。

絶対寝心地悪いだろ、と思つたが気持ちよさそうに寝て いる彼女を起こすのは気が引けたため起きるまで頭を撫でていた。

思えば、この世界に転生してからずつとああいつた時間を取つてなかつた。こんな師匠に見られたらまた怒られるな……あの人の背中はやはりまだ遠い。

ちなみにデルタの作つたサンドウイッチは美味しかつた。その事を伝えたら「本当なのです？」と不安そうに聞いてきたため、目をしつかり見て嘘では無いことを伝えると、尻尾を振つて凄い嬉しそうにしてた。やはり狼というより、大型犬では……。

暫く、『シャドウガーデン』のメンバーとの交流や、デルタとの模擬戦、家族と過ごしたことを記した内容が続く。

%月〆日

明日でもう1週間になるし、そろそろ仕事の方に戻ることを親に伝えたら心配そうな様子ではあつたが、無理をしないことを念押しで言わされただけで終わつた。そしていつ戻るかに関しては、丁度明後日に王都行きの馬車があるのでそれに乗つて行こうと考えている。

という訳で、明日はその準備で来れないこととまた暫く会えなくなることを『シャドウガーデン』のメンバーにも伝えに行つたのだが、デルタが「嫌なのです！エル様行つちや嫌なのですー！」とめちゃくちゃ駄々を捏ねた。これにはアルファを含めた他のメンバーも苦笑しており、シャドウに関しては「慕われて良かったじゃないか」といい笑顔で言つてくる始末。とりあえずデルタには次帰つてきたら何でも言うことを聞く、というのを条件に何とか宥めた。

今思うと結構やべー約束をしたと思うが、デルタなら微笑ましい感じで収まるだろう。ちなみにこれがアレクシア様だった場合、恐らく俺の人権はなくなると思われる。やはりアレクシア様は性悪腹黒王女、はつきりわかんだね。

……それはともかく、デルタがあそこまで俺に心を開いてくれているとは思わなかつた。半年に一度は帰つて来れるとは思うけど、うーん、なんかしてあげたいところだなあ……

%月^日

着替え等は向こうにあるため荷造り事態はすぐに終わつた。

だからデルタのことで何か出来ることは無いかと思い街へ出た。いや、その前に家の人たちにも聞いてみたんだけど「坊ちゃんに春が!?」とあらぬ方向へ勘違いしだしたので誤解を何とか解いてから聞いてみると、あるメイドさんから「街に出てこれだ！って思つたやつを買えばいいと思います」と言う意見が出てそれを実行すべく行つたのだが……めちゃくちや時間がかかつた。

なんせ、これまでの人生において女性に贈り物とかそういうのをした事がなかつたため、どういった物が好まれ、逆に何がダメなのか分からなかつた。

結局、何となくピンと来たチョーカーを買ったんだけど……これつて大丈夫なの——（文字が激しく乱れている）

アルファは人の部屋に音もなく入るのが趣味にでもなつたのだろうか。でも、タイミング的には正にベストだつたためアルファからの意見を聞いてみたところ、「貴方から貰つた物ならあの子はなんでも

喜ぶと思うわよ」と言つてくれた。それに感謝しつつも、朝一で出るためデルタにこれを届けるように頼んだ。（直接渡した方がいい、と粘られたが流石に時間が無いため何度もお願ひしたら折れてくれた）さて、明日も早い今日は寝よう。次帰つてくるのはまた半年後ぐらいいだ。

\*\*\*\*\*

今日はエル様が「いつも修行ばつかだと効率が悪いからピクニックでもしよう」とデルタのことを誘つてくれたのです！たくさんお弁当を作りたいからつてことで隠れ家で作ることになつたのですが、大変そうだったのでデルタも手伝つたのです！でも、中々上手く出来なくてデルタが作つたサンドウイッチはあまり美味しくなさそうな見た目になつてしまつたのです……でも、エル様は「料理というものは積み重ねだからね。これから練習すれば美味しそうな物を作れるようになるよ。俺も時間がある時は教えてあげるからさ」と頭を撫でながら言つてくれたのは嬉しかつたのです。

その後はデルタのお気に入りの場所でお弁当を食べたのですが、エル様が作つてくれた料理は全部美味しかつたのです！その後、デルタはお日様が暖かくてそのまま寝てしまつたのですが、とても心地よかつたのです！

また行きたい！と思つていたのですが……

「え……エル様行つちやうのですか……？」

「うん、これ以上休む訳にもいかないからね」

次の日、エル様が王都に行つてしまつという話を聞いて、デルタは足元が崩れるような感覚に襲われたのです。

エル様は王族の従者になつて王都で色々情報を集めている、とアル

ファ様から聞いていたのでいつかは戻つてしまふというのは分かつていただのですが、いきなりすぎなのです。

——まだエル様とたくさん修行したい。

——エル様にたくさん褒められたい。

——エル様とまたピクニツクに行きたい。

そんな想いがどんどん込み上げてエル様にしがみついて「行つて欲しくない」と駄々を捏ねてしまつたのです。エル様はそんなデルタのわがままに呆れる様子もなく、頭を撫でながら「今度戻つたらデルタの言うこと何でもしてあげるから、それまで我慢できる?」と優しい声で言われて、それでやつと落ち着くことが出来てデルタはエル様から離れました。

エル様は小指を出して「約束しよう」ということでゆびきりげんまん?つていうのを教えてデルタとやつてくれたのですが、流石に針を千本もエル様には飲ませたくなかつたので、そのところを「沢山遊んでもらう」に変えたのです!エル様は驚いた顔をしてましたけど、すぐに笑みを浮かべて「デルタらしいね」と言つて約束を交わしてくれたのです。

その日は笑顔でエル様と別れることが出来たのですが、段々寂しくなつてエル様が王都に戻る日にはつい泣いてしまつたのです。

でもその時丁度アルファ様がやつてきて、「エルから貴方にプレゼントよ」と紙袋に入つたものをデルタに渡してくれました。

エル様からのプレゼントと聞いてすぐに開けてみると、そこには首輪があつてちょっと不思議に思つてると、アルファ様が説明してくれたのです。

この首輪みたいなものはチョーカーというアクセサリーのもので、エル様がデルタが寂しくないようにと街でたくさん時間をかけて考えて買つてくれたもの、というのを教えてくれたのです。

エル様は優しくて温かい人ですが、なんかずるいです。

デルタは今日もエル様のチョーカーを付けて修行を頑張るのです

!!

\*\*\*\*\*

一方でルイスは仕事先で自分に宛てがわれた部屋にて。

「あ、アレクシア様……？」

「あつ……」

「い、一体何を……？」

自分のベッドの上で布団にくるまる主を見てドン引きしかけていた。

## 番外編：アレクシア・ミドガルの日記

%月・日

ルイスが無期限の休養の為にここを出てから一日が経った。ルイスがここを出たとお姉さまからか聞いた時、辞めてしまつたのかと思つたが、執事長が、あくまで体調と心が休まるまで実家に帰らせた、と説明してくれたためちょっとだけ安心した。

それでも、最初は驚いて中々受け入れられなかつた。けど別に私はあいつが居なくとも普段通り生活できる、と思つていた。

気がついたら私はあいつが休憩時間に入つてゐる時間帯にあいつを探しに行こうとしてしまつたり、勉強中に分からぬところがあつた時あいつに聞こうとしてしまつたりと無意識にあいつがいることを前提に生活してしまつていた。

多分あいつが居ないことにまだ慣れていないだけなのだろう。丈夫、暫くすれば普通に生活できる。だから、寂しいなんてことは無い。あいつはただの従者で、彼の年齢を考えれば長期の帰省だつて有り得る話。それが急に来ただけだ。

%月>日

日記を書こうとするなどうしてもあいつのことが浮かんでしまい、書いていなかつた。でも、あのバカがいないという違和感が日に日に増していき、ついに我慢できなくて書いてしまつた。

ルイスは今何をしているのだろうか。もう家に着いて休んでいるのだろうか、それとも性懲りも無く鍛錬でもしてるのだろうか。

そういえば、ルイスは何故あそこまで鍛錬をしていたのだろうか。父親が魔剣士騎士団に所属している、というのを聞いてはいるがそれに憧れて鍛錬しているのだろうか。でも、あそこまで鍛錬する理由にしてはちょっと薄い気がする。

……私、ルイスのこと知つてるようであまり知つてないのね。

あいつは、私の本性を知つても主として、一人の人間として見てく

れていたのに。

%月「日  
やつてしまつた。

%月」日

昨日、つい我慢できなくてルイスが使つていた部屋に入つてしまつた。あいつがここを出てから1週間以上経つてゐるはずなのに、ほんのりあいつの匂いがした。

実を言うと、私はあいつの匂いが嫌いじやない。認めるのは癪だけどあいつの匂いを嗅ぐと何だか心が落ち着く感じがする。他の男性の匂いはあまり好きにはなれないのに、なんでかしらね。

そうして部屋の中を見ていく中で特になんの意識もなく、彼が使つていたであろうベッドに腰かけた瞬間、比較的濃い匂いが私の鼻を通つた。

今考えてみれば、ベッドというのは寝る場所であつてその人の匂いが1番つきやすいところだ。でも、あの時の私はそこまで考えを巡らせることが出来ず、その匂いを嗅いでしまつた。

そして——（ここから先は黒く塗りつぶされている）

%月：日

一昨日から調子が少し良い。お姉様も「アレクシアが元気になつてよかつた」と安心したように言つてゐたけど、そこまで表情や態度に出ていたかしら。

今日は特にこれと言つて変わつたことはなく、ルイスがいないのを除けばいつも通りだつた。

そういうえばルイスの部屋はかなり味氣ない部屋だつた。生活に必要な最低限のものしかなく、本棚にあつた本も歴史学や戦術学といった面白みのないものばかり。あのバカは私が思つていた以上にバカ真面目で、休むことを知らない根っからの仕事人間なのかもしけないわね。

……もし、次会うことが会つたらあいつの趣味探しでもしてあげようかしら。そうすれば愛嬌も着くだろうし、何よりあいつの鍛錬癖も直せる可能性があるかも知れないから。  
早く会いたい。

\*\*\*\*\*

アレクシアはその日、人の目を盗んでまたルイスの部屋に行つていた。ルイスの部屋は定期的に掃除されているため、匂いは殆ど残っていないがそれでも彼女からしたらこの部屋に来ること自体が安らぎとなっていた。

そしてアレクシアはいつも通り部屋にやつてきて、少しでもルイスのことを知ろうと本棚にある戦術学の本や歴史学の本を読んでいたが、いくら歳の割には聰明な彼女でもつまらなくなり、読むのを辞める。

その後、彼女は決まってベッドの中に入り布団にくるまる。ルイスの匂いはないものの、彼が寝ていたベッドというのもあって安らぎを得ることが出来ていた。

それでも、まだ齢10の子供であるアレクシアにとつては、親しい友人みたいな存在でありながら、ありのままの自分を受け入れてくれたルイスがまだいないという事実はまだ重かった。

「早く帰つてきなさいよ……バカ」

目頭が熱くなるのをこらえるように、早く彼に会いたいという願いを込めた言葉を呟いたその直後——

——ガチャ

「え……!」

ドアが開く音がし、その音にびっくりした思わずアレクシアが飛び上がりながらドアの方を向くと。

「あー、流石にずっと座りっぱなしは堪え……た……」

「え……」

待ち人であるルイスの姿があつたが、その当の本人は目を丸くして

固まつていて、アレクシアもまだ帰つてくるとは思つてなかつたため  
固まる。

——ドサツ。

「あ、アレクシア様……？」

ルイスが手に持つていた鞄が落ちると、先に動いたのはその鞄を落とした本人であり、引きつった声を出す。

「あつ……」

アレクシアはそれで今の自分の状態を思い出し、その瞬間体が物凄く熱くなるような感覚を覚える。

「い、一体何を……？」

ルイスが口元を引き攣らせながら一步下がった瞬間、アレクシアは滲む視界の中全力で彼の方へ接近し——

「忘れろおおおお!!」

その顔面に今の自分が持てる力を最大に込めた一撃を思いつきり叩き込んだのだつた。

%月 &amp; 日

ありのままに今日起こつたことを書く。

俺は職場に戻つて執事長に挨拶をした後、部屋に戻る途中にあつたアイリス様と「貴方がいなくなつてからアレクシア、ちよつと元気なかつたのよ」という信じ難い話を聞いてからフォローでも入れておくか、と思つて部屋のドアを開けた直後からの記憶が無い。そして気がついたら、アレクシア様に膝枕されていた。

夢かと思つてもう一度寝ようとしたら「あら、そこまで私の膝枕が氣持ちいいのかしら、タマア?」という嬉しそうな声が上から聞こえてきて、現実だと分かると同時に急いで頭をどかして謝つた。

普通に考えてみて主人、しかも王族に膝枕させるとか流石に不敬すぎる。そう思つて謝罪をしたのだが、当の本人はちよつと残念そうな様子であつた。恐らくもう少し寝ていたらそれを使つて無茶ぶりしようと考えていたのだろう、油断も隙もねえなこの王女。

とりあえず帰省することを直接報告できなかつたことへの謝罪をすると、「誰が主か分かつてないようねえ……罰として明後日私と付き合つてもらうわよ」というありがたいお言葉をいい笑顔で告げられた。

俺明後日何をされるんだ……マジで怖すぎる。

そういうえば、去り際に「部屋に入る時のこと覚えてる?」って聞かれたけど……その時の記憶が無いのはアレクシア様が関連してることだよな。気にはなるけど、俺がその考えに至るリスクを考慮した上で聞いたはずだし、その上で聞いてきたということはそれほど思ひ出して欲しくないことなのかも知れない。

部屋の中を調べた感じからしても、変わつたどころとかは無かつたし聞かなくてもいいか。本人が嫌がるのを分かつてゐるのに聞くほど心狭いわけじやないし。

。月☆日

アレクシア様の従者としての生活がまた再始動した訳だけど、あの  
人何となく優しくなった気がする。いや、人をペット扱いするのは変  
わらないのだが、こう言葉の棘と言えばいいだろうか？それが柔らか  
くなつた気がする。

もしかして、俺が倒れたのが影響してる？いや、でも俺がぶつ倒れ  
たのは俺の自業自得だし、アレクシア様が気にする必要ないはずだし  
……考えるだけ無駄か。

そして明日のことなのだが、どうやらお忍びで街に出ること。  
そして俺はその付き添いという形らしいんだが何でGOサイン出し  
たねん、と思い執事長に聞いたところ、騎士団の何人かは遠くから見  
守る形で出しておくから安心していいと言われた。

うーん、まあそういうことなら大丈夫なのかもしれないけど……念  
の為スライムスースとスライムソードを持つていくか？いや、それで  
シャドウガーデンのことバレたらまずいし……うーん、どうするべき  
か。

\*\*\*\*\*

(結局、何もいい考えが思い浮かばなかつた……)

そして来てしまつた当日、ルイスはアレクシアから指定された集合  
場所で、寝不足で上手く回らない思考の中ぼーつとしていた。結局、  
ルイスはシャドウガーデンのことがバレるリスクの方を重視し、スラ  
イムスースとスライムソードを持つてくることは無かつた。何処に  
ディアボロス教団の目があるかが分からぬ現状、持つてくるのを諦  
めざる負えなかつた。

もつといい手段があつたんじやないか、とドツボにハマついていたル  
イスであつたが、突如背後から肩を叩かれ反射的に後ろを向こうとし  
た瞬間、頬に何かが当たる。

「引っかかったわね？ふふ、こんな単純なことに引っかかるなんて鈍

感じやないかしら？」

「はあ。やつぱり、アレクシア様でし……た……？」  
「どう？ 似合つてるかしら？」

頬に当たつたのがアレクシアの指であり、そして古典的なイタズラに引っかかったことをルイスは把握すると同時に、ワインクを飛ばしてきた主の姿……厳密に言えば服装を見て固まつた。

端的に言つてしまふと、アレクシアは疎いルイスですら察するほど気合いの入つたオシャレをしていた。

ベストとプリーツスカートを合わせたフレッピースタイルというものを彼女は着ており。色は暗色系の色ではあるもののそれが逆にアレクシアの美しい銀髪を際立たせていた。前世で王族や貴族のパーティに強制参加させられて華美なドレスを身にまとつた美女達を見てきたルイスですら見惚れるほど美しく、そういうのにあまり免疫がない彼はそのまま固まつっていた。

「……ちょっと、何か言いなさいよ」

そしてそれに対し内心穏やかではないのがアレクシアだ。ルイスにデートの約束を取り付けてから、侍女に相談して色々試した上で1番自信が持てた服を着てきた。それなのにその相手は無言でこちらをじつと見てくるだけ。

（まさか、似合つてない？ いやでも一緒に考えてくれた侍女は似合つてる、つて言つてたし……もしかしたらルイスはこういう服装あんまり好きじゃないのかしら……）

どんどん悪い方向へ思考が飛んでいき、段々空回りしてしまつたのかと不安になつたところで、やつとルイスが動いた。

「あ、その、ごめん。あまりにも綺麗で、見とれてた……」

が、少し吃りながら出た言葉は陳腐な物な上に動搖しすぎて敬語ではないという始末。様子を陰ながら見守つていた魔剣士騎士団の面々も「あちやー」と言わんばかりに額に顔を当てたり、ため息を吐いて呆れていた。

だが――

「そ、そう。それならいいのよ。ほら、さつさと行くわよ」

「あ、アレクシア様!」

少女にとつてはとても嬉しいもので、褒められた恥ずかしさを誤魔化すように彼女はルイスの手を取つて歩き出した直後、止まる。そしてルイスの方へ顔を向ける。

「今日だけ敬語禁止よ。いいわね?」

「え、それは流石にまずいで——」

「い　い　わ　ね　！」

「わ、分かつた……」

アレクシアの圧に思わず了承の返事をしたルイスはそこではつと気がつくも時すでに遅く、期待した目でこちらを見てくるアレクシアを見て、少しだけ考え——

「アレクシア、今日は改めてよろしく」

「ええ、よろしく」

開き直つて彼女の名前を呼び捨てで呼び、呼ばれた当人は純粋な笑顔でそれを受け取つて歩き出した——手を繋いだま。

\* \* \*

それからルイスとアレクシアは王都の街を散策した。ルイスは事前に地図を読んで王都の街をある程度把握はしていたものの、実際に見たことは殆どなく、逆にアレクシアは何度か出たこともあつたため、結果的にはアレクシアがいろんな所へ連れていき、それをルイスが見て色んな感想を持つという感じになつていた。

そして、それは普段は主従として過ごしている2人にとっては何のしがらみもなくただの子供として過ごせた珍しい時間でもあつた。だからこそ時間が経つのは早い。

「もう、夕方なのね……」

陽の光は沈みかけ、街並みをオレンジ色に染める。それは夢のような時間が終わることを2人に告げていた。

「……アレクシア、そろそろ帰らないと」

「……そう、ね」

ルイスが控えめに言つた言葉にアレクシアは名残惜しそうに答える。元はと言えば、仕事人間なルイスが少しでも楽しく過ごせれば、疲れているのを知つていたのに止められなかつたことへのケジメとして思いついたこと。それでも、アレクシアはルイスの色々な表情を、ファッションセンスが残念なこと、実は紳士的などころと多くのことを知れたこの時間は楽しいものだつた。

本音を言えればまだ帰りたくない。ここで帰つてしまえば本来の関係に戻り、今日みたいに近い距離で雑談できる機会はほぼ無くなるだろう。頭では分かっていても、理解してそれを飲み込めるほどアレクシアはまだ大人ではなかつた。

そしてその想いが彼女の足を鈍らせ、表情にも出させた。ルイスはそんなアレクシアの様子を見て前世で出会つたとある國のお姫様を思い出した。魔物と心を通わせることが出来、同時に賢者に到れるほどの頭脳と魔力、そして王族という地位のせいで同年代の子供のような遊びや友人が出来ずに大人になつた少女のことを。

——ユウトさん……一人の友人として、また私と一緒に遊んで、下さいますか……？

同じだ、ルイスはそう思つた。あの時、叶わない願いだと決めつけて諦めるように言葉を紡いだ彼女と同じだ。転生しても大人になりきれなかつた自分は間違いだと分かりつつもそれを了承し、実際にバレた時はかなり面倒なことになつた。そして、今世でも同じことをすればバレた時あの時と同じレベル、もしくはそれ以上に大変な目に遭うのは分かつっていた。だとしても――

「アレクシア。一つだけ言わせてくれ」

「……何？」

「確かに今日みたいな日は中々ない、もしかすると一生来ないかもしない」

「……っ」

ルイスの現実を突きつける言葉に俯くアレクシア。

「でも、だからと言つて今日近づけた分の俺とアレクシアの距離が遠

くなるわけじゃないんだ

「……！」

——本当は心優しい少女を自らの保身の為に悲しませる選択肢は取れない。それが、ルイス・エアという人間であった。

「あとは誰もいない」「一人きりの時は今日みたいな感じに接する、とかもいいとは思うけどな」

「……ふん、ルイスの癖に生意氣よ……ありがとう」

珍しく生意気な笑顔と共に小声で不敬な提案をしたルイスにアレクシアはいつものような調子で言葉を返し、そして噛み締めるように聞こえないようにお礼を言う。

「それじゃ、帰ろつか。遅くなつて怒られるのはごめんだしさ」

「あ、ちょっと待つて。最後に寄りたいところがあるの」

「え、マジ？」

「マジよ」

「ええ……」

時間がもうやばいのを分かつてるのか？とルイスが心配になり始め、止めようかどうか悩んでいるところにアレクシアは振り返つて。「今日という時間を過ぎた証みたいな物を買いましょう？」楽しそうな笑みを浮かべた。

——その後、門限を少し過ぎてから戻ってきた少年と少女の首元に淡く光るネックレスがかかっていた。

## 7 冊目

。月♪日

今日のお出かけは凄かった。

まず、アレクシアがめちゃくちや綺麗だつた。いや、いつも綺麗だとは思うけど服装も相まって思わず見惚れてしまった。そのせいで感想を言うのが遅れた挙句、敬語が抜けるという大失態を犯してしまつたがアレクシアはそれを許してくれて、尚且つ今日だけは敬語はやめて、と頼まれた。めちゃくちや不敬だとは思うけど、押し切られて今日1日タメ口で話していた。

そこからはアレクシアがいろんな所へ俺を連れて行つてくれた。思えば王都の街並みを今日みたいにゆっくり見たのは初めてだつたせいで、子供みたいな反応をしてしまつた。今思うとちょっと恥ずかしいが、アレクシアはそれを見て満足そうな笑みを浮かべていたからいいだろう。

……そして帰り際、アレクシアの表情を見て俺は前世と同じことを選んだ。よく考えてみれば、どんなに性格が悪くても彼女だつてまだ子供であり、今日みたいに同年代の子供と街並みを歩くことなんて今まで経験したことがないからだろう。

改めて、俺は彼女の友として支えていこうと思う。従者としては勿論だけど、今日アレクシアと一緒に過ごしてこの思いは固まつた。元勇者パーティの一員なら心優しい少女一人ぐらい支えてみせないとな。

……そういえば、ペアルックのネックレスつてよくよく考えてみたらやばくね？

。月↓日

今日の朝、買つてもらつたネックレスを付けるべきかめちゃくちや迷い、最終的にパツと見では分からないように服の下にしまうような

形で身につけた。お陰でアイリス様といつた他の人達にはバレなかつたまでは良かつた。問題はアレクシアと会つた時だつた。

何と向こうはネットレスをガツツリ見えるように付けていたのだ！そして俺が付けてないよう見えたアレクシアは少し落ち込んだ表情を浮かべ、ちよつと目元がうるうるし始めた所で彼女だけに見えるようにネットレスを出して付けているところを見せ、なんで隠しているのかも説明した。

そしたら分かつてくれたのか、ほつとしたような表情を浮かべて「隠すのはいいけど、ちゃんと毎日つけなさい」という命令を頂いた。どうやらアレクシアにとつて昨日の時間の証であるネットレスはかなり大事なものみたいだ、これからはしつかり付けておこう。

なお、2人きりの時でも敢えて敬語で話していたら、なにか言ったそうにモジモジしているアレクシアは結構可愛く、ついからかつてしまつた。結果として顔を赤くしながら「タメ口で話しなさいよ！」と怒られてしまつたが、普段からあれぐらい愛嬌あればなあ……

### 。月・日

アレクシアとアイリス様の剣は対極にあるものだ。アレクシアは才能がないなりに努力を積み重ねた努力の剣で、アイリス様は才能を存分に活かした才能の剣。

誤解しないで欲しいのは、アイリス様が才能にかけて努力をしていない訳では無いということで、むしろ常人以上に鍛錬をしている。その賜物か、今の段階で彼女は並の魔剣士程度なら年上でもコテンパンに出来るほどの実力を持つている。

だからこそ、あの二人は比べられている。

今日の剣の稽古で俺が忘れ物を取りに行つてる最中の廊下で、使用者たちがアレクシアのことをアイリス様と比べて蔑んでいたのを聞いてしまつた。もしかしなくとも、アレクシアの性格があの歳で捻り曲がっているのはこれが原因なのではないかと思う。本當であれば、実際に聞いてみるとことなのがこれはかなりデリケートなところだ。変に踏み込んで彼女を傷つける訳にはいかない。

今、俺に出来ることは彼女のガス抜きに付き合うことぐらいしかない。まあ、それは別としてあの使用人たちには腰が抜けるほどの殺気をすれ違いざまにぶつけてやつた。大事な人をバカにされて大人しくできるほど俺は我慢強くないんで。

1週間ほどアレクシアとどんな話をしたのかというのを中心とした内容が続く。

。月\$日

今日はアレクシアが風邪を引いたのでその看病をずっとしていた。朝になつても起きてこないのが不安で周りが止めるのを聞かずに入部屋を開けてみれば、咳をして寝込んでいるアレクシアの姿。すぐに彼女のおでこに手を当ててみれば、熱が出ているとすぐに判断できる程に熱く後を追つてきたメイドさんに急いで医者を呼ぶよう指示を出し、その間に俺は執事長に事情を説明、水が入った桶とタオルを準備してもらつて医者が来るまで水を絞つたタオルを彼女の額に置き、熱くなつたらまた水につけて絞つたら額に置くを繰り返した。

数十分後にはかかりつけの医者が来てくれ、診断結果は季節の変わり目が原因と思われるただの風邪だつた。それにほつとしつつも基本的な世話は俺がすることになつた。流石に着替えや体を拭くのはメイドさんに任せたが。

そして本来は部屋に戻つている時間にも関わらず俺はまだアレクシアの部屋にいる。何故かと言うと、日記を書く1時間前に起きた彼女が小さい声で「おいていかないで」と言つて俺の服の端を掴んでいるからだ。

……あの「おいていかないで」は恐らく俺に対してもなく、アイリス様に対しても思う。2人は仲のいい姉妹で、楽しそうに話しているところや剣の稽古をしているところを見たことがある。でも、才能という不公平な物が2人の距離を少しづつ離していく、それが先程の言葉となつて出たのだろう。そして、その気持ちは俺もある程度は分かる。

先程様子を見に来た執事長に事情を説明してここで一晩過ごす許可は出たので、今日はこの状態で寝ようと思う。俺が傍にいるだけでも多少マシにはなると信じて。

……ちなみに、ご飯を食べさせている時のアレクシアはかなり可愛かつた。

\*\*\*\*\*

「待つて！お姉様、待つて!!」

——少女はひたすら走っていた。遠くなっていく、尊敬していく大好きな姉の後ろ姿に追いつきたくて必死に手を伸ばし、声を出しながら走っていた。しかし、姉は止まることも無ければ振り返ることすらせずどんどん進んでいき、距離はさらに離れていく。

「待つて……きやつ！」

それが嫌で少女は足をもつと動かそうとするも疲れで足の動きは鈍く、遂には転んでその場に倒れてしまった。痛みに顔を顰めながら前の方を見ると、そこに先程まで追っていた姉の背中は豆粒のように遠く追いつけないことが嫌でもわかった。

「お姉様……」

何で私はお姉様に追いつけないのだろう、どうして私に才能がないのか、どうして周りは自分と姉を比較してくるのか、そんな想いが彼女を蝕んでいく。そして口から弱々しく――

「おいていかないで……」

諦め半分でその言葉を出した時、急にその腕を掴まれたかのような感覚をした。驚いてそちらを見れば、自身の従者である少年が心配そうな目付きで立っていた。

「あつ……」

——立てるか。と言われたかのような感覚を覚えながらも、少女

は彼の手を借りて立ち上がる。少年はそれを確認すると彼女の方にいつの日か見せた優しい笑みを向けながらゆっくりと歩き出す。

それが、少女——アレクシアにとつてはとても心地よく、そして少年の顔を見ながら隣に立つよう歩き出し——

「……」

アレクシアは気がついたら起きたらいつも見る天井を見ていた。何か大事な夢を見ていたような気がするが、どんな内容だったかは思い出せない。

(……そういえば、風邪を引いて寝てたんだつけ)

アレクシアは朧気に覚えている記憶を手繕り寄せて自身の状態を思い出す。今は風邪特有のだるさや喉の痛みなどはまだ残っているものの、かなりマシになっている。とりあえず、体を起こそうとして自身の右手を誰かが握っていることに気がついた。誰なのだろう、と思い右側を見ると。

「ルイス……？」

「スー……スー……」

静かな寝息を立てながら椅子に座っている大事な従者の姿。自分のおでこにタオルが置いてあることから、ずっと自分のことを看病してくれていたのだろう。その事にアレクシアはバカ真面目な彼に呆れると共に、仕事だととしてもずっと傍にいてくれたことに嬉しさを感じ笑みを零す。

「本当、バカなやつね……」

アレクシアは嬉しそうに呟きながら、滅多に見ることの無いルイスの無防備な寝顔を彼が起きるまで見てしたり、頬をつついたりと好き放題するのだつた。

……なお、この後ルイスにも自分の寝顔を見られていたということに気が付き、恥ずかしさで赤面するまであと一時間。

。月・日

アレクシアが風邪をひいてから1週間経つたが、今日でようやく本調子になつたみたいで久しぶりのペット扱いに安心感すら覚えた。まあ、そんな彼女だがなんか距離が近くなつた気がする。

こう、なんて言えばいいのだろうか……ボディタッチが増えた感じもするし、話してる時も前より遠慮が無くなつた、はなんか違う。本当に上手く表現出来ないんだけど、とにかく距離が近くなつた気がする。しかも顔がいいせいできょとんとドキドキする。もし、分かつた上でやつてるとしたらどんでもねえ奴だ。勘違い少年が大量発生して、そこから万が一が起きる前に男は怖いつてことを分かせておくべきか？

そういうえば、アイリス様とも話す機会が増えた。何でもアレクシアの本性を知っているのにも関わらず、普通に接している俺のことが気になつた、ということなのだが……何故だろう、クレアさんと同じ気配がした。どうか、これが気の所為であつて欲しい。頼む、シスコンは2人も要らない。

。月十日

思い立つたが吉日、というわけで早速アレクシアに男は狼になる怖い生き物つてことを分からせるために頑張つた。とは言つても、異性にモテたことが無ければ、そういった雰囲気になつたことも無かつたためとりあえずそれっぽいことをしてみた。

具体的には距離を詰めて何か言い出したら誰もいないのを確認した上で、壁ドンして耳元で「そういう思わせぶりな態度は勘違いされるぞ？」っていう感じのことをめちゃくちゃ恥ずかしかつたが囁いてやつた。が、「勘違いって何かしら?」とからかいとかそういうの無しでの純粹な疑問が飛んできたため、教えてやつたらニヤニヤして「ルイスつたらそんな目で私のことを」と小馬鹿にする感じで言い出し

たので、「それはない」と即答したらグーパンが飛んできた。女子つて分からねえ……。

まあ、とりあえず当初の目的である勘違い云々は分かつてくれたと思うし、大丈夫だろ。アレクシアは性悪ではあるが、馬鹿じやないからな！

。月×日

どうして効果が全くないんですか？というか、寧ろ余計に悪化したと思う。あれか、俺が即答したのがそこまでムカついたのか？乙女のプライドが許さない的なアレか？

一体俺はどうすればいいんだ……

まあ、これに関しては未来の俺がどうにかしてくれると信じて別のことを書こう。

実は、今日シドからの手紙と共にデルタからの手紙が届いたのだ。文字はちょっと乱雑で読みづらかったけど、内容を読まなくとも元気そうということが分かった。

内容としてはアルファに手伝つてもらいながらこの手紙を書いたこと、俺との修行を参考に休む日をちゃんと入れていること、料理は難しくて大変だけど俺に美味しい物を食べて欲しくて頑張っていること、そしてチョーカーは毎日つけて大事にしているというものだった。

本当に元気そうで安心したし、料理を学ぼうと頑張つてすることは驚いたし、調味料とかを入れすぎてアルファにため息をつかれているところがありありと浮かぶ。何より、チョーカーを気に入ってくれたようで本当に良かつた。

そういえば、前世でもあの姫やユラはネットクレスとか首に付けるものを買おうってよく言つてたな。もしかして女性つて首元のアクセサリー類を好む傾向にあるのだろうか？アレクシアもネットクレスだつたし……いや、もしかしたら俺の周りにたまたまそういう人が揃つてるだけかもしれない。

今度、アレクシアにでも聞いてみるか。

とりあえず返事の手紙はこつちも元気にやれていることと、王都をアレクシアと回った時に連れていきたいと思つたところがあつたから機会があれば行こう、つて感じにするか。シドの方は……乙女心分かるかどうかって感じにするか。もし分かるならぜひひご教授して欲しいし。

……アレクシア、途中から様子がおかしかつたけど大丈夫だろうか。聞いて欲しくなさそうだつたからあの時は聞かないでおいたけど、強引に聞くべきだつただろうか。

\*\*\*\*\*

私はお姉様のことが好きだ。でも……

「ルイス、最近アレクシアと仲がいいようだが詳しく述べてもいいかな？」

「あの、アイリス様？なんで腕をがつちりと掴んで……距離が近いです！」

ルイスと仲良くしてゐるのを見ると胸がムカムカしている気分になる。いや、お姉様に對してデレデレしているルイスもルイスだ。あのバカは私の従者つていうのを分かつていいのかしら？

それがムカついたため腕を掴んでみたり、ちょっとした時に体を寄せてみたりしてみたが、当の本人は「アレクシア様、はしたないですよ」だの「アレクシア様、もしかして熱でもあります？」と言う始末。

……決めた、あいつが私にデレデレするまで色々試してやる。

そう決意した次の日、早速周囲に誰もいないタイミングでルイスの腕に自身の腕を絡ませた。すると、ルイスは周りを少し見渡したあと私のことをぐいっと引っ張つて壁に優しく私を寄りかかせると、壁に手を当てた。

「へ？」

突然のことに目を白黒させていると急にルイスの顔が近づいてきた。え？ ちょっと待つて、これつてもしかして……！

「アレクシア。そういう思わせぶりな態度は男を勘違いさせるからも

うやめておけ」

「!？」

耳元で囁かれるように言われたことに驚き、思わず体が強ばる。想像したこととは違ったけど、ルイスを大扱いしてる時とはまた別の感覚が走つて困つたけど……男を勘違い？

「ねえ……その男を勘違いってどういうことなの？」

「は？」

「いや、だからルイスが言っていることの意味がわからないのよ」「……マジ？」

「マジ」

私の反応が予想していたものと違つたのか、ルイスは急にうんうん唸り出して説明を始めた。曰く、私がとつていた行動は「自分つて実は好かれてるのでは？」と男性側が勘違いしてしまいうようなものばかりで、将来的にややこしい事態になるのを防ぐためにもやめた方がいい、ということ。

最初は何を言つているんだ、と思つたがやけに真剣な表情で言われたためとりあえず頷いてはいたんだけど、そこでふと思う。態々注意してきたということは、ルイスはもしかして私のことをそういう目で見ているんだろうか。

興味も湧いたし、上手く行けばこれでルイスをからかえると思い私は自分で分かるぐらい口元が緩んだのを自覚しながら。

「ルイスつたらそんな目で私のことを見てた——」

「いや、それはない」

言い切る前に断言しやがつたことにムカついたので、思いつきり殴つてやつた。

そして次の日。

「……なあ、アレクシア。昨日話したこと覚えてないのか？」

「覚えてるわよ。あなたが私のことを全く意識してすらないつてこと もねえ？」

私はルイスとの距離を改めなかつた。ここであいつの言う通りに

したら、なんか負けた気分になるし、何より自分のことを意識しない事実がとてつもなく腹が立つたのであいつが反応するまで続けてやることにした。

「……頼むから離れてくれ。手紙が読めないんだ」

「何? 私よりも優先するの?」

「はいはい、分かつたよ……」

自分でも理不尽だと思う発言をルイスは軽く流しながら、手紙を懷にします。そういうえば、こいつと手紙をやり取りしている人物は誰なのだろうか。幼馴染とは聞いていたが、性別までは聞いていない。ここまでこいつが嬉しそうにするつてことは、さぞ仲良しな——

ズキン

「……っ」

「? アレクシア、どうかしたのか?」

「い、いや。なんでもないわよ」

突然胸に鈍い痛みが走った。それで思わず声が出てしまったのか、ルイスがすぐに私の心配をしてくれたものの、反射的になんでもないと返してしまう。念の為、胸を触つてみるがどこも痛みを感じない。それじゃあ今のは痛みは一体……?

「……ならいいけど、あんまり溜め込むなよ? 話ならお前が話したいと思つたタイミングが来たら聞くからさ」

「……ええ、そうするわ」

ルイスがこう言う時は、大抵氣づいていながら私が話したくないのを察してくれたことを意味している。本人は意識していないのだけど、話したい時は強引にでも聞いてくれるし、逆に話したくなつ時はすぐに引いてくれている。半年もいればこれぐらいのことは分かる。これに関しては向こうも同じことだろうけども。

結局、その日はあの痛みの原因は全く分からなかつた。

そしてルイスがあの手紙を読んで私が見たことない表情を浮かべているところ、私やお姉様以外の女子と楽しそうにしている想像が頭から離れず、胸がただ痛くて、私は滲む視界の中一緒に買ったお揃いのペンドントを胸に抱えこむように握りながらベッドの中で丸くなつた。

・月÷日

デルタからの初めての手紙に返事を出してから4ヶ月程が経った。あの子はどうやら俺との文通にハマつたらしく、月に2回の頻度で手紙を出すようになつた。それ 자체は個人的には喜ばしいことだし、デルタからの手紙は読んでいる身としては微笑ましく感じる。

しかし、問題はアレクシアが俺が手紙を受け取る度に傷ついているかのような表情を浮かべることだ。気がついたのは2ヶ月前に手紙が来たことをメイドさんから教えて貰つた時、メイドさんの後ろで目を見開いて茫然としているアレクシアを見たからだ。以来、なるべく彼女の前では手紙の話をしないように気をつけてはいるのだが、運悪く聞かれてしまうことがある……といった感じだ。

色々考えたが、もしかしたらアレクシアは自分以外で俺と親しくしている人物がいることにショックを受けているのかもしれない。いや、自分でもかなり自意識過剰な考えだとは思うが、俺という存在はアレクシアからしたら初めて出来た同年代の友人ということを考えるとあながち間違いではない気がする。

だからといって俺が出来ることが思いつかないのも事実。手つ取り早いのは、シドやデルタ達のことを紹介することなのだが、これをやつてシャドウガーデンのことが世間に露見したら色々と面倒くさいことになるのは明白だ。

……だめだな、今もこうして考えているがいい案が出ない。アイリス様に相談してみるのも手かもしれないな。

・月÷日

アイリス様とアレクシアを比較して、アレクシアを蔑むようにコソコソ言う奴らは結構いる。これに関しては腹立たしいと感じるし、陰口を叩くのも許せないがまだ分かる。だが、あの野郎共アレクシアが近くにいるのにも関わらず言いやがつて！

あいつは気にしてない様にしていたけど、肩が震えていたのを俺は見逃せず、本当はあの馬鹿共にそれ相応のことをしようと思ったがそれを抑えて彼女の手を取つて、今となつてはお約束の場所となつた俺らだけの隠れ場所に連れていつた。

突然のことにはアレクシアは驚いていたし、途中どこに行くのか聞かれても俺が無言だつたせいで怖がらせてしまつたのか少し怯えてしまつていた。それに申し訳ないと思いつつも、彼女を抱きしめ優しく背中を叩いた。アレクシアは普段の言動から発散出来る側の人間だと勘違いされがちだが、本当は溜め込みやすい。そして少しでもそれを何とかしたいと思つて、つい前世でレイにやつたことをやつてしまつたが、アレクシアは「バカね」と言いつつも声を押し殺して泣いた。

泣ける時に泣いた方がいい。泣くことは決して悪いことじやないから。

・月Ⅱ日

今日何とか時間を見つけてアイリス様と話すことが出来た。が、あの王女様もどうしたらしいか分からぬといふことで2人でうんうん唸る羽目になつた。結局、もう1回2人でお出かけとかしてみたらどうだろうか?という話になつたのだが、自分はともかくアレクシアは王族だ。そんな簡単にホイホイ外に出ることが出来る訳では無い。しかし、これ以外思いつく手段がないのも事実。

帰省するまであんまり時間ないし、マジでどうしたものか。

それはそれとして、なんかアレクシアが俺と顔を合わせる度。ブイツと顔を背けていた。うーん、やはり前世と同じ感覚でやつたのが間違いだつたか……?いやでも、あそこで何もしないなんてことは出来なかつたし……

まあ、未来のことは未来の俺に任せよう!今日は寝る!!

\*\*\*\*\*

アレクシアにとつてルイスという人間は、姉以外に初めて出来た「素」をさらけ出せる人物でありながら、自分を『アイリス王女の妹』としてではなく『アレクシア・ミドガル』という一人の人間として見てくれた、初めての友人である。そう至るまでにアレクシアはルイスの色んな表情や性格を知り、自分がが彼のことを沢山知っていると思つていた。

——しかし。

「ルイスくん。またお友達からお手紙が届いているわよ」

「懃々ありがとうございます。全く、結構な頻度で送つてきて……」  
自分には向けられたことの無い、別の優しい笑みを浮かべるルイスを見てアレクシアは前に感じたような痛みとともに胸に穴が空いたかのような感覚に襲われた。恐らく、いや確実にその人物は自分が知らないルイスを知つている。下手をすれば、自分が知つていたと思つていた彼を既に知つている可能性だつてある。

そのことにアレクシアは毎回胸に走る鈍痛を無視して、ルイスの前では普段通りに接していた。

だが、ある日アレクシアは自身に向けられている悪口をルイスにも聞かれてしまつた。普段であれば思うところはあつても聞き流せていたのに、それをルイスにまで聞かれてしまつたこと、そして今まで耐えていた分が積み重なつていてそれが無意識に体に出てしまつていた。

「アレクシア、ちよつと来て

「は？ちよつ、ルイス？」

アレクシアは人がいる前にも関わらず、敬語で話さなかつた上に自分の手を力強く握つて強引に歩き出したルイスに困惑した。

「ちよつと！いきなりどうし——

「……」

ルイスに行動の意図を聞こうとしたところで、怒りの感情を隠しきれていなかつた彼の目を見て思わず息を飲む。無論、アレクシアとルイスに怒られたことはあるが、必ず柔らかい部分は残つていたし、寧ろ

温かさがあった。

それが今はどうか、まるで鋭利な剣を連想させるかのように鋭く、そして冷たい目をしているルイスは初めてだ。アレクシアはその事に少し恐怖を覚えていると、急にルイスは立ち止まつた。

ここが目的地なのだろうか、と思い周りを見渡すとそこはルイスが休憩時間に鍛錬をしているところで、ここはアレクシアを除いて知つてる人はいない正に秘密の場所だつた。

「……ルイス、私をここに連れてきて一体何を――」

言葉は続かなかつた。何故なら急にルイスがアレクシアを優しく抱きしめたからだ。突然のことにはアレクシアは戸惑うと共に、このままではまずいと感じルイスから離れようと彼の肩に手を当てようとする。

「アレクシア、我慢しなくていいんだ」

「……っ！」

その前にアレクシアを労わるような優しい声が彼女の鼓膜を搖るがす。息が詰まりそうになつたところでルイスは彼女の背中を優しく叩き始める。

「辛いなら泣いていいんだ。じゃないとアンタの心が保たなくなつちまう……この周りはあまり人が来ないし、音も聞かれづらい。だから今だけは我慢するな」

「……バカな、やつね……」

限界だつた。

「……うん」

「ほかに、ひとが、いるのに……よびすてで、よんで」

「……うん」

「あげく、ごうい、んに、つれだして」

「……うん」

「あとさき、かんがえ、なさいよ……このバカ……！」

アレクシアは精一杯の抵抗としてルイスに悪態をつきながら静かに涙を流した。そして同時に、ルイスという人間の長所<sup>短所</sup>がわかつた気がした。

そしてその夜。

(もしかして、私つて結構凄いことされたんじゃ……!?)

ベッドの中で今日ルイスにやられたことを冷静に思い返したせいで、恥ずかしくなつて悶える羽目になつた第2王女の姿があつた。い

# 10 冊目

・月々日

アレクシアの調子がおかしくなつてから4日経つたが、一応完全にとは言えないが元に戻つた。これに関しては良かつたが、何故か休憩時間中に例の場所で恒例の金貨投げをやつた後にハグを要求してきた。

どうして……

まあ、息抜きになるならいつかということでハグをしたのだが……。そのアレクシアって結構な美人だし、めっちゃいい匂いするし、なんか柔らかい。前やつた時はそういうの全く意識なんてしてなかつたから、自分でも分かるくらい心臓の音がやばかつた。そしてそれが密着しているせいもあって向こうに伝わつていたらしく、途端にアレクシアはニヤニヤしだして「心臓の音がすごいわよ？まさか私の事意識して！」とからかい出した。ちよつとイラツとしたので耳元に息を吹きかけてやつたら可愛い悲鳴を出してくれたので、それでからかい返して分からせてやつた。お陰で「何すんのよ！この変態!!」という有難くとも何ともない言葉を頂いたが。

てか、今思つたけどアレクシアを分からせたのつて今回のが初めてな気がする。まあ、これまでを考えると分からせるタイミングもなければ隙もなかつたから仕方ないのかもしれない。次はどうやって分からせようか……思いつかないし、暫くはハグした時にカウンターする感じでいいか。

・月々日

明後日には朝一でここを出て実家に帰ることをアレクシアに伝えるのを忘れていたため、話したのだがそれ以降彼女は何かを考えるよに黙り込むことが多かつた。教えるの遅かつたと思い謝つたのだが、反応的に恐らくそれが原因では無いのが確かだ。

そうすると何を考えていたのか、もしくは何が原因だつたのかとい

うことになるのだが……さっぱり分からなかつた。

ただ今日もハグはした。3度目の人生だというのに女性への耐性がないことに色々悲しくなる。本当に顔がいいって卑怯だと思うし、何でアレクシアは何ともないんだよ！俺は相変わらず心臓バクバクだつていうのに！

あと人の匂い嗅ぐのはやめてくれませんかね？気づかれてないと思つてるだろうけど、「スーサースーハー」めっちゃ聞こえてるんだよ。言つたらろくでもないことになるのが何となく予想出来たからスルーしたけど、注意した方がいいのかな。未来の旦那様相手にそんな事して引かれたりしたら目も当てられんし……うーん。

とりあえず暫く様子みて、あまりにも酷そuddたら覚悟を決めて直しに行くしかない。アレクシアをノーマルのままに留められるかは俺にかかるわけだし、頑張らんと。

・月、日

今日はいつになくアレクシアとの距離が近かつた気がする。ハグの時間もなんかいつもより長かつたし、俺がもう離していいかつて聞いても「まだ」と言わされて休憩時間終わるギリギリまで粘られた時は死ぬかと思った。

理由を聞いても「別にいいでしょ」と一蹴され教えて貰えなかつた……アルファあたりに聞けば分かるだろうか？いや、アルファとアレクシアの思考回路とか感じ方は違うだろから一概にそうとは言えないな。

考へても仕方ないし、これは未来の俺が何とかすると信じて今日は寝よう。明日は朝イチで出ることになつてるし。

\*\*\*\*\*

コンコン

「ん？」

日記を書き終わつたところでノック音が部屋に響きわたる。時刻は21時を回つた頃で今までの経験上、尋ねてきた人物が誰なのか、

そしてその理由は分からなかつた。だが分からぬにしてもすぐに対応しないのは流石にまずいと思い、ルイスは日記を閉じてからドアを開けに行つた。

「はい、どなたです——」

「こんばんは、ルイス」

「……」

——バタン

ルイスはドアを閉めた。多分これは夢であるか、もしくは疲れて幻覚を見ているかのどちらかだろう。ルイスはそう思つてベッドに向かおうとしたが、念の為もう一度ドアを開けた。

「……」

「ルイス？私の顔を見た瞬間閉めるなんて——」

——バタン

「あんた……いい度胸してるわねえ……？」

——あ、俺死んだかも。

開かれたドアの先で青筋を浮かべながら笑う主を見てルイスは他人事のようにそんなことを思つた。

——そしてその数分後。

「……」

「……」

同じベッドで背中合わせの状態で寝ているルイスとアレクシアの姿がそこにあつた。

(いや、こうはならんやろ!!)

ルイスは現状に対してもう一つも何でこうなつたのかを改めて考える。並々ならぬ怒氣を伴いながら入つてきた、と思ひきや「眠れないから一緒に寝させて」と啞然とするルイスを無視して堂々とベッドに入るアレクシア。そんな彼女は現実を受け入れられずに固まるルイスを見て「早く入りなさいよ」と声をかけ、そしてそれでやつと気がついたルイスは言われるがままにベッドの中に入つた。

(流石に今から追い返すのはまずいし、とりあえずなんで来たのか理由聞くべきか?)

「……何も聞かないで」

ルイスがアレクシアの不可解な行動の理由だけでも聞こうと思ったところで、彼の後ろから震える手が回されてそのまま抱きつくような体勢になつたと同時に弱々しい声が聞こえてきた。

「アレクシア?」

「…………」

どういうことが、という意味で名前を呼ぶも帰つてくるのは無音。それが意味することにルイスは軽く息を吐いてから体勢をアレクシアの方に体を向けるように変えて片手は彼女の背中に回し、残つた手は彼女の頭を優しく撫でた。

ルイスはアレクシアが何故來たのか、というのをもう聞かないことにした。彼女が言いたくないというのなら無理に聞きたくは無いしこうすることで彼女の心が安らぐならいいだろうと思つていた。

そして同時に、本当に彼女のことを支えられる存在が出来るまでだろうとも考えていた。従者である自分はいつまでもアレクシアの隣にいられる保証は無いし、それに将来的にふさわしい男と彼女は人生を共にすることになる。それにシャドウガーデンのことやディアボロス教団のことを考えると、表の世界から姿を消して裏の世界へこの身を入れる可能性だつてある。だからこそ、ルイスはアレクシアのことを支えられる人物が早く現れることを祈り。

「……大丈夫だアレクシア。俺はずつとお前の味方であり続けるから、今だけは何も考えずゆつくり休め」

心優しい彼女が報われるようとにと願つた。

\* \* \* \*

「♪」

「……なあ、なんでデルタのやつあんなに嬉しそうなんだ?」

一方その頃、隠れ家にて首のチョーカーを触りながら鼻歌を歌うほどにテンションが高いデルタを見てゼータが若干引き気味に近くにいたガンマに聞く。ゼータが今まで見てきた中で、デルタがあそこまで元気なのは初めてであり気になつてしまっていた。そしてそれを察したのかガンマは少し笑みをこぼした。

「エル様にそろそろ会えるからだと思うわよ？」

「あー……」

ガンマの言うことを聞いたゼータは納得したかのような表情と共に、額に手を当てた。デルタがルイスに対しても慕っているのは新規に入った者以外のシャドウガーデンのメンバーは周知の事実であり、そしてルイスの為に手紙を送るためにアルファにお願いして手伝つてもらつたり、料理をやつてみたりとあれこれやつているのもあつてどれだけ慕われているのかというのも知られていた。

「それにしてもエル様つて凄いよな。あの人はあの人で第2王女の従者として働きながら情報を集めてるんだから」

ゼータは感心を込めてそう言う。しかし、実態としてルイスはディアボロス教団に関しての手がかりに関しては調べているものの全くないのが現状であり、最近に至つてはもう諦めている。尤も、王都での彼を見ていない彼女らはそのことを知らないのだが。

「もうすぐエル様会える♪♪

「……重症じゃないか、これ」

「……私もそう思うわ」

鼻歌では收まらず、ついには実際に歌いながら尻尾を振つているデルタを見てゼータとガンマは同じ感想を抱き、そしてそんな彼女をここまで落としたルイスを色んな意味ですごいと感じ、同時にゼータは何となく嫌な予感がしていた。

(……気のせいだといいんだけど)

そんなことを思いながら、いつまでも寝る気配のないデルタに痺れを切らしたアルファが彼女を叱るのを見て、ゼータは何事も起こらないことを祈りつつ眠るのだつた。

・月～日

こつちの地元まで鉄道の線が通つてくれたお陰で一日で着くことが出来た。馬車だと5日かかることを考えたら人類の発明というのは正に凄いの一言に尽きる。家に着いたのは夜だつたが父さんたちは快く俺を出迎えてくれ、労いの言葉をかけてくれた。そして夕食をとつて軽く汗を流したあとこうして日記を書いている訳だけど、これを書き終わったあとは隠れ家に行つてデルタたちに会いに行く予定だ。

当初は明日の昼の予定だつたんだけど、シドは夜に会いに行つてることが多い+デルタが手紙で俺と会うのが楽しみということを書いてくれていたというわけで、サプライズとして驚かせるのもありかと思つて決めた。

あまり書くと時間が無くなるからここまでにしよう。デルタたちに会うのが楽しみだ。

・月一日  
つかれた

・月?日

昨日の日記が一言で終わつてしまつたがこればっかりは許して欲しい。色々整理したいから日記に書きながら一昨日の夜からの出来事を記していく。

まず、俺はスライムスースを着た状態で家をこつそり出て隠れ家の方に向かい、デルタ達に会いに行つたのだがなんと普通に出迎えられた。誰にも伝えていなかつたため驚いたが、アルファが言うには「エル様がもうすぐやつてくる!」とデルタが騒ぎ出し、アルファが何度も注意しても頑なに譲らなかつたため半信半疑で準備をしていたとのこと。うーん、ますますポチすけを思い出すような事をするね。

まあ、ここまででは良かつたのだが問題は再会した際に飛び込んできたデルタが俺の体にグリグリ頭を押し付けたと思つた瞬間、急に固まつた。それに嫌な予感を感じた時には既に遅く、デルタは顔を上げると「エル様、この匂いなに?」と酷く冷たい声で聞いてきた。汗臭かつたのかと思い謝罪したが、どうやら違つたらしく「エル様以外の匂いがした……誰?」と無表情で聞いてきていた。敬語が抜けているあたりよっぽどそれが嫌だつたのだろうか。とりあえず本当に心当たりがないこと、体を洗つてくることをデルタ達に告げ、めちゃくちや寒かつたが近くの川に行つてめっちゃ体を洗つた。それから戻つてきたあとは、落ち込んではいるもののいつもの調子に戻つたデルタがそこにおり、「困らせてごめんなさいなのです」としょぼんとした感じで頭を下げて謝つてきた。正直、デルタに落ち度はないと思っていた俺はすぐに頭をあげるように言つて、この前した約束とは別で言うことを聞く、と言つた。こんなんでデルタの機嫌を取ろうとしているあたり、俺自身ですら不誠実だと思うがこれ以外彼女に対してもやれることがないのも事実だった。

結果としてデルタはそれを了承してくれた。が、それをすぐ行使してきました。内容は「王都に戻るまで夜は一緒に寝て欲しい」っていう形で。

うん、マジで思考が止まつた。なお、それを聞いていたアルファは目を丸くして驚いたような表情を浮かべ、シドは親指を俺に向けて立て、ゼータは額に手を当て「嫌な予感の正体はこれもだつたか」と咳き、他の面々は目を丸くしていた。

とりあえずここまでが一昨日の夜の出来事。

そして昨日、デルタに言うことを聞くと言つてしまつた以上、俺は何とかしなければならなくなつたのだが、最終的に俺が父さんにデルタを街で知り合つた友人ということにして、訳ありなため暫く泊めてあげて欲しいという形でゴリ押した。自分でも苦しい言い訳だつたのだが、父さんは特に深追いはせず了承してくれ、使用者の皆も考える人は何人かいたが納得してくれたため彼女を堂々とウチに招き入れることが出来た。

だが流石にデルタのことをそのまま呼ぶわけにはいかないので、急遽ユウナと呼ぶことにし一緒にご飯を食べたまでは良かつたのだが、なんと俺がお風呂はいつているところに乱入してきたのだ！まだ幼いとはいえ、デルタは美少女だ。そんな子が全裸でいつもの様に抱きついて体を擦り寄せて来るのだ。これは女の子としてまずいと思うので、ちゃんと注意したのだが珍しく強情で、説得している間に湯冷めして風邪をひきそうだと思いその場での説得は諦めて一緒に入り、頭を洗つてあげた。てか、使用人の皆は気づかなかつたのかよ……。

そしてその後一緒のベッドに潜り込んで「エル様、暖かいのです！」と呑気に言いながら抱きついてきたデルタのことを意識しないように頑張つたのだが、悲しいかな女性特有の不快にならない程度のいい匂いと柔らかさ、そして幸せそうに寝ている彼女のお陰で俺はあんまり疲れなかつた。

んで今日は冬の割には暖かく、日差しも良かつたのでデルタの提案もあってピクニックに行つてきた。お弁当に関しては「デルタが作る！」と言つていたので後ろから見守る形でその様子を見ていたのだが、以前一緒に作つた時と比べると当たり前と言つたらそこでおしまいだとは思うがかなり上達していた。まあ、それでもまだぎこちない部分や失敗してしまつたところはあつた訳だが、そこは勿論フォローしたし、上達しているところも褒めた。

味の方も良く、彼女が沢山努力したというのも分かるし、それを考えると自分が作つた物よりも何十倍も美味しく感じた。そのことを褒めたら尻尾を振りながら喜んで俺の体にグリグリと頭を押し付けてきたのだが。

その後はお互い眠くなつてきたのでお昼寝することになり、彼女は俺の腕を枕にしてすやすやと眠り始め、俺も彼女に上着をかけてから寝た。

それで今日は夕方になる前に起きてウチに帰り、案の定お風呂に突撃してきたデルタに説教するのを諦めて一緒に入り、今は日記を書いている。デルタは先にベッドに入つており、「早く寝ないの？」と言わ

んばかりに布団の隙間から顔だけを出してこちらを見つめている。  
とりあえずある程度整理は出来たので書くのはこれぐらいでいい  
だろう。明日はどうやつて過ごそうかな。

\*\*\*\*\*

その日、根拠は無いけれどエル様が会いに来るというのをデルタは確信した。だから出迎えの準備をするべきだと皆に言っていたのですが、アルファ様が「エルが来るっていう話は聞いてない」「迷惑をかけるのはやめなさい」と怒られたのですが、デルタは諦めずに言い続けたら折れてくれたのです。

それでエル様が来てくれて、デルタは我慢できずに飛びついて大好きなエル様の匂いを嗅いだ瞬間、別の雌の匂いがしました。

それも、ただすれ違つたりや数分話した程度ではつかないって確信を持つて言えるぐらいにはべつたりと付いてた。  
なんで？

デルタ、良い子にして待つてたのに。

なんでエル様から別の雌の匂いがこんなにするの？

デルタ、エル様に喜んで欲しくていっぱい頑張ったのに。  
なんで――

――こんなに匂いが付くくらいその雌と近くにいたの？

気がついたらエル様は居なくなつてて、それでデルタは見捨てられたのかと思ったのですがアルファ様たちが言うにはこんな寒いの川まで体を洗いに行つたと聞いて反省しました。その後、エル様に謝つたのですがエル様は「デルタに落ち度はないはずだから頭を上げて欲しい」と言つてくれただけではなく。

「俺のせいで不快な思いをさせてすまない。代わりと言つてはすごい不誠実だと思うけど、この前の約束とは別で何でも言う事を聞くよ」

といつもの優しい声で言つてくれたのです。悪いのはデルタのはずなのに、エル様は本当に人好しなのです。最初はピクニツクでいいかな、と思ったのですがさつきのことを思い出すと、胸がムカムカしてきましたというのと、またエル様に会えなくなるのを考えると凄い嫌だつたので、「王都に戻るまでは一緒にいて欲しい」つてお願いしたのです。エル様は暫く固まつていましたが「何とかしてみせる」と言って下さり、その日はそれで解散してしました。

次の日、エル様はデルタのことを街で知り合つた友人、ということでお家族の人を説得してくださつたのです！そして名前はデルタではなく「ユウナ」という名で通すこと、エル様のことは「ルイス」と呼ぶようにお願いされたのです。

そして早速エル様の家に入つたのですが、皆さん良い人でした！でも、髪の毛が凄い白くて黒い服を着たおじいちゃんが「これでエア家は安泰です……」と泣いていたのはなんでなんだろ？あと、エル様のお父さんともお話したのですが最後に「ルイスのことをよろしくね」と言つてたのですが……なんであんな何かを思い出すような顔をしてたのか不思議です。

その後はエル様と一緒にお風呂に入りました！メイド？の人も、デルタが一緒に入るのを応援してくれたのでエル様と頭を洗いつこ出来たのです！でもエル様は次からはやらないように言われて、ちよつと寂しかつたのですがここで引いたら後悔するような気がして最後まで譲らなかつたのです。

そしてエル様と一緒にベッドで寝たのですが、やっぱりエル様の近くは胸がポカポカして暖かつたのです！えへへ。

次の日はデルタの特訓の成果を診てもらうためにピクニツクに行くことにして貰つたのです！ちよつと失敗しちやつたところもあつたのですが、エル様は手際が良くなつていて、頑張つたことを頭を撫でて褒めてくれて凄い嬉しかつたのです！

肝心のピクニツクは天氣が悪くなることもなかつたのですが、お昼寝した際にエル様より先に起きてエル様の寝顔を見れたのです。い

つもどこか遠くにいるような感覚があるのですが、この顔を見ると近くにいると再認識できて安心できたのです。あ、上着からはエル様だけの匂いがして安心したのです。

帰つてからはまた一緒にお風呂に入つて、今ベッドに先に入つているのですがエル様は何か書いていて全く来てくれないのです。でも、エル様の匂いが付いてるベッドから出るのも嫌でじーつと見ていたら、気がついたのがデルタの方を見て「今いくよ」と言つてすぐに来てくれたのです。

エル様はやっぱり優しい人なのです。

だから、他のメスが近寄つてきちゃう。強い雄に雌が集まるのは、前にいた集落でもあつたし、デルタもそういう環境で暮らしてきたから分かることではあるのです。エル様の場合は、強いし、優しいし、お日様のように暖かいから余計にそうなるのは想像がつくのです。

でも、デルタはそれが嫌なのです。エル様の良さを知つてるのはデルタだけでいい。だから……

「エル様の隣はデルタのもの、つてことを残してやるのです」

デルタは寝ているエル様の体にしがみついてしつかり匂いを付けなのです。

## ☆月☆日

デルタとピクニックに行つてから3日が経ち、今日は年始とは言つても特にやることは変わらない。強いて言えばカゲノー一家のところにご挨拶しに行つたぐらいだ。

ご飯とかお雑煮とかおせち料理みたいなものはなく、ちょっと豪勢になる程度。デルタは目を輝かせて美味しそうに食べていたけど。そういえば、アレクシアは大丈夫だろうか。こつちに来るまでは結構俺に甘え：いや、甘えてはないか。こう頼つてきてた感じだつたし、無理はしてないか心配なんだよなあ。アイリス様がいるから丈夫だと信じたいところなんだけど……うーん、なんか怖いん（文字が乱れている）

日記書いてる途中にデルタが後ろから思いつきり抱きついてきたせいで文字が乱れてしまつた。内容の方も少し見られてしまい、「アレクシアって誰なのです？」と聞かれたため、俺が今仕えている人であること、性格は悪いが根は優しいこと、そしてデルタたちと同じぐらい大事な人であることを伝えた。そしたらデルタは何か考え始めてしまつたが、頭を撫でてあげたら嬉しそうに笑みを浮かべ、今は先にベッドに入つてもらつてる。

それにしても……布団から顔だけ出してるデルタはなんか本当に犬っぽいな……

## ☆月♪日

今日は隠れ家にてアルファと情報の共有を行つた。とは言つてもアルファの方もまだ有力な手がかりは集めきれず、難儀していふ感じだ。長年世界の裏にいた、というだけあって一筋縄では行かないというのが改めて認識され、同時に俺の実力不足を痛感した。俺がユラ並の情報収集能力があれば、いや無い物ねだりをするのはやめよう。

とりあえず方針としては変わらずディアボロス教団を探ることになり、そして俺はこつちに戻っている間はデルタ以外のメンバーも指導することになった。

しかし、デルタからしたら頭では分かつても納得は出来なかつたみたいで俺と鍛錬をしている子に對して唸つていた。まさかここまで懐かれるとは思つてなかつたが、これに關しては俺の方からケアをしてあげるべきだろう。實際にお風呂に入つた時は頭だけではなく背中も流したし、彼女の提案で尻尾のブラッシングもやつたし。そんなブラッシングは大好評であつたが、「他の雌にやつた事あるの?」と聞かれた。これに關しては前世でポチすけのお世話でよくやつていたから、というのがあるのだが、バカ正直に「ある」と答えたら何となくダメな気がしたので申し訳ないけど経験はない、という形で押し通らせて貰つた。

……明後日には戻ることになつてることを考えると、明日はなんか特別なことしてあげよう。プランは全くないけどなるようになれ、ですね。

あと、ガンマに関しては俺もお手上げです。

☆月→日

今日の鍛錬で嬉しいことがあつた。

デルタが今日の模擬戦で1度だけだつたけど、俺に攻撃を掠らせることが出来た！成長速度は前にやつた時から修正したはずなのに、それを更に超える程に実力が伸びてきている。勿論、悔しいと思うところはあるけどもそれ以上に自分が付きつきりで見ていた子の成長に嬉しさを感じている。

恐らくデルタは俺が予想出来ないほどにその実力を伸ばしていくと思うから、本当にこれからが楽しみだ。

それはそれとして、俺の方も鍛錬をもつと積まないと。まだ勝ちを譲るわけにはいかないし、俺はシャドウガーデンのトップ2らしいからその威儀を守るためにも頑張らないとね。

明日は朝一で出ることになるから日記はここまでにして寝ることにする。

あー、あとそうだ。明日着いたらすぐにアレクシアのところに行かない。絶対来いって言われてたの思い出せたし、忘れないよう日に記にこうして書いておいた。忘れたらどんな目にあうか分からんな。

\*\*\*\*\*

「ルイス様ー！やつぱり行っちゃ嫌なのですー!!」

早朝、デルタの叫びが木靈した。今回カゲノー一家はおらず、デルタの叫びはシドに見られることは無かつたが、エア家の者たちはルイスにがつしりとしがみついて引き留めようとするデルタを見て苦笑いを浮かべていた。自分らが仕えている主人の息子にここまで想いを寄せてくれているのは嬉しいことなのだが、これ以上は列車に乗り遅れてしまうため引き剥がそうとしたところで、ルイスが動いた。「ユウナ、これが一生の別れになるわけじゃないし、ちょっと離れた程度で俺らの関係が変わることはないでしょ？」

「そう、だけど……」

敬語が抜けるほど余裕が無いデルタにルイスは苦笑いを浮かべそうになるのを抑えて、彼女の頭を思いつ切りわしゃわしゃと撫で回した後、彼女の体を抱き寄せて今度は壊れ物を扱うかのように優しく頭を撫でる。

「え、エルさ……」

「デルタが俺より強くなるの、楽しみに待ってる」

「!!」

「だからそれまではお互い頑張ろう……ね？」

「……分かった、のです」

彼女にだけ聞こえるようにルイスはそう小声で伝えると、デルタは洟々といった様子で自ら離れてルイスの顔を見つめる。その表情は

寂しそうではあるものの、どこか覚悟を決めているものであった。ルイスはそれを見て笑みを浮かべてからデルタの頭を軽く撫で、それから列車の中へ入った。

そして、汽笛を盛大に鳴らしながら走り去っていく列車を見つめながらデルタは首元のチョーカーを触り遠くなつていく列車を見つめていた。それを見ていたアイクはデルタの方に近寄ると彼女を肩を優しく叩いて、帰路に着くのだつた。

\*\*\*\*\*

その日、アレクシアはいつになく落ち着いていなかつた。それを姉であるアイリスに指摘されるほど、と言えばどれくらい分かりやすかつたがわかるだろうか。しかし、アレクシアがそうなるのも無理はない。何故ならルイスが帰つてくる日だつたからだ。本当は着いていきたかつたが、お互いの立場的な問題もあれば、ルイスが本当の意味で休めないと判断したため断念したことを考えれば仕方の無いことだらう。

そしてルイスが帰つてくるのを今か今かと待ちわび——

——コンコン

(やつと帰ってきたわね……！)

ノックの音を聞いてアレクシアはルイスが帰つてきたのだと確信し、ドアを開く。

「ルイス遅いわ——」

「アレクシア、残念だけど私よ」

「え、お姉様？」

しかしそこに居たのは待ち人であるルイスではなく若干呆れ気味のアイリス。それを見てアレクシアは急激に嫌な予感がし始めた。しかし、アイリスはそんなアレクシアに気づかず先程使用人から聞いた情報を伝える。

「列車の方でトラブルがあつたらしくてね。場所的には王都まであと  
もうちよつとつて所らしいんだけど、ルイスは早くても明日の昼に着  
くことになつたらしいわ」

「

またこれが、とアレクシアは何処か他人事のように思いつつ、胸に  
伝わる冷たさを紛らわすように無意識にネックレスを掴んだ。

## 13 冊目

### ☆月 \$ 日

昨日は酷い目にあつた。まさか、燃料関係のトラブルで王都に付けてないなんていう羽目になり宿を探したのだが、見た目が子供なせいで中々泊まり先が見つからず何とか21時にやつと見つかり精神的に疲れていたのもあつて日記すら書けずに寝てしまつた。そして何が酷いってお風呂がなかつたところから凄い気持ち悪くてあんまり眠れなかつた。

そして今日、トラブルの方が最短で解決したため昼前に王都につき執事長たちに挨拶をしたんだけど……先にお風呂入つて来いつて言われた時は遠回しで匂いがきついのかと思って泣きそうになつた。そして途中で会つたアレクシアからは案の定「酷い匂いね」と言われてガチ泣きしかけた。お風呂でめちゃくちゃ体を洗つた後は軽く引き継ぎをして、明日から業務開始ということになつたので今日は鍛錬だけしようかと思つていたのだが、アレクシアに絡まれた。

とは言つても剣の稽古に付き合つた後にまたハグを要求されただけだつた。それにしても、アレクシアも段々と実力をつけ始めていい。型の確認の後に軽く模擬戦をやつたのだが、技のキレや剣の速度が前にやつた時よりも上がつていた。でも、どこか不安と焦りを感じたのは少し不安だ。アイリス様との差がどんどん出てきてしまつていること、周りからの評価が主な原因だと考えられるけど……アイリス様との仲が悪化しなければいいんだけど。

俺に出来ることはそんなアレクシアの傍にいてやれるぐらいしかない。

### ☆月 € 日

執事長から明日騎士団に招集を受けた人物がくるということ、その人が子供を連れてくるためそのお相手をしろと話を受けた。アレクシアの方はいいのか、と思ったがアレクシアは別件があるのでいいと

のこと。そしてその事にアレクシアは反対していたが、いくら王族と言えど子供の意見が通るはずもなく、そのお陰で今日のハグはいつもより長かった。

そして案の定心臓バクバク鳴つてるのがバレてからかわれたので、また息を耳にふきかけてやつたがアレクシアは耐えやがった。そして「馬鹿の一つ覚えね〜」と小馬鹿にした感じで煽つてきたんだけど、仕返しが何も思いつかなかつたので抱きしめる腕の力をちよつとだけ強めるしか出来んかつた。

それはそれとして誰が来るんだろうか。めっちゃ気になるわ。

### ☆月%日

来たのは父さんとデルタだつた。何でも父さんは魔剣士騎士団の元副団長でそして次期団長だとも言っていた凄腕だつたんだけど、私事でそれを蹴つて今俺らが住んでいるところに引っ越ししたらしい。今日はそろそろ復帰しないか、ということで呼ばれたらしいがまーたそれを蹴飛ばしたらしい。まあ、母さんがあそこにいるから離れたくないつていうのはわかるけどさ。

そしてデルタの方は俺が列車に乗り込んだ後に父さんから「王都に行く時着いてくるか?」と聞かれたらしくそれをすぐに「行く!」と即答、そして今日は1日中王都の街並みを歩き回つた。地元とは違つてかなり賑わつていて街はデルタからするとかなり新鮮だつたらしく、本当に色々なところを回つた。帰る時間になつた時はまた駄々をこねるのかなーつて思つていたがそんなことはなく、素直に帰ろうとしてたので成長を感じていた直後、急にこちらに走ってきたかと思つたら飛び込んだ後に俺の頬にキスして「またね! ルイス様!」と爆弾を投下して帰つて行つた。

まあ、その後はそれを見ていたメイドさん達にあれこれ聞かれ大変だつた。デルタは俺よりいい人捕まえられるだろうし、そもそも俺なんかがデルタの相手だなんてあまりにも向こうに失礼すぎる。そのことを言つたら「クソボケ」やら「女の敵」やら散々な評価を頂いた。どうして。

あ、そういうえばアレクシアなんか元気なかつたけどどうしたんだろ  
うか。明日辺り聞いてみるか。

\*\*\*\*\*

——嫌な匂いだつた。

アレクシアは肩を震わせながらトボトボ歩いていくルイスを見ながら先程自身の鼻を通つた匂いを思い出す。先に言うと、アレクシアはルイスの汗の匂いを臭いと思ったことは無い。寧ろ体臭に関しては好きな部類であるため、帰ってきたルイスの匂いを軽く嗅いだ瞬間、違和感を感じた。殆どはルイスの匂いであるはずなのに、ほんの少しだけ彼以外の匂いがしたのだ。

アレクシアはそれが嫌で反射的に酷い匂いだと言い放つてしまい、それに気がついた時にはルイスはもう背中を向けて歩き始めていたところだつた。

(でも、なんで嫌な匂いだと感じたのかしら?)

それが正にアレクシアの頭を悩ませていた。激臭というほどの匂いではなかつたことや不快に感じたとはいえど氣分が悪くなるほどではなかつたことを考へると、余計に分からなかつた。

(これ以上考へるのは無駄ね)

アレクシアは思考を一旦止めた。そしてふとルイスと剣の稽古を最近してないことに気がついた。ルイスの剣は才能がない者が愚直に基本を積み重ね続けた「凡人の剣」だ。アレクシアの憧れは姉であるアイリスのような王道の剣ではあるが、ルイスの剣も参考にしている。そのため、久しぶりにルイスと稽古をやろうと考へたアレクシアは早速稽古着に着替えに行くのだつた。

そして1時間後。

「ふつ！」

「はつ！」

木剣を手に模擬戦をしているアレクシアとルイスの姿があった。2人の実力を比べると、前世で勇者パーティの1人として多くの修羅場をくぐり抜けてきたルイスの方が上である。しかし、同じ凡人の剣でも何故ここまで差があるのか分からぬアレクシアは余計に焦りを募らす。

——姉だけではなく、ルイスも自分から離れてしまうのではないかと。

「つ！ はあっ！」

「つ」

アレクシアはそんな不安を振り払うかのように剣を振るい続ける。そしてルイスはそんな彼女の様子を察してほんの一瞬だけ表情を歪ませるも、気取られる訳にはいかないと氣を引き締めて模擬戦に集中する。

——結局、アレクシアはその不安と焦りを振り払うことが出来ずその日は終わりを迎えた。

\*\*\*\*\*

(まさか、ルイスの親があのアイク元副団長だなんて)

それから2日後、アレクシアは王都に来た客人が自分と話したいという理由でルイスとは別行動でありそれに不満を零しまくったのだが、その客人がその従者の父親、しかも元副団長だとは思わず肝を抜かしていた。そのため思わず身構えていたのだが、当のアイクは子供である自分に対しても心から敬っているような態度を取り、終始柔らかい姿勢で話を続けていたためちよつとだけ拍子抜けしていた。

(でも、なんか胡散臭い気がするのよねえ……)

しかし、アレクシアからしたら長所はいくらでもとり繕えるという考えがあるため、いくら自身が大事にしている従者の親だとしても疑惑の念はなかなか晴れなかつた。

「そういうえば、アレクシア様から見て息子のルイスはどう見えますか？」

「え？」

ふと、アイクは何かを思い出したかのようアレクシアにそんなことを聞いてきた。アレクシアは部屋に自分たちだけではなく、護衛の騎士や執事がいるのにも関わらずかなり個人的な質問が飛んできたことに驚き詰まるも、当たり障りのない返答を考えた。

「そう、ですね。ルイスはかなり優秀な従者だと思います。私の剣の稽古にも付き合ってくれますし、勉強中にお茶を入れるタイミングも完璧ですからかなり助かっています」

「なるほど……それを聞けて少しだけ安心しました……ところで、ルイスとは遊んだりすることはありますか？」

アレクシアはアイクの追撃に思わずお茶を吹き出しそうになつた。まさかお宅の息子さんに金貨を口で拾わすペツト<sup>ごつこ</sup>をやつていいますなんて言う訳にもいかず、かといって二人で王都の街並みに出て遊んだということも言うのは何故か恥ずかしく言う気になれなかつた。

「そ、そうですね……仲はいいとは思いますが、互いの立場的にそういうことは中々出来ないかと……」

「そうですか……やはり難しいですね……」

声が震えていないか不安になりつつも何とか当たり障りのない答えを返したアレクシアは、それに気がついた様子のないアイクを見て心底安心していた。

「従者という立場である私から言うのはおかしいと思いますが、どうか息子のことをお願いしてもいいでしょうか？」

「……？ それはどういう……？」

「アイク殿、そろそろ時間です」

「これは失礼致しました。アレクシア様も態々時間をとつていただきありがとうございます」

「え、ええ……」

アレクシアはアイクの突拍子のない発言に驚き戸惑いの声を上げるも、護衛の騎士が時計を見てから会話の時間が終了したことを告げる。アイクはそれに対して謝罪をしつつ、アレクシアに対しては時間

を取ったことに感謝を伝える。アレクシアはそれに対しても戸惑いつつも、アイクを見送るため席を立つ。

「それでは今回はありがとうございました。恐らく王都に来ることはもうないと思いますが、次会えましたらその時はよろしくお願ひします」

「ええ、その時はよろしくお願ひします」

そうしてアレクシアはアイクを見送り、その後街に出ていったというルイスがもう帰ってきても良い時刻ということに気が付き、護衛の騎士に一言告げてから彼の姿を探しに行き——見つけた。

「ルイス、そんなところに——」

「ルイス様！」

「ユウナ？ 一体何を——」

ルイスがユウナと呼んだ獣人の少女から頬にキスされたところを。

アレクシアはそれを見てからの記憶はなく、気がついたら自室のベッドの中で丸くなつており、その時には胸にぽつかり穴が空いたかのような感覚に耐えるのに精一杯で、アイクから言われたルイスのことを頼むという話は完全に頭から抜けていた。

。月☆日

クレアさんが誘拐されたあの事件から1年が経つた。あの時は王都の方にいたから駆けつけるのが出来なかつたとはいえ、何も出来なかつた自分に対して腹が立つ。結果として、シドやアルファたちの活躍によつてその事件に関わつたディアボロス教団のメンバーは倒すことが出来、クレアさんも怪我こそ負つてはいたもののそこまで重くなかつたのが幸いだつた。それからアルファたちは勢力拡大のため世界のあちこちに散り、順調にメンバーを増やし、シドがボコして認めさせた霧の龍が守る古の都アレクサンドリアを本拠地として魔道具の開発やメンバーの強化をしているとの事。

そしてガンマを主導に『ミツゴシ商会』を立ち上げてシャドウガーデンの財源を担つてているというのをアレクサンドリアに行つた時に本人から聞いた。まあ、連絡役でゼータをよこすのはやめて欲しい。日記書いてる時に急に窓から入つてくるから心臓に悪いから。

そんな『ミツゴシ商会』は俺も何度か寄つたことがあるけども、品質がとてもよく、あと前世では結局完璧に味を再現できなかつた某ハンバーガーチェーン店のハンバーガーが試作段階とはいえ食べれたあの感動は今でも覚えている。シドの話を聞いてそれを再現したガンマたちは本当にすごいと思う。今度、レシピとか聞こうかな……。

それはそれとして、武神祭がもうすぐ始まる。何でも2年に1度行われる大会みたいなもので、刃を潰した剣で戦うというのがざつくりとした内容。ここで良い成績を収められれば色々と優遇がある、とも聞いた。アレクシアやアイリス様から俺も出るようになされたけど今回は断つた。理由としては彼女のサポートに全力を注ぎたいといふこともあるが、一番の理由は自分がある意味ズルをしているような気がして出る気が無くなつたからだ。

いや自分でも慢心な考えだとは思うけど、俺の戦闘技術は今世も含めれば人生を3回過ごした上で培われたものであり、同じ条件下であ

れば才能が皆無な俺は誰にも勝てるわけが無い。それを自覚しているからこそ、俺は断つた。アレクシアとアイリス様は残念そうにしていたけど、こればっかりは譲れない。

その代わり、大会本番でも2人が後悔のない武神祭で終われるよう精一杯サポートしていくつもりだ。

。月♪日

今日アレクシアに何故俺の剣がこんなに強いのか聞かれた。夢で前世で過ごした皆のことを見てしまったのもあって、前世のことは伏せたけどつい色々話してしまった。アレクシアは俺の答えを聞いて暫く考え込んでいたが、その後はいつもと変わらない様子だつたし多分大丈夫だろう。

今日はもうこれ以上書きたいこともないし、書く気も起きないからこれで終わりにする。もう、皆には会えないのにあんな夢を今になつて見るなんて

暫くアレクシアとの鍛錬や相手選手の情報集めの内容が続く。

☆月○日

最悪だ、よりによつてやらかした。

今日が武神祭当日であつたが、アレクシアは負けてしまつた。前々から今のアレクシアでは勝つのが難しいとマークしていた選手の1人だつたため、仕方ないことではある。けど気持ちはそう簡単に割り切れる話じやないのは身をもつて知つてている。だからこそ、アイリス様にはアレクシアが気持ちを切り替えられるまで自分らは黙つて支えることを伝えようとしたのだが、タイミング悪く俺は別のスタッフが倒れたせいでその穴を埋めるためにアイリス様に伝えられなかつた。

その結果、アイリス様に何か言われたのかアレクシアは自身の剣に対して不信感、そして嫌悪感を抱いてしまつていた。武神祭が終わつたあと急に稽古に付き合つて欲しいと言つて打ち合つた時に、それ

が伝わってきた。そして俺はそんな彼女に対して何も出来なかつた。  
俺はどうすればよかつた？俺はどういう言葉を彼女に投げかけ  
ばよかつた？

俺は、彼女のために何が出来たんだ？

師匠ならどうしていた？何も出来ない自分が本当に嫌いだ。

\*\*\*\*\*

——ルイスの剣は守りに特化した剣だ。

アレクシアはルイスと剣を打ち合いながらそう思う。

ルイスの剣は全くとは言わないが自分から攻め込むことはしない。  
基本的に相手が攻めてくるのを待ち、それを的確に防いでいきカウン  
ターを入れる、というものでありかなりやりづらい。かと言つてこち  
らが待ちの姿勢を見せれば自ら攻め込んだり、フェイントを仕掛けで  
こちらの攻めを誘つたりと相手をしていてかなり厄介であり、アイリ  
スもルイスの剣を賞賛していた。

だからこそアレクシアはルイスに武神祭に出てもらい、その剣を周  
りに見せつけて欲しかつたのだが——

「私はアレクシア様とアイリス様のサポートに徹したいので遠慮させ  
ていただきます」

アレクシアの頼みはバッサリと斬り捨てられ、それを誰から聞いた  
のかアイリスもルイスに出るよう言つたのだが結果は同じであり、ア  
レクシアはそれだけ彼が出たくないというのを察し、出場するように  
言うのをやめた。

「そういうえば、ルイスの剣つて何でそんなに強いの？」

「え？——あいたあ！」

「あつ、ちょ、大丈夫！」

だが、次の日になつてアレクシアはふと気になつていたことを稽古  
中にルイスに聞いた。そして聞かれた本人は聞かれるとは思わな  
かつたのか、一瞬固まつてしまつたせいでアレクシアが放つた縦振り

を木剣で防げず頭に当たった。

その事にアレクシアは驚きつつも、頭を抑えるルイスに近寄る。幸いそこまで勢いよく振つてなかつたことが幸いし、たんこぶが出来たりなどといったことは無さそうだつた。だが、同時に稽古を続ける雰囲気でも無くなつたため、休憩をとることになり2人は日陰に移動して腰を下ろした。無論、ルイスは急いで用意した氷袋を頭にあてながら。

「いてて……そういうえば俺の剣がなんで強いか、だつけ」

「あ、うん。ちょっと純粹に気になつたのよね。アイリスお姉様とも打ち合える秘密とかあつたら聞きたいし」

「あー……」

アレクシアが聞いてきた理由を聞いてルイスはどう答えるか迷う。流石に前世のことを話す訳にはいかないので適当に誤魔化そうと思いつ——

——『私にもユウト様を守れるほどの実力があればよかつたのに……』

「……守りたいものがあつたから」

「え？」

「才能がない、って言われたけどそれでも守りたいものがあつたから、俺は剣を振るい続けられたんだ」

気がつけば、ルイスは話していた。脳裏に自身が今の剣を目指そうと思つたきつかけをくれたとある姫の言葉を思い出したからだろうか。ルイスは自分ですら気が付かないほど懐かしむようにそう話し、アレクシアは一度も見せたこともなければ聞いたこともない顔と声を出すルイスを見て呆然としていた。

「……さて！痛みは引いたし、稽古の続きやろうか！」

「え、ええ。そうね……」

急にいつもの雰囲気に戻つたルイスにアレクシアは驚きつつも、腰を上げて日陰から出て再度木剣で打ち合つた。

——そしてその日からルイスは宣言していた通り、アレクシアのサポートに徹しており模擬戦の相手を始めに、注意すべき相手の偵察や

解析、鍛錬後のマツサージなど彼女がベストを尽くせるように多くのことをした。アレクシア自身それに対し過保護過ぎるとは思つたものの、自分のためにあれこれ手を尽くしてくれるルイスに対し感謝はしていた。事実、模擬戦の方はかなりタメになつたこと、マツサージに関しても変な声を出して聞かれたことに目を瞑ればかなり良かつたと言える。

「勝者、――！」

そしてそこまでされた上で挑んだ武神祭でアレクシアは負けた。ルイスの事前情報で今の段階では勝てる可能性が低い相手というのはわかつていたが、それでも負けた事をすぐに割り切れる人間は中々居ない。アレクシアもその一人であり、気がつけば控え室で1人で蹲つっていた。

「アレクシア……！」

そしてアレクシアの敗北を聞いてすぐに来たアイリスはそんな妹の姿を見て、何か言わなければと直感した。このままでは大事な妹が「凡人の剣」を嫌いになつてしまふ。

――なんて言えばいい？なんて励ませばいい？

アイリスの思考はどんどんドツボにハマつていく。最適だと思いついた言葉が逆に傷つけそうな気がして頭から無くす、を繰り返した果てに彼女が言つた言葉――

「私、アレクシアの剣が好きよ」

\*\*\*\*\*

「ルイス、ちょっと付き合いなさい」

アレクシアに呼び出されたルイスはこちらの返答を待たずに木剣を投げてきた彼女に困惑する。こちらの都合を考えずに付き合わせるいつもの感じとは違うことに、ルイスは嫌な予感がしつつも木剣を構える。

そして――

「はあつ――！」

「！」

全力でこちらに向かつてきアレクシアの剣を見て、すぐに察してしまった。その剣が自分が彼女を見直したきっかけでもある「アレクシア・ミドガルの剣」ではなく、「アイリス・ミドガルの剣」の模倣であることに。

「――くつ！」

そしてそれに気を取られたせいでルイスは反応が一瞬遅れ、その事に気がついたアレクシアは「アレクシア・ミドガルの剣」では、ルイスに追いつけない可能性があると思つてしまつた。

(……凡<sub>私</sub>人の剣じや、ルイスの隣にすらいられない)

アレクシアはその考えにたどり着いてしまつたことに喪失感を抱きつつも、これまでを捨て去る勢いで剣を振るい続け、その頃にはルイスが自身に語っていた「強さの理由」など頭から抜けていた。

€月\$日

武神祭から2年が経ち、俺らが15歳になつたことでミドガル魔剣士学園に入学してから2ヶ月が過ぎた。アレクシアはあの日からアリス様の剣にまだ囚われている。本音を言えば俺が正してあげるべきなのかもしれないけど、今の彼女に俺の剣は嫌悪感を抱く対象なのだ。事実、あれ以来彼女と剣の鍛錬をしたことはない。

結局、どこかぎこちないところが治らないまま時が過ぎて行き、今や彼女には婚約者候補が現れるほどの年齢となつた。まあ、その婚約者候補のゼノンって人は短所が見当たらなさすぎて警戒対象ではあるのだが。前世でもそんな感じの人がいてホイホイ着いて行つたら貞操の危機にあうのはまだマシな方で、ガチで死にかけたこともあつたなあ……貞操の危機の方に関しては今思うとそのまま卒業してしまえば良かつたと思つてはいる。

いや人生2回連続卒業出来ぬまま死んでるつて結構やばい気がする。流石に3度目の人生では卒業してから死にたい。でも、俺みたいな一般従者に対して「OK!!」と言つてくれる心広い女性はいないと思うし……。

そんな事よりアレクシアの方だが、色んな人から告白されている。有力貴族のイケメン息子からもあれば、騎士団で有力視されている期待大なイケメン男子学生と多くの男から告白されているのだが、「興味無い」の一言で散つてはいる。そしてその事を振つた本人から直接聞かされるのだが、反応に困る。強いて言えるのが、「モテますね」とか「ゼノン様のことを考えて偉い」ぐらいしかない。なお、それ言つたら言つたらで不機嫌になつて拳が飛んでくるか、椅子にされるし、無言を貫き通しても同じ目に遭う。

俺に一体どうしろと? デルタに聞いたら……いや、流石に分からなそう。今度、ゼータが来た時に聞いてみるか……

€月%日

アレクシアに彼氏が出来た。それ自体は喜ばしいのだが、問題がいくつか出てきたせいで頭とお腹が既に痛い。

まず1つ目。相手が我らがシャドウガーデンの盟主であるシド・カゲノーであることだ。なんとこのアホあろうことが自身をモブっぽくするためだけに、わざわざアレクシアに嘘告をしやがったのだ。告白内容は……まあ、中々面白かったがアレクシアはそれをあつさりとした承。マジで何が狙いで彼と付き合い始めたのか分からぬものもある。

2つ目。アレクシアが自身の本性を見せた時のフォローをどうするか。ないとは思いたいけど、万が一アレクシアが本性を露わにして自分にやつてるようなポチ扱いをシドにしたら俺はどんな顔でシドやアルファたちに会えбаいいのだろうか。

取り敢えずそんなことになつた場合は俺からフォロー出来ることはフォローしないと……頭痛い。

3つ目。暫く従者として動くな、と言われたこと。恋人としてシドと過ごすというのに男の俺がいつまでもいたらおかしい、ということで言われたという命令されたのだが仕事が無くなる。一応速達で執事長に判断を仰いでいるのだが、まじでどうしよ。というか友人がシドとそのつるんでる2人ぐらいなんだよなあ……他の人とも話はするけど何か見下してきて嫌だし。

他にも幾つかあるが考えるだけでお腹が痛くなるのでこれ以上はやめよう。胃薬あとで買いに行くか……

€月%日

はい、早速やらかしてくれました。執事長からの返事がまだ来てなかつたから今日1日影ながら見守つていたんだけど、放課後にアレクシアが金貨をばらまいてそれをシドが地面を這いつくばつて拾つているの見てしまつたからだ。

うん、膝から崩れ落ちたね。このせいでシドへのフォローという仕事が追加されました、クソが。

そしてシドと付き合い始めた理由も婚約者候補のゼノンに対する当て馬というのが分かつたのも頭痛いポイントだ。いや、ゼノンを婚約者にするというのは胡散臭いから反対なのは俺も同意見なのだが、もう少しやり方は無かつたのだろうかと思つてしまふ。見た感じゼノンの方は軽く流してるし……うーん、この。

そして帰つてきたら執事長からの返事が届いていたため、早速読んでみると陰ながら見守るようとの事。

はい。というわけで暫く隠密行動することになりました、クソが。俺そこまで隠密行動得意じやないってのに……

あと、俺が隠密してない時に限つて行く先々でアレクシアがシドと仲良さそうにしてるところを見かけるのはなんでなんだろ。

\* \* \* \* \* それから2週間ほどシドへのフォローやアレクシアからの話を聞いたりしたこと、胃薬が増えたことに関する内容が続く。 \*

\* \* \*

\* \* \* \* \*

王都の人通りがほぼない路地裏にてフードを被り、気を失つているアレクシアを担ぎながら音もなく移動する集団があつた。彼らは少女を攫い、王都にある自分たちの隠れ家にその少女を連れていくのが任務であつた。その少女の恋人とされているシド・カゲノーと別れるのが案外早かつたため、当初より少し早くなつたもののこうして無事に彼女を気絶させることが出来、任務は順調かと思えたが。

「ちよつと待つてもらおうか」

「！」

隠れ家に向かう途中で帶剣している少年が1人で立つてゐるのを

見て先頭を走っていた男は止まる。男はその少年の顔を見て、作戦前に要注意人物として挙げられていた人物——ルイス・エアであること認識し、内心舌打ちしていた。

ルイス・エアは当初幹部も含め取るに足らない存在だと結論づけていたが、自分たちが属する組織で『最強』と言われている女性が口を出し、シド・カゲノー同様に最も注意すべき人物だと断言したのだ。そしてその話は下っ端である彼らにも伝えられており、男は汗をかく。

「うちの主がいつまで門限過ぎても帰つてないから急いで探してみたら、あんたらが見つけてくれてたとはな……取り敢えずアレクシアを返してもらおうか?」

「っ!!」

話口調自体は軽いものの、同時に放たれた殺氣と圧は凄まじいものだつた。男たちは無意識に膝を地面につけようとし、ルイスもそれを見てすぐに踏み込んで男たちを半殺しにしようと剣の柄に手をかけ

——その瞬間、ルイスは自分の首が飛ぶ姿を幻視した。

「っ!!」

反射的にその場から離れるよう転がる。その刹那ルイスの首があつた所を白い閃光が横切り、それを見たルイスは少しでも反応が遅ければ先程感じた光景が現実になつていて事実に冷や汗をかき、同時に驚愕していた。

(殺意も敵意も何も感じなかつた……!?)

そう剣を振るえば普通は生じるはずの気配が全くなかったことにルイスは驚いていた。それに反応できたのは彼が守りの剣の極地に至つていたこと、その『最強』の剣を何度も体感していたからだ。「ほう? やはり反応してきたか……」

影より現れたのは全身を黒に染めたロングコートを身にまとい、片手に白銀に輝く片刃の刀を持つた細身の人物だつた。顔はフードを深く被り口元も隠しているせいで分からぬものの、声の高さ的に女性だとルイスは考えた。

「ほら、お前たちいつまで休んでいる。早くその王女をつれていけ」

「つ！」

「行かせると思つて——つ!?」

女性の言葉に気がついたその集団は急いで走り去ろうとし、それをルイスが阻もうと接近しようとした瞬間、視界に女性が自分に向けて刀を振り下ろすのが見えて反射的に剣を抜刀、それを弾いた。

「そんな玩具の剣で私と戦う気か?」

「はつ、逃がす気なんかないせによく言うよ」

「そりやあ、私たちのこと見られたからにはな? 悪いけど死んでもらおう」

その言葉を契機に2人は一斉に動き出した。女性は流れる水を彷彿させるかのように剣を振るい、ルイスは自身の全神経を集中させて飛んでくる全てが必殺と言える斬撃を全てを防いでいく。

だが、ルイスは前世で魔王と戦った時のような身体能力をまだ手に入れておらず、体も全盛期には遠い。そのため徐々に防ぎきれなくなり初め、所々にかすり傷が出来始めた。

「ちい——！」

「ふむ、予想通りやるな……」

(こいつ……!)

女性はルイスの剣を通して懐かしむような声を出し、そしてルイスは打ち合う度に彼女の剣がますますとある人物に似ていることに焦りを感じ始めていた。しかし、そこで女性はルイスの剣を懐かしむ方に僅かながら意識が逸れてしまい、ルイスはその一瞬を見逃さなかつた。

「せあつ！」

「むつ？」

ルイスからすれば千載一遇のチャンスでもあつた渾身の突きは女性の頬を僅かに掠める程度で終わり、それを受けた女性はすぐに後ろに下がつて距離を取り血が流れる頬を指で触る。

「女性の顔に傷をつけるとは、随分なことをするじやないか」

「……」

「だんまり？つれないな……まあ、これ以上やつてるとそろそろ人が集まつてくるからな——」

——これで終わらせるぞ？

「っ！」

反射だつた。ルイスは女性の姿が見えなくなつた瞬間自身の体と剣にありつたけの魔力を流し、自身の本能が言うがままに剣を構えて防御の姿勢を取つた。

そしてその直後——

「なつ——!?」

凄まじい衝撃が手に伝わると同時にルイスの体は吹き飛んでおり、構えていたはずの剣の刀身は粉々に碎け散つており、それを見て彼は先程の一撃の威力をとともに受けていたらどうなつていたかを想像し背筋を凍らせると同時に地面に転がつた。

（なんて強さだ……まるで師匠と戦つて——）

そう考えた瞬間、胸が焼けるような感覚がし視線を下に移すとそこには横に切り裂かれたのように傷が開き、血が吹きでている自身の体。それを見てルイスは完全に防ぎきれなかつたことを悟り、同時に応戦するために手に魔力を集めて魔力の剣を作ろうとして——

——ドスツ

「がはつ……」

ルイスの腹部を刀が貫いた。

「……中々強かつたぞ、坊や。正直私以外で勝てる人間はいない、と思えるぐらいには楽しめた」

女性は刀を抜くと、血を吐きながら地面に倒れ込むルイスを見下ろす。万が一魔力を使つて回復されないように腹部に刀を突刺す直前に、魔力操作がおぼつかなくなる誰にも教えていない特製の毒を刀に

塗っていた。そのためこの少年が助かる可能性はかなり低いだろう。

「欲を言えば、周りのことや時間など気にせず、ちゃんとした武器を持ったお前と戦いたかったものだがな…」

女性は名残惜しそうにそう呟くと、ルイスが首につけていたネックレスを引きちぎって懷にしまうと、彼の体を抱えて周りに人がいないかを確認しつつ近くの水路にやつて来て。

「アレクシア・ミドガルの従者、ルイス・エアは行方不明……事件はシド・カゲノーを容疑者として進む……ふん、くだらん茶番だな」

僅かながら息をしているルイスを川に投げ捨て、興味なさげにその場を去つた。

それから数分後、何かが水に飛び込む音が誰もいない空間の中響き渡つた。

『私をついに超えたか……』

地面に倒れ伏す自分の師である人物を見て青年は剣を下ろす。仲間を殺したこの人物に恨みがあつたはずなのに、今の彼はそんな気が起きなかつた。それよりも知りたいことがあつた。

『師匠、何故魔族側に寝返つたんですか？ 最初に現れた魔王を討伐した勇者パーティの1人にして、救世主と呼ばれた貴方が、何故……』

『それは――』

\*\*\*\*\*

€月？日

アレクシアを助けることが出来なかつた日から4日が過ぎた。安靜をアルファから言われているためやることがなく、別の日記帳に状況を纏めるために書いている。

まずあの日俺が女性に刀を刺されて意識を失つてからのことなのだが、どうやら俺は証拠隠滅のために水路に落とされたらしく、普通であれば誰も気づかず死んでいた筈だつた。しかし、寝ていたデルタが「エル様が死んじやう！」と突然叫んで、アルファたちの止める声を振り切つて王都の隠れ家から飛び出し、水路でプカプカと浮きながら流れている俺を見つけて急いで助けてくれた、とのこと。

マジで死にかけだつたらしく、こうして生きているのが不思議なぐらいだとアルファから言われた。一応傷は魔力を使って怪しまれない程度には治したから、この騒動を終わらせた後に学園生活に戻ることは可能だ。なお、スライムスースとスライムソードは常に持つておきなさい、とアルファに怒られた。本当にすみません……

そして次に学園ではどうなつてているのか。これに関してはゼータ

などが収集した情報だと、アレクシアとその従者である俺が行方不明なのはシドが関係しているとして騎士団が彼を尋問している、との事だつた。だが、話によれば俺の父親がシドのことを弁護してくれているらしく、明日には開放されるだろうとのこと。

そして、その明日がシャドウガーデンが動く日だということも教えて貰い、俺も動くと言つたらめちゃくちゃ反対された。特にデルタ。だが、あの女性とともにやり合えるのは俺かシドぐらいしかいない。デルタもやり合えるとは思うが、それでも勝率はかなり低いことを考えると、保険も兼ねて俺が出るべきだろう。……本当の理由を言うと早くアレクシアを助けたいというのがあるけど。

と言つたのが今の現状だ。そして現在、付きつきりで看病してくれたデルタのお願いで彼女は俺の隣でスヤスヤ寝ている。看病した見返りとしては安すぎると思うんだけど……まあいつか。

それにしてもシドには本当に悪いことしたな……俺がこうなつていなければあいつの無実を晴らせたというのに。

いや、それよりも気になるのはアレクシアとあの女性だ。恐らくアレクシアの命は無事とみていい。黒幕はディアボロス教団ということから、身代金の要求はないだろうし、彼女を殺すならわざわざ誘拐するわけが無いというのを考えれば、アレクシアの何か……例えば血が必要なのかもしれない。前世でも勇者の子孫だ！って自慢してた男を誘拐してその血で強くなろうとしたやべーやつもいた訳だし。だが、だからといって彼女の精神が無事かはまた別だ。手遅れになる前に助けられればいいんだけど……？

そしてあの女性。気配も何もかも感じれなかつたけど、あの剣は師匠が振るつていた「攻めの剣の極致の一つ」だ。シドもあの剣を習得しているから、別の人が出来ても何らおかしい話ではないけどあまりにも師匠に似すぎていて。でも、師匠はあの時確かに俺が殺したはずだ。いや、まさか俺と同じように……？

ダメだ、これ以上は完全に空想の域だ。どちらにせよ、あの女性がまた出た時は刺し違える覚悟で殺しにいかないといけないだろう。  
……ネックレス、マジでどこ行つたんだろう。

\*\*\*\*\*

——あれからどれぐらい日が過ぎたのだろうか。

アレクシアは化け物が壊した壁の先にあつた薄暗い廊下を歩いている中、ふとそんなことを考えた。最初今の状況に気がついた時は隣にいる化け物に驚いたり、気味の悪い白衣を着た男に血を抜かれたりと色々思うところがあつたが、それでも彼女の心が折れなかつたのは首にかけているネットクレスと大事な従者であるルイスの存在があつたからだ。

武神祭以来、少々関係がぎこちなくなつたもののアレクシアはルイスのことをずっと想つていたし、彼の気を引くために彼と幼馴染というシド・カゲノーと付き合つてみたし、なんならシドから幼い頃のルイスの話を金を払つて聞いた。それでも、あの日ルイスの頬にキスした憎き獣人の正体は分からなかつたのだが。

監禁生活に心が挫けそうになる度にネットクレスを見ては自身を奮い立たせ、同時にルイスに会つたらなんて文句を言つてやろうかとあれこれ考えていたのもあつて、頭がおかしくなるほどストレスが溜まるということにはならなかつた。

そしてつい先程、元から錯乱していた様子であつた白衣の男が発狂した様子で化け物に何かを注入し、その結果更に体がでかくなつた化け物に男は殺され、自身はその化け物が拘束台を破壊してくれたお陰でこうして脱出に向けて足を動かすことが出来ている。

(本当、ルイスに会つたらなんて言つてやろうかしら)

アレクシアはそんなことを思いながら廊下の角を曲がつた瞬間。「勝手に逃げられては困るな

「あ、あなた、どうしてここに……」

アレクシアは驚愕に目を見開いた。

「なぜって、ここは私の施設だからだよ。私があの男に投資した。それだけのことさ」

金髪に端正な顔立ちで自信に満ちあふれた笑みを浮かべる、ミドガル魔剣士学園の剣術指南役であるゼノンがそこに立っていたからだ。

アレクシアはゼノンがいることに驚愕で流されそうになる思考を繋ぎ止めて、ゼノンの発言を思い返す。そしてこの男が自身を攫つた黒幕ということに気がつき、冷や汗を流す。

「よかつた。私とルイス、あなたのこと頭おかしい狂人なんじやないかってずっと思つてたのよ。私たちの予想通りやつぱりおかしかったのね」

アレクシアは一步、二歩、後ろへ下がりながら気丈に言いながら目だけを動かして周囲を確認する。横は壁しかないものの、ゼノンの後ろには階段があり恐らく出口に繋がると見ていいだろう。

「そうかな。どうでもいいさ。君の血があれば」

「どいつもこいつも血の話ばつか。吸血鬼の研究でもしてるの？」

「君にとつては似たようなものかもしれないな」

「説明はいらないわ、オカルトには興味ないもの」

「だろうね」

「分かつてていると思うけど、もうじき騎士団と私の従者が来るわ。あなたも終わりよ」

「終わり? いつたい私の何が終わるんだ」

変わらぬ笑みで、僅かに嘲笑するようにゼノンが言った。

「地位も名誉も剥奪、そして当然処刑。ギロチンは私自ら下ろしてあげるわ」

「そとはならないさ。私は君と隠し通路から脱出する」

「ロマンチックな誘いだけど、私あなたのこと大嫌いなの」

「来てもらうさ。君の血と、研究があれば私はラウンズの第12席に内定する。剣術指南役などというくだらない地位ともおさらばだ」

「ラウンズ? 狂人の集まりか何かかしら」

また分からぬ単語が出てきた、とアレクシアは内心ため息を吐いた。

「教団の選び抜かれた12人の騎士ナイツ・オブ・ラウンズ。地位も名誉も富も、これまでとは比べ物にならないほど手に入る。私は既に実

力を認められている。後必要なのは実績だけだが、それも君の血と研究成果で満たされる」

ゼノンは大仰に手を広げて笑うのを他所にアレクシアは必死にゼノンが言つていることを頭に刻み込む。もしこれがゼノンの狂言や妄言でないのならば、とんでもない組織が王国にいるということになるからだ。

（少しでも情報を覚えて持ち帰らないと。それに隠し通路があるならそこを探しながらの逃亡も視野に――）

「本当はアイリス王女の方が良かつたが、君で我慢するさ」「ぶつ殺す」

冷静に脱出の算段を考えていたアレクシアはゼノンの言葉で一瞬で冷静さをなくした。ゼノンはアレクシアが激昂する言葉を敢えて言つたのだが、予想通りにことが進み内心ほくそ笑む。

「失礼、君は姉と比べられるのが嫌いだつたね」

「……ッ！」

怒りが籠つたアレクシアの気迫の一撃が戦闘開始の合図となつた。

「恐い恐い」

アレクシアのとてつもない殺意が込められた一撃をゼノンは寸前で弾き返し、そして一撃目を防がれる前提で振るわれていたアレクシアの追撃も難なく受け止める。剣が衝突し空中で何度も火花を散らす。

何度目かの剣戟の果てにアレクシアは幾分か冷静になり、これ以上は分が悪いと判断すると、仕切り直しと言わんばかりに後ろに下がつて距離をとる。

「しばらく見ないうちに、随分と安物の剣を使うようになつたね」

ゼノンの発言にアレクシアは小さく舌打ちをする。戦いが始まつて数分も経つていないと言うのに、アレクシアの剣には既に無数の刃こぼれが出来ていた。

脱出する際に丸腰は心もとなかつたため、見張り兵と思しき死体から拝借した低品質のミスリルの剣では実力者と打ち合えば剣がすぐ

にボロボロになるのは明白だつた。

「達人は剣を選ばないって言うでしょ」

しかし、ここで動搖しているところを晒せばそこを突かれて負けに繋がる、というのをルイスから嫌という程教わったアレクシアは何ともないと言わんばかりに口を動かす。

「なるほど。達人ならそうだろうけど、残念ながら君は凡人だ。それは剣術指南役の私が保証するよ」

その一言でアレクシアの顔が一目で分かるほど歪んだ。

「だつたら見てなさい。本当に私が凡人かどうか……！」

そして、猛者であるはずのゼノンでさえ僅かに竦むような気迫を伴つて仕掛けた。

アレクシアは知つていた。自身の実力では普通に戦つてもゼノンには勝てないということを。しかも今使つてているのは安物の剣で、保つてあと3回、下手するとこの一撃で壊れる可能性があることを彼女は予想していた。

だが、アレクシアは日々何も考えず剣を振つてきたわけではない。姉憧れを目標に自分に足りないものを理解し、それを埋める努力をしてきた。そして誰よりも姉憧れの剣を間近に見てきた。

アレクシアは多くの研鑽を積んだ成果として、既に姉最強の剣を寸分の狂い無く思い描く事が出来るまでになつっていた。

ならば、それを振るのは容易い。

「ハアアアアアアッア!!

その剣はまさしくアイリス王女最強の剣を彷彿させた。

「ツ……！」

ゼノンの顔から初めて笑みが消え、その一撃を迎撃つために自身の剣に魔力を込めて剣を振るう。

(ダメだ、このままだと防がれてこいつを倒すことが出来ない)

そしてアレクシアは剣を振りかぶつている最中、このままでは負けるのを予期した。この一撃で仕留めなければこちらの剣が打ち合いの果てに先に壊れ敗北する。だから何としてもこれで仕留めなければならなかつたが。

(どうする?! 一体どうすればこの剣を当てられ――)

『なんで俺の剣が防げないか、つて?』

――その瞬間、思い出したのはまだルイスと剣の稽古が出来ていたある日のこと。どうしても防ぐことが出来ないルイスの剣が疑問で聞いた時の事だった。

『あんたの剣が来るつて思つた方向に剣を構えたはずなのに、攻撃当たつてるのはなんですよ?』

『あー、それはちょっとした小細工でさ。俺の目線だつたり、剣を振り下ろす時だつたり、あとは殺氣とかそういうのを囮にしてるんだよ』

『はあ? そんなこと出来るわけ――』

『まあ、すぐには無理だろうね。けど、俺の知つてるアレクシアはすぐには出来ないからつて諦めるたまじやないでしょ?』

『……そう。なら教えなさい』

『はいはい、それじゃあ――』

――それを思い出したアレクシアは、正に彼が言つていた条件が揃つていることに気がついた。ならばと彼女は自身の剣とゼノンの剣がぶつかるほんのちょっと前に、剣をそのまま振り下ろさずに腕を畳み姿勢を低くしゼノンの懷に潜り込んだ。

「何――!?

「はああああっ!!」

ゼノンは自身の読みが外れたことに驚き、アレクシアはそれを見逃さずに自身の全てを込めた一撃を斜め下から上へ斬りあげるようにゼノンの体に叩き込んだ。

\* \* \* \* \*

「……まさか、そんなことが出来るとは思わなかつたよ」

「はあ……はあ……くつ……」

ゼノンは胸に刻まれた浅い傷を見て何の含みもなく呟く。アレク

シアの渾身の一撃は、ゼノンが反射的にバックステップをしたことに  
より完全に捉え切る事が出来ず彼を倒すには至らなかつた。

そしてその結果を見てアレクシアは悔しそうに顔を歪ませるも、再  
度剣を構える。その目はまだ諦めておらず、それがゼノンにとつては  
イラつくものであつた。

——茶番はここまでにするか。

ゼノンはそう結論づけると無言で剣を構え、魔力の質を更に高め、  
先程とは比べ物にならないほど濃密で鋭利な刃物を連想させるかの  
よう銳くさせていく。

「……っ！」

「一つ言つておこう」

ゼノンの変わりように息を飲んだアレクシアに特に驚くことも無  
く、ゼノンは淡々と言葉を続ける。

「私は今まで一度も部外者の前で本気を出したことはない。これから  
見せる剣こそが、正真正銘の私の剣であり、次期ラウンズの剣だ」

「くつ！」

反射だつた。長年の鍛錬の成果か、アレクシアは自身の命を刈り取  
らんとばかりに迫つてきた刃をボロボロの剣で防いだ。しかし、予想  
していた衝撃はなく、視界に映るのはついに耐えきれなくなつたの  
か、刃が粉々になつて碎け散るミスリルの剣。

それは凡人では一生天才に辿り着くことが出来ないと暗喩してい  
るようで、アレクシアは自身ではどうにもならない、姉には一生追い  
つくことが出来ないと視線を下に向けて諦め——

「……あつ」

視界にネットレスが入つた。どんなに屈辱的な扱いを受けようと  
も、姉と比較されてバカにされるアレクシアを見ても、情緒不安定な  
アレクシアを見ても、ずっと支え続けてくれた従者の事を彼女は思  
出した。

——本当は分かつていた。

諦めて冷えかけていた心が再度熱をともす。

——自分があいつに對して向けている想いが何なのかぐらい。

刃が碎け散つた剣を持つ。

——でも、それを自分から告げると自身の弱さを認めてしまうような氣もして。

体の節々は痛むが、まだ動ける。

——だからあいつから想いを告げてくるように回りくどいことをやつた。それでもあいつは自分に対して告白とかしなかつた。

「まだ、諦めないのか？」

「当たり前でしょ……！」

「だからこそ――！」

「ルイスに私の想いを伝えるまで諦めない――！」

アレクシアの決意が空間にこだます。

そしてそれを聞いたゼノンは嘲笑を浮かべてから懷に手を入れると。

「そういうえば渡すのを忘れていたよ」

——カシャン

アレクシアの方へ無造作に投げられた物が彼女の足元に音を立て落ちた瞬間、彼女は目を見開いた。

「え……？」

血が固まつて変色したのか赤黒いものが付着しているのを除けば、自分が着けているのに酷似しているペンダント。

——嘘だ。

「実はね、君の従者のルイスくんに君を連れて行つてるとこを日撃された拳句妨害されてね」

——聞きたくない。

「見られたからには生かす訳にはいかないだろう？」

——まだ、何も伝えられてないのに。

「抵抗されたけど、まあ我々の敵ではなかつたわけだ」

——一緒にやりたいこと、沢山あつたのに。

「彼の死体を持つてくる訳にはいかなかつたから、代わりにということでそれを持つてきてあげたよ……彼も君が持つていた方が嬉しいだろうからね？」

——気がつけば、剣を離してそのペンドントを持っていた。

「あ、……ああ……」

「ああああああアアアアアツツツ!!」

少女の号哭が一筋の零が落ちると共に薄暗い廊下に響き渡つた。

### キヤラ紹介

#### ルイス

デルタのファインプレーで一命を取り留めた。今回の件で常にスライムスーツとスライムソードを持つことを決意する。体の方は最初こそ魔力操作が上手くいかず苦戦したが、学園に戻った際に怪しむ程度には傷を治している。ネックレスがどこにいったのかガチで分からず困惑中。なお、ゼノンのアレクシアに対する発言を全部聞いていた場合、後先考えずゼノンの首を斬り飛ばしている。

#### デルタ

ルイスが死ぬ夢を見て、それがただの夢じやない予感がして急いで匂いをたどつたら水路を赤く染めてドンブラコしてルイスを発見し、すぐに飛び込んで救出、息がなかつたことからルイスから教わった人工呼吸と心臓マッサージを急いで行つた結果無事に成功。それ

から目を覚ますまで付きつきりで看病し、治つてからはルイスの横で寝れてご満悦。

——大丈夫、冷たくない。——大丈夫、動いてる。

シド

描写少なくてすまん。今回はアレクシアだけではなくルイスも行方不明なため、本来より拘束時間が長いことになつていたが、ルイスパパことアイクの弁護による原作通り5日目で釈放された。

アレクシア

ルイスとの教えが活きたり、ネックレスのお陰で折れなかつたのに血だらけのルイスのネックレスを見て絶望。心が死にかける寸前。あーあ、ルイスが負けた挙句ネックレス奪われたせいで原作より酷くなつちやつた。

ゼノン

ルイスとシドのことは下に見ている。次期ラウンズだからちよつと調子に乗つてる。

——やけにあつさり壊れたな。

ゼノンは未だに血だらけのネックレスを抱えて蹲るアレクシアを見て、他人事のようにそんな感想を抱いた。

彼女が従者であるルイスに並々ならぬ想いを持つていたのは、日々の生活で彼女がルイスに向けて熱い視線を向けているのに気づいていたから知つてはいたが、まさか彼の死後が分かつただけでこんなことになるとは思わなかつた。

(人の想い、というのは儂いものだ)

ゼノンは剣を鞘にしまい、アレクシアの腕を掴もうとした瞬間。  
——とてつもない悪寒を感じた。

「！」

ゼノンは躊躇なく体を低くしその場から転がるように離れる。その刹那、自身が立っていたところに2つの漆黒が立っていた。

「エル……急いでいるからって、僕の腕を掴んで跳ぶのはやりすぎじゃない？」

「……悪い、冷静じゃなかつた」

1人は漆黒のロングコートを身にまといフードを深く被り片手に漆黒の剣を、もう1人は同じく漆黒のロングコートを身にまといフードを深く被っているが、更に口元を布で覆つて漆黒の刀を持つていた。

「漆黒を纏いし者……。君が近ごろ教団に噛み付いてくる野良犬か」

ゼノンは2人の姿を見て鋭い眼光と共に剣を構える。

「我が名はシャドウ。陰に潜み、陰を狩る者……」

「我が名はエル。同じく陰に潜み、影を狩る者」

対して2人から出たのは深く、低く、深淵から発せられたような声だった。

「ぐはッ！」

剣を弾かれて隙ができた胴体を蹴られ、壁に叩きつけられたゼノンは痛みで顔を歪ませながらも目の前の男を睨む。

「この程度なのか？」

相対するのはエルと名乗った男。見下ろす形のせいかゼノンから見えた男の目は拍子抜けしたとでも言わんばかりに呆れていた。エルからすれば戦う前に「次期ラウンズの第12席」とゼノンが自信満々に名乗っていたため、自分を倒した女性と同レベルを警戒して剣を交わせてみれば拍子抜けもいい所だった。

それに何より、剣に込められてる想いが軽い。アレクシアと最後に手合させした時の剣の方が何百倍も、いや比べるのが失礼なぐらい重かつた。エルはそんな男がディアボロス教団の幹部と思われる地位に入れるとは到底思えなかつた。

しかし、そんなエルの心情などゼノンからすれば知つたことでは無い。

「キサマアアアアアアアア!!」

ゼノンは叫びながら魔力を更に濃密に練つてエルに斬り掛かり、対してエルは剣道で言う正眼の構えを取つて迎撃しようとした瞬間。

——ガキン！

「なつ……!?」

その間にシャドウが割り込みゼノンの剣を容易く弾いた。ゼノンはシャドウが間に入つたことを認識すら出来ていなかつたことに、エルはシャドウがいきなり割り込んできたことに驚いた。

「シャドウ。お前……」

エルがシャドウの真意を問いただそうとした瞬間、彼は首を僅かに後ろに向けてエルの後ろに目を動かす。そしてそれに釣られてエルが目を向けると、そこには。

「ルイス……」

エルたちがゼノンと戦いを始めてから数分経過しているというのに、まだ赤黒く汚れたネットクレスを両手に蹲つてアレクシアの姿。シャドウは最初こそ、陰の実力者的なムーブ出来るんじゃね？と思つて声をかけようとしたが、彼女の絶望に染まつた光のない目を見てこれは自分が何を言つても無駄だと判断し、自分より適している人物にその役を讓ることにした。——言つてしまえばエルに丸投げした感じなのが。

シャドウはエルが自身の意図を理解したのを察すると、左手の三本の指を立てる。その意味は3分だけ時間を作つてやる、というものでシャドウは「あ、仲間のために後から出てきて時間作るつてなんか陰の実力者っぽいかも！」と内心満足し、エルはそんなこと露知らず純粹にその厚意を受け取るとアレクシアの傍へ近づき――

(……なんて説明しよう)

状況に似合わずそんなことを考えた。アレクシアの手にある無くしたと思つていたネットクレス——血と思しきものが付着——を見ればゼノンが彼女になんて言つて渡したのか何となく察することが出来る。自惚れだとは思うが、恐らく自分が死んだと聞いてこうなつていると予想しているため自分が生きていることを伝えればいいのだが。

(……で正体明かす訳にはいかないし……)

1番手つ取り早い方法ではシャドウガーデンのことを話さざるを得ないこと、そうなつた場合はシャドウガーデンの秘匿のために表世界から姿を消さないといかないだろうし、父親にも迷惑をかける。それを考慮すると正体を明かして生存を伝えるのは却下。

そうするとあと残るのはシャドウガーデンで瀕死のルイスを保護した形で伝えることなのだが、どうやって帰るかや追求をどう逃れるのかの問題になる。

(本当になんて説明すべきだ？時間もあと2分ぐらいだし……仕方ない、もうなるようになるしかない)

エルは考えをまとめるとアレクシアの肩に手を置いて自分に意識を向けさせる。アレクシアは光のない瞳でエルの方を一瞬見やり、目

を見開く。

「……ルイス？」

「……人違ひだ。だが、私が話そうとしていた話題ではあるがな」顔を隠してはいる十声の高さ十口調まで変えていっているのに一目見ただけで自分の正体に勘づいたアレクシアに息が詰まりそうになつたが、それを悟られない内に話題を提供する。

すると――

「ルイスのこと!? 教えて、ルイスは生きてるの!? 無事なの!?

「……すぐ話すから落ち着いてくれ」

目に僅かながら光が戻り、勢いよくエルの襟首を掴み思いつきり揺さぶりながら催促するアレクシアに気圧されながらもエルは自身の正体がバレてないことにほつとしつつ、冷静そうな声で抑えるように言い、彼女が若干落ち着いたのを見て話し出す。

「結論から言うと、彼は生きている。たまたま水路で流れているのを見つけてな。まだ意識は戻っていないが、命に別状はない」

「……本当よね?」

「……」で嘘をつくメリットがないだろう。明日の朝には彼の寮のベッドに寝かせておくよう手配してある

「……良かつた」

エルの言葉が嘘でない、と確信したアレクシアは涙を流しながら安堵したような声を出す。エルはここまで心配させてしまつたのか、と改めて自分があの女性に対しても負けたことへ怒りを持ちつつも、ゼノンとシャドウの戦いの方へ視線を向ける。そしてアレクシアもそれに習い視線を向ける。

「クツソオオオオオ!!」

「……」

ゼノンの猛攻をいとも簡単に防いでいくシャドウの姿。自分が追いつけないと諦めかけた天才の剣を圧倒していたのは凡人の剣。力が、速さが、才能がなくとも諦めずに基礎をひたすら積み重ね続けた果てにある、幼い頃に見た理想だつた。

――その人の剣を見れば、少なくとも打ち合えばその人が積み重ね

てきたものがいざれはなんとなくでも分かるようになるよ。

初めて稽古した時にルイスが言つていたことを思い出す。あの時のアレクシアは彼の言つていることがよく分からなかつたが、長く鍛錬を積んだ今、彼女は理解できた。

シャドウと名乗つた男の剣は、諦めずに前を見て、ただ真っ直ぐに積み重ね続けたものだつた。そこでふと、アレクシアは姉が自分が無様に負けたあの日にかけた言葉を思い出す。

『私、アレクシアの剣が好きよ』

あの言葉はアイリスから見たアレクシアの剣が、今自分がシャドウの剣を見て思つたのと同じ感想から出た言葉ではないか。今になってアレクシアはアイリスが何故あのようなことを言つたのか何とか分かつた気がした。

「想いなき剣に、斬れる物なし」

「…え？」

「私の師の教えだ、アレクシア・ミドガル。君は何のために剣を振るうのか、どんな譲れない想いがあるのか、それをよく考える。その答えが出た時、君の剣はもつと強くなるはずだ」

エルのやけに実感の籠つた言葉は、アレクシアの胸に重く、そして大きく響き渡つた。

\*\*\*\*\*

「はあ……はあ……き、貴様、いつたい何者だ……！　それだけの強さがありながら何故正体を隠す!?」

ゼノンは切り傷だらけの体を起こしながら、目の前のシャドウに対して叫ぶように質問を投げかける。ディアボロス教団の次期ラウンズの1人として実力を認められているゼノンだからこそ、シャドウがなぜ正体を隠すのかが分からなかつた。彼ほどの実力があれば、富や地位を得ることは簡単なはずなのだ。

「我らシャドウガーデンは陰に潜み、陰を狩る者。我らはただ、それだ

けの為にある……」

「正気かッ……！」

デイアボロス教団の規模を知っているゼノンは、それに立ち向かうと暗に言っているシャドウに狂人を見るかのような目を向けるも、当の本人はそれに対してなんら気にした素振りを見せない。そしてそれがゼノンの怒りを更に増幅させた。

「いいだろう……貴様が本気だと言うのなら、私もそれに応えようじゃないか!!」

ゼノンはそう言つて懷から赤い錠剤を取り出すと。

「この錠剤によつて、人間は人を超えた覚醒者となる。しかし常人ではその力を扱いきれず、やがて自滅し死に至る。だがラウンズは違う。その圧倒的な力を制御できる者だけが、ラウンズになる権利を得るのだ」

その錠剤を一気に飲み込んだ。

その後。

〔覚醒者3 rd〕

先程ゼノンが出していたものとは桁違ひな濃い魔力が、災害を思わせるような暴風となつて吹きあられ壁と床を揺らす。

変化はそれだけではなく、アイリス、エル、シャドウの3人によつて傷つけられた傷が瞬く間もなく治癒されていき、筋肉は膨張し、目は赤く充血、更に毛細血管が浮き出た。

「貴様らに最強の力というのを見せつけ、絶望を与えてやろう」

そのプレッシャーは最強の騎士として名高いアイリスをも超えている。ゼノンは確実にシャドウたちを超えたと確信し、笑みを浮かべ余裕を持った態度で圧倒的な力の前に絶望しているであろう3人を見やる。

「……醜いな」

「……醜いわね」

「……哀れだな」

シャドウとアレクシアは軽蔑を持つて、エルは心から哀れむような声で異形と化したゼノンに向けて呟いた。

「醜いだと……？ 哀れだと……？」

3人の反応に對してゼノンは笑みを消し、3人、特に哀れだと言つたエルに向けて怒りの視線を向ける。

「あんた程の才能があればそんなドーピングなんかしなくても自力でその域に辿り着けることが出来たはずだから、哀れだと言つた」「なんだと……！」

「加えてその程度で最強を驅るな。それは最強というものの冒涜だ……そもそも借り物の力で最強に至る道などない」

「貴様ら……！」

エルとシャドウの言葉にゼノンは顔を怒りで更に歪ませる。

「せめてもの手向けだ。貴様の最期に最強の力を見せてやろう」

シャドウの魔力がこの日初めて高まつた。これまで彼は殆どその魔力を使つておらず、素の身体能力だけでゼノンの相手をしていた。

その高まつた魔力は青紫の線となつて姿を現した。細い幾筋もの線。その線が体に張り巡らされている血管のように、シャドウを取り巻き、美しき光の紋様を描いていく。

「凄い……」

「……」

アレクシアはシャドウの綿密な魔力操作、そしてその操作によつて練られた魔力に感動し、エルも内心でシャドウの魔力操作の精度がここまで上がつていることに内心驚愕していた。

「な、なんだこれは……？」

そして驚愕しているのはゼノンも同じだつた。デイアボロス教団の中でも上位の実力にいる彼ですら魔力をこのような形に出来た者を知らなかつたからだ。

「真の最強とは何か……その体に刻め」

漆黒の刃に魔力が螺旋を描きながら集約されていく。それはまるで全てを吸い込むかのように美しく、そして畏怖を感じさせるものであつた。

「う、うあああああああ！」

せめてもの抵抗としてヤケクソ氣味に振るわれたゼノンの剣はシャドウを捉えるも、体を切り裂くことなく刃が碎け散る。

「ひつ、ひいつ!!」

「これが我が最強」

「ま、待ってくれ……！」

大気をも震わせるシャドウの魔力にゼノンは恐怖で震えながら静止の声あげる。だが、それは無慈悲にも振るわれた。

「アイ・アム——」

## 「アトミック」

放たれたソレは光とともに音をも飲み込んだ。

その光はアレクシア以外のものを全てを飲み込んだ後、爆発した。王都の闇を照らすかのように青紫色の光が夜空を駆け巡った。

アレクシアが気がついた時には、ゼノンの姿はもちろんの事、シャドウとエルの姿もなく、あるのはシャドウが残した爪痕のみだつた。  
「…………」

アレクシアはふと下を見ると刃がまだ残っている剣が落ちているのに気がついた。彼女は持っていたネットクレスを腕に結び、剣を拾い目を閉じて想像する。

想像するのはシャドウが見せた凡人の剣。彼が振っていた通りに剣をアレクシアは振る。

自分の剣にするために、ただひたすらにシャドウの剣を振るう。  
(私は何のために剣を振るうのか。譲れない想いは何なのかな……)  
そして頭の中ではエルが自分に言つたあの言葉を受け止め、自身が  
剣を振るう理由を考えていた。

## 17 冊目（裏）

その1：デルタが見た夢

デルタにとつてエルという存在は大きかった。ボスと慕うシャドウとほぼ同等の強さを持ちながら、自分のことをずっと見てくれた太陽のように温かい人。

デルタは気がつけばエルという人間のことを愛しており、彼女自身それを自覚していた。だからこそ会えた時は沢山一緒にいれるようにしていたし、一緒に寝ていたりもした。

デイアボロス教団を倒すのが目的とはいえ、デルタはエルとのそんな日々がいつまでも続くと思っていた。

だからこそ――

「エルが死んだわ」

突然アルファアが言つたことをすぐに認識できなかつた。

「……あ、アルファア様？ 何を言つてるんです？ エル様が死んだ……？ そんな訳あるはずがないのです！ いくら何でも言つていいことと悪いことがあります！」

怒りを滲ませながらもそんなはずがない、と言うデルタを見てアルファは表情を一瞬だけ歪ませ、だが次の瞬間には無表情に戻す。

「事実よ、デルタ。受け入れられないとは思うけど……」

「聞きたくない！！」

「……」

「そんなの嘘だ！ エル様が死ぬわけない！！ だつて、デルタ、まだエル様との約束まだ残つてる!!」

遠い昔の約束だった。デルタがエルと最初に会い、そして彼が王都に戻ることになつた時に約束したあの内容を彼女はまだ覚えていた。次に彼が帰ってきた時にお願いした内容はまた別物で、あの時の約束はまだ果たしてもらつてない。エルが自分との約束を破るわけないとエルを信じているからこそ出た必死の言葉。

「……デルタ、来なさい」

アルファアはそんなデルタの服の襟を掴むとそのまま強引に引き

摺つていこうとする。

「嫌！行きたくない、離して!!」

デルタは嫌な予感がし、アルファの手から離れようと何度ももがくも魔力で身体能力を強化しているのか、全く離れることが出来ず、そしてデルタ自身どこか全力で抵抗できずにいた。

そしてアルファはとある部屋の前で止まると息を吐いてからドアを開ける。

「デルタ、これが現実よ」

「あつ……」

そうして連れてこられた部屋の真ん中には、簡素な台の上で目を閉じて横たわっている大好きな人の姿。

デルタは彼が本当に死んでいると――

「嘘だ」

フランフランした足取りで横たわるエルの元へ向かう。

「デルタのことを驚かそうとしてるだけなのです」

自らに言い聞かせるようにデルタは言葉を紡ぐ。

「前にデルタのことを驚かして、楽しそうにしてたの覚えてるのです」

そうして辿り着いたエルの顔にデルタは手を伸ばす。

「エル様、早く起きるので――」

――自身の指先で触れたエルの頬は冷たかった。

「……今回はかなり手が込んでるのです」

デルタはエルの心音を聞くために彼の胸元に耳を付ける。

――心音は鳴つておらず心臓は動いていなかつた。

「エル様が、やくそく、やぶ、るわけ、ない……おきてよ、えるさま……」

どうしょもない事実だつた。シャドウガーデンのNº. 2である

エルことルイス・エアは死んだ。

「うわあああああああああつッ!!」

\*\*\*\*\*

「……ツ!!」

デルタは飛び起きた。心臓が破裂しそうな勢いで鼓動し、体は汗まみれだ。

(……夢?)

先程見た思い出したくもない悪夢をデルタはそう結論づけようとして、直ぐにやめた。

エルとの特訓で更に磨かれたデルタの直感が囁いていた。

——あれは近い未来に起こるものだと。

「——ツ!!」

「ふあああ……デルタ? こんな時間にどこに——」

「エル様が死んじやう!!」

「は? ちょ、ちょっと!?」

たまたま起きていたイプシロンに対し悲鳴にも近い叫びを上げながらデルタは、静止の声をかけるイプシロンを無視して外へ飛び出す。

幸いにもデルタはエルの匂いがどんなに薄くても追跡できるほどに覚えており、彼女は自身の嗅覚と勘を頼りにエルを探す。そして——

「エル様!!」

水路で力なく浮いて流されているエルを見つけた。

「!!」

デルタは躊躇せずに水路に飛び込んだ。彼女がエルから泳ぎも教わっていること、並外れた腕力を持つていることが重なり彼女はエルを何の苦労もなく陸に連れてくることに成功した。

「エル様! しつかりして! エル様!!」

「……」

デルタは胸と腹部に怪我をしているエルに驚愕しながらも、彼から教わった魔力操作で止血する形で応急処置を施してから、頬を叩いて必死に呼びかけるも帰つてくるのは無言。それに嫌な予感がしてデルタは胸に耳を当て、目を見開く。

「いや、まだ!!」

デルタは諦めそうになる心を奮い立たせて、かつてエルに教わった蘇生処置を思い出しながら行う。胸の傷が再度開かないように注意しつつ心臓部分を口に出して数えながら30回押し、エルの口に自身の口を合わせ2回息を吹きかけ、起きる気配がないのを見て再度同じように行動する。

(エル様、デルタを置いていかないで――！)

デルタは祈りながら何度も心肺蘇生法を行い続けた。

「ごほっ！ がはっ！」

「！」

そして祈りは通じ、エルは息を吹き返した。急いでデルタはエルの胸元に耳を当てる。弱々しいもののしつかりと動いている心臓。それにデルタは安心し腰が抜けそうになるも、すぐに気を引きしめる。「待つてて、エル様。すぐにちゃんと治すから!!」

デルタはエルを背負うと王都にある隠れ家に向けて全速で走つていつたのだつた。

その2：ルイスが救助されてから治療まで

「ルイスの様態は？」

「胸を斬られた上にお腹を刺された拳句、水路に落とされて血が沢山出ていたはずなのに生きているのが不思議なくらいです。デルタ様が咄嗟に傷を塞いで心肺蘇生をしたとはいえ、奇跡ですよ」

アルファは医療方面に詳しいメンバーから聞いた情報に頷きつつ、思考する。ルイスことエルの実力はアルファもよく知っている。単純な剣技だけならあのシャドウより上ということもあって、その彼がここまでボロボロにされるとは思つていなかつた。

教団からこちらに寝返った元ラウンズからそれ程の手練がいたといふ話は聞いておらず、アルファの思考は更に深くなる。

(それに、エルはシャドウより上手くないとはいえ魔力操作による治癒はかなり得意はず。それなのにすぐに治療できていないのは何故?)

アルファが疑問に思つてはいたのはそこだ。仮にエルがすぐに水路に落とされたとしても、傷を治せない理由にはならない。そうすると考えられるのは腹部を刺された時点、もしくは腹部を刺されたと同時に水路に落ちた時点で気を失っていたか、あるいは魔力操作に支障が出る何かがあつたかのどちらかだろう。

(……前者ならともかく、もし後者であつた場合は対策を立てる必要があるわね)

微量ながら彼から血を抜き、イータに毒かなにかが混入してないか解明する手筈はもう取つてあり真相が分かるのもそんなに遠くないだろう。

(……今はエルが早く起きてくれることを祈るしかない、か)

アルファは盟友でありながら大切な幼馴染でもあるエルが早く目を覚ますことを祈るのだった。

### その3：謎の女性

「……シャドウガーデン、どのくらいかと思つてはいたが思つたよりやるな」

シャドウの放つた『アイ・アムアトミック』を見ていたその女性は少し感心したように呟く。自分にあれと同じぐらいの芸当ができるか、と言わればあそこまで加減できず更に周りを破壊していただろう。

「しかしたかが次期12席程度では相手にならないか」

女性はため息混じりにそう漏らす。自身の記憶の中でもゼノンの才能はかなりあつた。前世と言うべきあの世界で生まれていれば、剣聖と呼ばれるほどの剣の使い手になれるほどの可能性があつた。少なくとも、自身が最後に取つた弟子と比べれば圧倒的であつたが。

「……いや、よそう。私を殺した英雄はいないのだから」

女性は首を振つて思考をおいやる。それよりも考えるべきことがあつたのだ。

「ルイス・エアの死体が見つかつたという情報が出でていない……あの

救つた弟子

状況から助かるとはあの男、よっぽど運が良かつたと見える」

ある弟子と酷似した剣をしていた少年、ルイスを落とした水路は遅くとも流した半日後には人目に着くように水が流れている。そのため、数日間経過した今もその情報がないということはあの状況から一命を取り留めたということになる。

（前世で使つていた毒の再現に時間がかかり、即効性だけを重視して持続性が3時間程度であつたのが仇となつたか。いや、あの剣を通して感じた懐かしさに流され首を取らなかつたのがそもそもその失態か）課題はまだ沢山あるな、と女性は考えると即効性もあり持続性も最低半日はある毒のレシピを頭の片隅で考えながらその場を後にしたのだった。

——その胸に、僅かな期待を持つて。

# 18 冊目

€月：日

昨日はゼノンをシャドウがぶちのめした後すぐに自分が休んでいる寮にこつそり戻つて寝たフリをしていたため日記が書けなかつたが、今日は大丈夫そうなので書いてる。

とりあえず、今日聞いた話やあつた事を整理がてら書いていこうと思う。

まず、アレクシア誘拐事件はアイリス様がアレクシアを見つけたことにより一旦は解決した。しかし、今回の騒動でアレクシアを通じてディアボロス教団のこと、その教団と敵対しているシャドウガーデンという2つの組織があることが遂に王都側にもバレてしまつた。これに関してはアレクシアが誘拐されてしまつた時点でこうなるのは察してはいた。アルファたちも覚悟していたらしく、これからは王都側とも場合によつては争うことになるのも視野に入れておくべきだろう。

次にアレクシアの容態に關してなのだが、見舞いに来てくれたアイリス様たちの話によれば擦り傷などはあるものの軽傷であり、少々体の線が細くなつたが明後日辺りにはいつも通り過ごせるようになるだろうこと。

これを聞けて本当に安心した。ただ、今回の件は俺の油断と実力不足のせいで攫われてしまつたのに相違ないから鍛錬の時間も増やし、アルファたちにも言われた通りスライムスーツとスライムソードも常時持つようにしないと。

そしてその次に俺が事情聴取で話したことついてだが……これは俺があの女性に負けてからこの部屋にいるのを見つけた人が起こすまで意識がなかつた形、つまりシャドウガーデンに救われた記憶は無いという形で押し通した。ただ、交戦したあの女性に關してはきつちり開示。とてつもない剣の使い手だということ、魔力操作に支障をきたす毒のようなものを持っている可能性があることを全部伝えた。

尤も、後者に關してはアルファから教えてもらつたものだけど、アイリス様やアレクシアに死んで欲しくないから開示させてもらつた。

最初こそ、アイリス様の近くにいたお付の騎士の人は信じられないと言つた様子であつたが、アイリス様が俺のことは信頼出来ることをフォローして下さりそこは一応何とかなつた。

そして最後に俺についてなのだが……3日間は安静するだけになつた。アレクシアの誘拐を未然に防げなかつた挙句行方不明になるという大失態をしたのにも関わらず、お咎めなしというご都合主義を疑う結果だつたのだが、これはアイリス様とアレクシアが弁護してくれたのと、ゼノンという実力者が敵にいたことから一介の魔剣士が負けても仕方ない、ということがあつたかららしい。

あと安静期間が3日なのは傷自体はほぼ治つてゐため経過観察としてということからとの事だつた。

以上が今日あつたことだ。因みにアイリス様からは「無茶しないよう」やら「しつかり安静にすること」やら色々言われた。が、1番応えたのは「私はあなたのことを見つけていたからすごい心配だつた」だろう。

正直そんなふうに思われているとは思わなかつたし、そもそも接点もあまり無かつたのだ。それでもアイリス様はそうは思つていなかつたらしく、剣の相手を初めに話し相手、果てにはアレクシアのことで俺が相談しに来たことなどが積み重なつて弟のように思うようになったとのこと。

……とりあえず無茶はしないように気をつけようとは思う。無理はすると思うけど。

€月&日

デルタが父さんからの手紙を持つて訪ねてきた。直接父さんが来ればいいのにと最初は思つたが、どうやらあの事件の事後処理が忙しいせいで時間が作れず、たまたま父さんを見つけて話しかけてきたデルタにこれ幸いとばかりに手紙を書いて頼んだ、という経緯があるみたいだ。

これを聞いた時思つたのが本当にデルタは偶然父さんを見つけたのか、という事だつたのだが……楽しそうにこちらに話しかけてくる彼女を見ていたら言う氣も無くなり、水に流して話していたところアイリス様がやつてきた。

ぶつちやけ問題はここからだつた。アイリス様はドアの外に「面会謝絶」と書いておいた貼り紙を貼つておいたらしいのだが、それを無視して入つてきたデルタのことを警戒し始め、一方でデルタもアイリス様を見た途端に敵意むき出しで唸り始めたから生きた心地がしなかつた。

とりあえず体を起こして2人の間に入つて落ち着くように何とか説得し、一旦落ち着いたところでデルタのことを「幼馴染みのユウナ」として紹介し、彼女が来た理由も父さんからの手紙を預かつたからと説明したところ、アイリス様が「私の早とちりでした」と謝罪して下さり、そしてデルタには初対面の人に敵意を出さないこと、と俺から言つてその場は納まつた。

その後は俺とデルタの馴れ初めをアイリス様から聞かれたので、前々から打ち合わせしていた通りに説明した。地元の街で1人で歩いていたところを俺が声をかけたら親がいないという事だつたので、家に招待してそれからの付き合い、という内容だつたけど普通に納得してもらつたので結果オーライだ。

あ、あと俺とデルタが互いのことどう思つてるか聞かれたな……俺は「大事な幼なじみ」つて答えて、デルタは「大好きな人なのです!」つて答えた瞬間、アイリス様が額に手を当ててため息吐いてたけどどうしたんだろうか。あと、デルタの大好きは友愛的な方だとは分かつてるが、勘違いしかけた自分が本当になあ……非リアを拗らせるところになるつて身をもつて体感したくなかった。

なんか悲しくなつてきたのでもう寝よう。

ちなみに父さんからの手紙の内容は例の事件の後処理で暫くこちらにいるから、何かあつたら直接言いに来る、またはユウナに頼んで手紙を出してくれというものだつた。

……副団長の座を蹴飛ばした理由、書類仕事が嫌だからとかじやな

いよな？

%月☆日

今日はアレクシアが訪ねてきた。来るとは思つてなかつた十部屋に入れたら嫌な予感がしたのでドアを直ぐに閉めたら「ルイスが私に酷いことをしたつてアイリスお姉様に言いつけるわ」というとんでもない脅迫が飛んできたため部屋に入れてしまつた。

その後は紅茶を出して暫く雑談していたのだが、シドと別れたこと、自分が目指す剣が見つかること、自分が剣を振る理由が見つかることをアレクシアは話してくれた。特に目指す剣が見つかることを話していた時は、憑き物が取れたかのようになッキリした様子で話してたからとりあえず安心した。……シドと別れた理由に関してはゼノンがいなくなつたからとしか話してくれなかつたし、剣を振る理由に関しても「まだ秘密よ」とウインク飛ばされて誤魔化されたし、ちょっとモヤツとだけど。

そしてそんなアレクシアだが、明日が休みというのを利用して俺の部屋で一夜を明かすつもり満々みたいで1人用のベッドにもう入つてこちらをジーツと見ている。俺の嫌な予感の正体はこれだつたのかもしれないな。つーか、前とは色々違うの一绪に寝る気満々なの本当にどうなんだ？異性との距離感間違えてない？デルタもそうだけど今どきの子の距離間分からねえ……アイリス様に聞いたらなんか酷い目に合いそうな気がするし、シドに聞くのはなんかおかしい気がするから、アルファやガンマ、ゼータ辺りに今度聞いてみるか。

\*\*\*\*\*

「すー……すー……」

「全く……よくこの状況で寝れるわね……」

互いの体が密着出来るほど距離が近いというのに、呑気に寝息を立てて寝ているルイスにアレクシアはため息を吐きながら答えた。

1人用のベッドに2人、しかも15歳とそれなりに成長している人

間が2人も入っているのだ、普通に考えて狭くないわけが無い。事実アレクシアの胸がルイスの背中に思いつきり当たっていた。

尤も、アレクシアはこの状況を最初から狙っていた訳なのだが。（……これで少しは意識させることが出来るかと思つてたけど、そう甘くは無いみたいね）

アレクシアは昨日姉のアイリスから「ユウナ」という獣人の少女がルイスとの距離がかなり近いこと、そして異性としての好意を持つている可能性があると聞き、危機感を募らせてこうして行動に出た訳だが、当のルイスは普通に寝ている始末。

「んつ……んん……」

「ちよつ……!?」

そんな中ルイスはモゾモゾと動いて寝返りを打ち、アレクシアと正面から向かい合うような形になつた。

アレクシアは急に目の前にルイスの顔が来たことに驚き、それで早く鼓動している自身の心臓を気にしないように意識したところで、ふとルイスの心臓辺りに自身の耳を当てる。

——トクンッ、トクンッ……

一定のリズムで鳴る心臓にほつとし、そのままルイスの背中に腕を回すと彼の体温をより強く感じるためと思いつきり抱きしめる。

アレクシアは確認したかった。ルイスが生きていること、そして彼が自分の傍から居なくなつていなことを。エルと呼ばれていたルイスにどこか似ているような気がする男と姉であるアイリスからルイスの生存を聞いていたとはいえ、この目と手で触つて確かめるまでは完全に安心出来ていなかつた。本当であれば直ぐに会いに行きたかったのだが、囚われの身であつたことや少なからず怪我をしているせいでそれは叶わなかつた。

（大丈夫、ルイスは生きてる。でも……）

アレクシアは不安だつた。アレクシアはルイスという人間をずっと近くで見てきたからこそ分かる。もし、目の前でルイスにとつて大事な人が危険な目に合いそうな場合彼は自分の身を投げ出してでも首を突っ込むだろうと。

そして実際にルイスは攫われたアレクシアを助けるために戦闘を行い、返り討ちにあつていてる。

結果論ではあるが、もしアレクシアが誘拐されるほど弱くなければルイスが怪我を負うことはなかった。その考えが最初、頭によぎった時はアレクシアは自身の無力さが悔しくて力をもつとつけねばと思いつ、そしてかつてルイスが言つていたことを思い出した。

『才能がない、つて言われたけどそれでも守りたいものがあつたら、俺は剣を振るい続けられたんだ』……本当に私は貴方に救われてばっかりね』

アレクシアはその言葉を思い出した時、あつさりと胸の中にあつたモヤモヤが消え去つていた感覚がした。そしてその言葉のお陰でアレクシアは自分にとつて譲れない想いが何なのかを定めることが出来た。

「ルイス。私はね——」

少女の決意はそのまま月の光が照らす夜の中へ入つていった。

%月♪日

朝アレクシアの髪を整えて見送つたあと、今日は休日ということもあつてかシドが俺の部屋に珍しくやつてきた。最初は他愛もない話をしていたのだが、途中でアレクシアにぶつた斬られたという話を聞いた時はショックで気絶しかけた。

それでそうなつたわけを聞いてみたら、「これからも友人として付き合つてくれないかしら?」と聞かれた際に親指を下に向けて断つたらブチ切れられて笑顔と共に斬られた、というのが流れだつた。

うん、これに関しては今思つてもアレクシアの方が悪い。無論、シドも煽るようなことをしたからアレクシアだけが悪いとは言えないけども、こればかりは流石になあ。

という訳でこれまでの詫びも兼ねてシドに色々奢ることが決定し、早速明日2人で王都を色々回ることになつた。そしてその話を戻つてきたアレクシアに話したところ「あなたの主は私よね?」と圧をかけられたが、これまでシドに迷惑をかけてたことを盾に説得し、無理やり納得してもらつた。代わりに今日も一緒に寝る羽目になつただけど……女子つてよく分からん。

もうちょっと愚痴とか書きたいけどアレクシアからの視線が凄いので、ここまでにして寝よう。てか、暑苦しくないのでしょうか。俺は暑いのはまだ耐えられるからいいんだけども。

%月↓日

久しぶりにお互いの事情を知つてるシドと2人でゆつくり過ごした気がする。

シドとは朝から待ち合わせをし、そこから骨董品店を回つて「陰の実力者がもつてそうな物」を探したりそれで意見を交わしたり、昼はまぐろなるほどに寄つて昼飯を奢り、そこからは適当にブラブラしながら雑談をした。

ただ俺の前世の話をする時は街の外に出て誰もいなそなところでした。

シドは俺の前世の話を聞くこと、特に魔王軍幹部の話が色々想像をかきたてられるから特に興味があるらしく、今日は俺がとある貴族の令嬢にハジメテを奪われそうになつたところから、魔王軍幹部の1人でありながら四天王の1人である【魔将】と戦つたところまでを話した。今思えばよくユラとポチすけは俺らがバラバラにされた時倒せたな。あの【魔将】は如何にも魔法使いです、つて感じの風貌で実際に魔法の腕も一流と表現することすらおこがましいぐらい凄まじいくせして、槍の扱いも一流とどんでもないやつだつた。

タイマンだと全盛期なら苦戦はすると思うが倒せるとは思う。代わりに腕1本は覚悟した方がするべきなのだが。

そんなこんなで今日は中々楽しかつたし、アレクシアには迷惑をかけたし、デルタには命を助けて貰つたからその礼としてミツゴシ商会や商店街で色々買つた。

アレクシアには鍛錬用のヘアゴムを買つた。ちょっと前に古くなつてきたから買い替えようかな的なことも言つてたし、失敗は無いと思う。そしてデルタに関しては……これまでの傾向からして一緒に料理するか、俺が手料理を振舞つた方が物をあげるより喜ぶので、今回は今頃書類で埋もれているであろう父さんへの労い弁当も兼ねて材料を多めに買つた。

作るのは夏も近づいてきたわけだし、おにぎり、卵焼き、唐揚げとマリネ、後は父さんの好物でもあるきんぴらごぼうにする予定だ。料理する場所についてはシドと別れた後に学園に行き、その学園で授業の時に使う調理室を利用する申請を出して、許可も貰つたから大丈夫だろう。

本当は一緒に作りたいところだけど、流石に場所が場所なため今は断念。やるとしたら実家になるかなあ……。

あと、デルタには学園からの帰りに会つてその時に集合場所と時間を伝えられたのは本当に運が良かつた。本当はゼータとかに伝えようと思つてたから良かつた。

%月・日

今日は朝から忙しかつた。

まず5時に起きて材料をスーツケースにぶち込んでから急いで学園の調理室に行つて、弁当を父さんと手紙で知った父さんの小隊の皆さん、そしてデルタと俺の分を作つた。ただ、父さんとデルタはよく食べる所以で2人だけで6人前、小隊の人たちで6人分、そして俺の分が2人前という訳で合計14人前分作る羽目になつてちょっと大変だつたのだが、料理 자체は前々世の頃からの趣味だつたから苦ではなかつた。後は自分の分を弁当箱にしまつてから急いでデルタとの待ち合わせ場所に移動。デルタにお父さんの弁当を彼女の分のお弁当を渡し、父さんたちに届けるようにお願いした。その際に彼女に頭を撫でて欲しいと言わされて頭を撫でたわけだけど……やつぱり狼と言うより犬だよなあ……

その後はアレクシアと一緒に登校するために、彼女のところまでまた急いで行き、そのまま学校へ……とはならず弁当箱から匂いが出ていたのか色々問い合わせされてしまい、デルタにも作つたというのは言わずに白状したところ何故かそれを昼に二人で食べることになつた。

それでお昼になつて2人だけで食べれる場所に行こうとしたのだが、何故か食堂で堂々と食べる派目になり、周りの視線が痛かった。そして肝心のアレクシアの感想は「すごい美味しかつた」と悔しそうに言つていた。てか今思つたけど、これは分からせを遂行できたのでは?やつたぜ。

ちなみに今日はアレクシアの命令で別々に帰ることになつたんだけど、また誘拐事件起きたら元も子もないでの、影ながら見守つていた。それでアレクシアは本屋によつて熱心に料理本を読んだ後、何冊か買ってたけど、まさか俺に対抗してなんか作ろうとしてるのかな?……一応明日それとなく聞いてみるか。

あ、ヘアゴム渡すの忘れてたわ。

\* \* \* \* \*

アレクシアは激怒した。必ずかのクソボケ唐変木従者のルイスを分からせてやると決意した。アレクシアにはルイスの交友関係が分からぬ。アレクシアはミドガル王国の第二王女である。王女として勉学に励み、姉に憧れ剣を振ってきた。けれどもルイスに向ける想いは人一倍重かつた。

(だからルイスのカバンからいい匂いしてゐる理由を聞くのは何らおかしくないわ)

アレクシアは自分を正当化しつつ、目の前で目を逸らしているルイスに笑顔で圧をかける。本音を言えば昨日のシドとのお出かけについても小一時間ほど問いただしたいところではあるが、まずはルイスのカバンから出でてゐる唐揚げの匂いの方が先決だ。

唐揚げの匂いがカバンからしてゐるということは、十中八九カバンの中に唐揚げが入つてゐるというのは容易に予想がつく。問題は何故唐揚げがルイスのカバンの中に入つてゐるのか、ということだ。まずアレクシアがこの段階で予想出来たことは2つ。

1つはルイスが誰かにあげるために唐揚げを作つてカバンの中に入れてゐる。

もう1つは誰かから唐揚げを貰つた。

正直どれであつてもアレクシアの精神衛生上よろしくない。具体的には、前者だつた場合は自分ですら食べたことの無いルイスの手作り料理を食べた人間への怒りで、そして後者に関してはルイスは一体誰の従者なのか忘れたのかという怒りで彼女の胸中は荒れ狂う。

(それにしても一体誰なのかしら……まさか例のユウナつて泥棒猫?いや、もしかしたらシド・カゲナーの可能性もあるわね……どつちであつても許さないけど)

「……はあ、分かつたよ。話すからその笑顔やめてくれ、ちょっと怖いから」

「あ”んつ?」

「なんでもないです」

アレクシアが相手が誰なのか、あれこれ予想している中ルイスが遂に折れ、一悶着起こりかけたが事情を話し出した。

「今頃書類仕事で疲れてる父さんにお弁当作つたんだよ。それで父さんの分を作るついでに自分の分も作つたから、カバンの中からする匂いは俺の分だと思う」

「ふーん……貴方、料理できたのね」

「まあ、こつちで働く前から料理をやらせてもらつてたし、なんならアレクシアの従者になつてからもたまに厨房借りて料理してたぞ」

「へ、へえ……ちなみに誰に作つたのかしら……？」

「執事長さんや他の使用人さんたちだな。賄い飯つてことで作られてもらつてたし」

「そ、そうなの……」

アレクシアは声の震えを出来るだけ抑えつつ会話を続ける。まさか使用人たちにすら先を越されていたというとんでもない事実に、彼女は動搖しまくつていた。と、同時にふとルイスの料理の腕が気になつた。ルイスの口ぶりからして使用人たちに振舞つたのは一度だけでは無いのは確かであり、そして何度も作るのを許されるほどとはどれくらいなのか。

「それなら、そのお弁当私にも頂戴」

「え」

「貴方が料理出来るの初めて知つたんだし、自分の従者がどれ程の腕前か主として把握しておくべきでしょ？」

アレクシアは堂々とルイスにそんなことを宣い——

(な、なにこれ……すごい美味しい……!)

お昼の時間帯でルイスが作つたおかずを食べて完全敗北していた。少しでもダメなところがあつたらダメだししてやろう、と思っていたのにも関わらずルイスの弁当は彩りやおかずの置き方など全てが完璧だった。味は少々濃いめではあるものの、昼前に行つたのが剣の稽

古だったことから寧ろ味の濃さが好ましく感じる。おにぎりや唐揚げ、マリネ、卵焼きも美味しかったが特にきんぴら「ぼうは味がしつかり染み込んでいたながら、唐辛子のピリツとした感じがさらに食欲をそそり、アレクシアは気がついたら完食していた。

「…………」

「どうでしたか？」

（つ、ルイス……！）

人前ということもあり敬語ではあるものの、少しごやついているルイスを見てアレクシアは少しだけイラッとしたものの、ここで言わないのは流石に失礼なため正直に感想を述べることにした。

「凄い美味しかったわよ……悔しくなるぐらいに」

「お口にあつたなら何よりです」

最後に呟いた言葉は聞こえていなかつたのか、柔らかい笑みを浮かべるルイスからアレクシアは視線を外し、とあることに気がついた。（待つて。私、ルイスを堕とす計画のうちに料理も入れてたけど……あれ以上に美味しい物を作らないといけないわけ……？）

ダラダラと背中で汗が流れる。アレクシアは王女という立場上料理をしたことはあまりない。というよりしようとしたら周りに止められた。今では物を壊すことは無くなつたものの、ルイスレベルの物を作れるかと聞かれたら悔しいが否定しかできない。

（……料理本買つて、練習するしかないわね）

アレクシアはそう判断すると、目の前で呑氣にお茶を飲んでいる従者に対して放課後は自由にするように命じるのだった。

という訳でシドくんとのデート回でした。

キャラ紹介

ルイス

我らがクソボケ。シドとは男同士+転生者同士というのもあって仲は良好。料理に関しては前々世からやっていた+前世ではパートイの皆がよく食べるため大量に作るのに慣れているため、その腕前

はかなり高い。だが、お菓子作りに関するてはイ・プシロンと比べると劣る。久しぶりにアレクシアを分からせた。ちなみに前世では勇者が4人前分、聖女が5人前分、シーフが3人前分、ポチすけが3人前分と装備よりも食費関連がかなり大変だった模様。

一応勇者パーティの面々も手伝いはしていた時期があつたが、3人とも料理スキルがお世辞にもそこまで高くなかつたため、ルイスへの負担がかなり多かつた。なんならポチすけの方が念力で火加減調整や次の調味料などを最適なタイミングで渡すなど出来たため脳筋三人衆よりも役に立つてた。

シド

我らが原作主人公。ルイスの前世話はかなり有用。それはそれとしてアレクシアとデルタ、ルイスをギャルゲーのヒロインと主人公に見立て、自分はモブっぽい動きができるよう考えてる。どちらかというとデルタ派。

アレクシア

ルイスを墮とす作戦の内1つがかなりの難易度になつてしまい困つてる。ちなみに描写外でルイスとシドのデートを尾行しようとしたが、察知したアイリスに捕まつて失敗に終わつた。

デルタ

ルイスの手作りお弁当貰つて喜んでる。本人いわく、「エル様が作つたのはずっと食べれる」とのこと。

「ふう……久しぶりの書類仕事は疲れるね……」

\*オマケ\*

アイク・エアは自分らの小隊に与えられた部屋の中で終わる気配のない書類の山と死んだ目で作業をしている部下たちを見て、少し疲れたように呟く。アレクシアが誘拐された事件と王都で起こつた強力

な魔力の爆発による被害、そして「ディアボロス教団」という組織が使っていたとされる施設から押収した証拠品を集めていた倉庫の火事の後処理に関する書類のせいで全く終わる気配がなかった。

（元々、書類仕事は好きじやなかつたけど余計嫌いになりそうだな

……）

アイクは疲れた目元を揉みながら息を吐く。

今回の件で息子であるルイスが行方不明になつたこと、ルイスの幼馴染であるシドが容疑者として尋問されているという情報を聞いたアイクは、直ぐに王都に行きシドの弁護をし、さらに今回の事件の捜査に加えて欲しいと直談判。結果としてアイクの騎士団復帰を条件に特例として認められたまでは良かつたが、小隊の隊長というそれなりの責任のある立場になつたせいで業務に殺されかけている。

そんな中、ふと時計に目を向けると時刻は丁度お昼時であった。普段であればそのまま食堂に言つてご飯を沢山食べたいところではあるが、アイクはそこまでお腹が空いていないこと、部下達を置いて自分だけ食べに行くのは憚れたため、今日も昼抜きで良いかと思つた時、ノック音が部屋の中に響いた。

「どうぞ」

「失礼します、ご主人様」

アイク隊の部屋に入ってきたのはエア家から代表してやつてきた使用人の1人であるアイネだつた。それだけだつたなら別になんとも思わないが、手に3つ持つている長方形のものを包んだと思われる風呂敷の存在感がアイクの意識を割いた。

「アイネ、それは……？」

「こちらはルイス様が作つたお弁当です。ユウナ様が朝方に私に届けに来てくれましたので、只今お持ちしました」

「ルイスが……？」

アイネから聞いた話を聞いてアイクは目を見開く。アイネはそんな彼を他所に風呂敷を空いている机に置くと、風呂敷を開いた。中からは3段積みの重箱が現れ、それを順に開けて行くと1番上には所狭しと置かれたおにぎり、2段目には卵焼きや唐揚げ、そして3段目に

はマリネときんぴらごぼうが入っていた。

部屋には唐揚げの美味しい匂いが漂い始め、書類仕事で食欲が無かつた全員の空腹を誘う。

「そしてこちらのもう2つの分は、主人様がお世話になつてゐる、ということで小隊の皆様の分でござります」

「え、自分たちにもですか!？」

まさか自分たちの分もあるとは思つていなかつた小隊のメンバーも驚きの声を上げる。

それを見たアイクはふつ、と微笑むとペンを置いて立ち上がつた。  
「よし、皆書類は一旦そこまでにしてお昼にしよう。まずは英気を養うところからだ」

『はい!』

アイクの号令を聞いた騎士たちは一斉にペンを置くと、机の上を片付け始める。

これはとある騎士小隊のお昼の出来事であつた。

「この唐揚げ美味しい……どんどん食べれるぞ……！」

「おにぎりの塩加減も丁度いい……久しぶりにこんなに美味しいおにぎり食べたな……」

「卵焼きは少し甘めだけど、なんか疲れが取れる気がするなあ……」「アイク隊長! きんぴらごぼうすごい美味しいです!」

「そうだろう? なんたつて僕の息子が作つたんだから、美味しいに決まつてるさ(……料理が得意などころも、察しが良かつたり気配りができるのも妻に似てゐるな)」

こうしてアレクシアの知らぬところでルイスの手料理を食べた人物は増えていくのだった。

## 20 冊目

%月\$日

今日の朝早速アレクシアに料理本を買った理由をすつたもんだの末に聞いてみたところ、俺に対抗心を抱いて買ったとのことらしい。なんか照れ氣味で言われたから不覚にもちよつと可愛いと思つたし、キュンとしてしまつた。デルタのわんこつぶりを思い出せなければ死んでいたと思う。

その後色々話した結果、俺が料理を教えることになつた……とか味見役に任命された。具体的に何をするのかというと、基本的に俺は作つてもらう料理を指定し、アレクシアが料理している間はあまり口を出さず、味見の時だけ指導しろ、ということだ。うーん、なんか不安だけど……まあ大丈夫だと信じたい。

因みに今日アイネさんを通して昨日の弁当はかなり好評だつたことが分かつた。ただ話によるとかなり辛い状況だつたらしいから、毎日は無理だけど週一でお弁当作ろうかな?

あ、あとなか最近通り魔事件が起きてるつていうのを聞いたけど、どの世界でもそんな輩はいるんだなつて思つた。

\*それから暫くアレクシアの料理指導が主な内容が続く。

%月・日

今日帰りにミドガル学術学園の生徒がシャドウガーデンを名乗る人物に襲われているところに介入した。

そうなつた経緯を書くと、あの時俺はアレクシアに次の料理を指定するにあたつて道具の準備や何を作らせるか考えて商店街を歩き回つていた。それであれこれ考えながら歩いていた結果、辺りが暗くなる時刻になつたのに気がつくのが後れ、近道で路地裏を通つていたら悲鳴が聞こえ、急いでそこに向かつたら、黒い外套を来て片手に剣を持った人物に襲われているのを発見。すぐに声を上げて注意をこ

ちらに向けさせて、剣を叩き込んだがすぐに逃げられてしまった。

追えなくはなかったが、襲っていた人を置いていくのは流石に出来なかつたのでその人の護衛も兼ねて騎士団の詰所に行き、先程のこと話をした。その中で、あの外套を羽織つた人物が「我らはシャドウガーデン」と言つていたこと、そしてその人物による通り魔事件が出ているという情報を聞いたため、帰ってきた今少し頭を悩ませている。

さて、あの人物がシャドウガーデンのメンバーである可能性に関してはほぼ無いとみていい。単純に俺らが一般人を襲うメリットがないのが1つ、次にシャドウガーデンのメンバーに俺とシドを除いたら男性はいないというのがあるからだ。

この2つから考えられるのは恐らく相手はデイアボロス教団のメンバーと考えられる。向こうの目的は全ての責任をシャドウガーデンに擦り付けて有耶無耶にしようとしている、もしくは俺らがシャドウガーデンが動くのを誘つていると言つたところか。

これは明日辺りガンマの所に行つて色々情報を聞く必要があるかもしれません。

\* \* \* \*

「アイリス様、大変申し訳ないのですが私も『紅の騎士団』に入らせて頂けないでしようか」

「……ルイスもですか」

学園にある自身に与えられた部屋の中でアイリスはため息を吐いた。

この結果が、シェリー・バーネットにとあるアーティファクトの解読を頼みに行く時にアレクシアとルイスの同伴を許してしまつたらどうのをアイリスは分かつたからだ。

アーティファクトの解読を承諾を貰つたまでは良かったのだが、あ

ろうことかアイリスの妹であるアレクシアがシャドウガーデンやディアボロス教団に対抗するために、調査団を兼ねた独自の騎士団「紅の騎士団」に入らせるように言い出したところで流れは怪しくなった。

アイリスとしてはアレクシアがこれ以上危険な目にあつて欲しく無かつたのだが、彼女の覚悟は本物であり最終的にアイリスの方が折れてアレクシアの加入を認めた。

そしてシェリーとの会談が終わつた後、アレクシアの従者であるルイスから「後でお話があるので、いつ頃なら空いていますか?」と聞かれ、嫌な予感がしつつも時間帯的に放課後になつてている15時を指定した訳なのだが。

「……ルイス、私としては貴方には入つてもらいたくないです」

「心配かけたことに関しましては本当に申し訳ございません。ですが、私の主を守るためでもあります。私では力不足かもしませんが、アレクシア様のことが私も心配なのです。どうか、お許しください」

「…………」

アイリスの否定に対し、ルイスは彼女を真っ直ぐ見すえて自身の想いを言う。アイリスは暫くルイスの事を黙つて睨みつけたが、ルイスは全く動じずにアイリスのことを見つめる。

二人の間にどれくらい沈黙が流れていたのか分からぬほど重い雰囲気の中、先に言葉を出したのはアイリスだつた。

「……分かりました。あなたの加入を認めます」

「アイリス様、ありがとうございま——」

「ただし、条件があります」

「条件、ですか」

やはりそうなるか、とルイスは考える。ルイスはアイリスが自身の加入に対して否定的なのは予想通りであつたし、彼女が王女という立場を使って問答無用に入団の拒否をしてこないことも予想通りであつた。だからこそ、アイリスが条件を付けて入団させないようにするか、自分の動きを制限してくることは予想出来ていた。

(さて、どんな条件が――)

「絶対にアレクシアと一緒に生きて帰つて来てください」

「……はい?」

ルイスはアイリスが出した条件に思わず間抜けな声が出てしまった。ルイスは達成するのが困難なものが来ると思っていたのもあって、彼はアレクシアですら数えるぐらいにしか見たことがない程間抜けな顔をしていた。

アイリスはそれにクスリと笑みを零すも、すぐに真剣な表情に戻る。

「これが条件です。これが守れるというならば、あなたの加入を認めましよう」

「……分かりました。必ず生きて帰つてくることをここに誓います」

ルイスは少し思案した後、頬をかきながらアイリスの出した条件を飲み、そしてそれを受けたアイリスは軽くため息を吐いたのだった。

\*\*\*\*\*

時刻は日が暮れ、街灯が街を照らす中スライムスーツを身にまとつたルイスは屋根の上を音を立てずに走っていた。

アイリスとの会話の後、ルイスは「紅の騎士団」のメンバーであるグレンとマルコに挨拶しに行つたのだが、自分の父親であるアイクの元部下だつたというグレンの会話が長引いてしまつた。そのせいで門限前までにガンマの所へ話を聞きに行けなかつたルイスは寮長と軽く談笑してから寮を抜け出し、ガンマがいるミツゴシ商会の所へ向かっていた。

次の日に聞きに行く、というのも選択肢の一つとしてはあつたものの、今回は早めに情報を入手したかつたためルイスはこのような行動をとつていた。

(それにもアレクシアのやつ、俺とアイリスの言葉を振り切つてまで騎士団に入るなんて……心配することつちに身にもなつて欲しい

よ)

ルイスがそう内心で主へ文句を言つてゐる中、彼の耳に剣と剣がぶつかりあう音が入つた。

(誰かが戦闘してゐる?……昨日のこともあるし、もしかしたら今度は魔剣士学園の生徒が襲われる可能性もあるし介入するか)

ルイスはそう結論付けると音がした方へ移動を開始するのだつた。

\*\*\*\*\*

「はあっ!!」

アレクシアの振つた剣が黒い外套を羽織つた男の剣を弾き飛ばした。

カラソと乾いた音を立てて転がる剣を尻目にアレクシアは剣を男に突きつけた。

「貴方は何者? 何故こんなことをするの?」

「我らはシャドウガーデン……」

「さつきからそればっかりね……」

アレクシアはため息を吐く。とりあえず拘束して目の前の男を騎士団の駐屯所に連れていこうとしたところで、後ろから気配がしそぐに振り返つた。

「……なるほど、お仲間さんの登場つてわけね」

同じ服装の男が剣を持つて3人立つており、アレクシアに向けて明確な殺意を向けていた。1対4という圧倒的な人数不利を背負つたことにアレクシアは冷や汗を流す。

一人一人の実力に関してはアレクシアの敵ではない。だが、4人を同時に相手にするとなればいくら彼女でも苦戦は避けられない。

(……4人全員を倒すのはほぼ不可能と見ていい。そしてこの時間で手に入れられた情報はそこまで有益では無いけど、ここで死んでその情報すら共有できないのが1番最悪なパターン。ここは何としても逃げなきやダメね)

アレクシアは冷静に状況とこれからすべき事をまとめると思を吐いて剣を構える。

「つ！」

それと同時に男達が一斉に動いた。

アレクシアはまず1人目の刺突を身体をずらして躊しつつ足をひつかけてバランスを崩させる。次に自身の回避先に振り下ろされた2人目の男の剣を受け流して位置を変える。

そして3人目の男の一撃を躱すのも受け流すのも難しいと即座に判断し、剣で受け止め力づくで押し込まれる前に相手の力を利用して受け流し、無防備な背中に一撃を加えようとして、それを援護するかのように既に別の男が剣を振り上げて接近しているのが目に入った。

「ちつ！」

剣を頭上に掲げるよう横にして男の縦振りを防ぐも、その後に別の男の蹴りがアレクシアの腹に放たれた。

「ぐうっ!?」

アレクシアは蹴りの衝撃を少しでも防ぐために体のくの字にするも、殺し切ることが出来ず後方へバランスを崩し、そしてその隙を逃さなき買った3人目の男がトドメと言わんばかりにアレクシアの心臓へ突きを放つ。

「あぐうっ……！」

彼女の心臓を貫くはずだつた一撃は直前に体を逸らしたことで、心臓ではなく脇腹を貫いた。アレクシアはその痛みを押し殺して、カウンター気味に男に向かつて剣を振るつて男の胸を軽く斬り裂いた。

「はあ……はあ……」

アレクシアは血が流れる脇腹を抑えながら状況が更に悪くなつたことに内心舌打ちする。敵側の1人だけ負傷してるもの3人は無傷、こちらは脇腹を刺され重傷。幸いなのは行き止まりの方へ追い込まれていないことであるが、今の状態で4人から逃げ切れるかと言われたらそれはかなり難しいところではあつた。

(……遠距離から攻撃出来る手段があれば、逃げ切れる確率あがるのだけれど)

アレクシアの脳裏にその考えが浮かぶも、彼女はそれを直ぐに除外し鞘を投げつけて牽制でもしようかと考えたその直後だつた。

「よく1人で持ち堪えた、強き女剣士よ」

その言葉ともに黒い影が2つその場に舞い降り、そして同時に先程までアレクシアを襲っていた男たちのうち2人の体が2つに分かれ鮮血の花を咲かせた。

「シャドウに、エル……!?」

「お前のおかげで我らの名を騙る愚か者を見つけることが出来た……感謝する」

「我らの名を騙つた罪、その命で贖うがいい」  
(どういうこと……? この2人はシャドウガーデンと名乗つたあの男たちと敵対している? それに名を騙る……? ということは今回の事件の黒幕はシャドウガーデンではないってこと……?)

「く……」

アレクシアはシャドウとエルの登場とこの2人が男達と対立していることに困惑している中、残つた一人の男はすぐに上へ飛びその場を離脱した。

「……エル、行くぞ」

「ま、待ちなさい!」

男たちの後を追おうとするシャドウとエルはアレクシアの声を聞いて止まつた。二人はアレクシアの方へ向き彼女をとてつもないプレッシャーを与えるながら見据える。

アレクシアはその圧に屈しそうになつた。膝は震え、いつ殺されてもおかしくないという恐怖心が彼女の中でピークに達し、更に先程貫かれた脇腹の痛みで気を失いそうになるも、首に掛けているネックレスを握りしめて自身の意識を繋ぎ、覚悟を決める。

「私はアレクシア・ミドガル。この国の王女よ」

シャドウとエルはただアレクシアを見据えていた。

アレクシアは自身の命を刈り取る死神の鎌が自分の首に添えられているような錯覚に陥るも、それに抗うようにネックレスを握りしめる力をさらに強める。

「あなたの目的を教えて下さい。その力を何のために振るうのか、何と戦っているのか、そして……この国に牙を剥くつもりなのか」「関わるな。その方が幸せだ」

「つ！まちな……さ……つ」

シャドウがアレクシアの質問を斬り捨てその場を去ろうとし、アレクシアは呼び止めようとするもついに限界がきて彼女の視界は暗くなり意識が無くなる直前。

「ア…ク……！」

ここに居るはずのない従者に似た声がアレクシアの耳に入った。

この後、アレクシアは騎士団の駐屯所の外で壁によりかかって気絶しているところを発見された。

制服の脇腹付近が血で染っていたことからすぐに医者を呼び治療を開始したのだが、ほぼ完璧と言えるレベルで応急処置が施されており、これは新たな謎として残つたのだった。

%月十日

今日はアレクシアがアイリス様の作った「紅の騎士団」に入ると言い出し、俺らの説得も虚しく入るのが決まってしまい、そのアレクシアを守るために俺も入らざるをえなくなつた。アレクシア様は俺が入るのも否定的だつたけど……まあそこは条件付きだけど入らせてもらつたからいいだろう。

しかし問題はその後だつた。

グレンさんと話が長引いたせいで、門限までにガンマから話を聞いて寮に帰れないと判断した俺はスライムスースを身につけて自室の寮の窓からこつそり外へ出たのだが、途中で剣と剣がぶつかりあう戦闘音が聞こえたためそこへ向かうと、アレクシアがこの前会つた通り魔と同じ服装をしている人物4人と戦つてているところを見ているシャドウを発見。アレクシアが怪我をしたタイミングでシャドウを説得し、すぐに介入して戦闘を中断させた。

その後アレクシアは気絶してしまい、怪我をそのままにすることなんて出来ず急いで応急処置を施し、近くの騎士団の駐屯所に連れていく彼女を外に下ろしてから窓を叩いて中の騎士に外を見てもらうようしむけ、彼らがアレクシアを回収したのを見届けてからその場を後にした。

この後、本当はシャドウと合流したかつたけどあいつの魔力は何故か寮の方へ向かつてたし、さつきアレクシアを傷つけたバカの方はシャドウガーデンのメンバーの一人であるニーの魔力が近くにあるのがわかつたので、そちらへ向かうと丁度尋問が終わつたのかニューの足元には事切れた先程の男の死体があつた。

そしてニーから情報は受け取れたのだが、今回こちらの名を騙つて通り魔をしていたのはチルドレン3rdという教団側が持つ戦闘員の中でも使い捨て扱いされている雑兵だつたせいで情報は特に取れなかつたとのこと。今回の事件はこちら側を誘い出すのを目的と

したデイアボロス教団が関与している可能性が高いこと、そして先日、王都でネームドのチルドレン1st『叛逆遊戯』のレックスが確認され、彼らは何らかの目的をもつて集結しているという情報を貰つた。

かなり有益な情報を貰つたが少し頭が痛いモノでもあつた。

チルドレン1stというのはデイアボロス教団によつて拾われた子供が厳しい訓練と洗脳教育、そして数多の薬剤投与の果てに精神が安定し実力も伴つたエリート兵士だ。実力としては世界規模で見ても上位に位置する程と言われており、その中でもデイアボロス教団に貢献した者はネームド・チルドレンと呼ばれている。

今回はそのネームドであるレックスがいるというのだから、明らかにろくでもないことを起こそうとしているのは嫌でも予想できる。ニューには俺の方でも警戒しておくことを伝え、その場は解散することになつたがこれは近いうちに向こうは行動を起こしてくるだろう。ライムスースとソードは寝る間も身につけるようにした方がいいな、これは。

%月×日

今日は負傷したアレクシアとずっと過ごした。

応急処置を施したとはいえ浅い傷ではなかつたため、暫く安静することになり、今日は学園の方にもアレクシアの方を優先したい旨を告げて休ませてもらつた。

左脇腹の方を怪我したため左腕を動かすと痛みが走るらしく、左腕を前々世でいう確かアームホルダーだけ、あんな感じの物を使って吊つっていた。

ではそうなるとどうなるのかというとアレクシアは必然的に右腕しか使えなくなる。では片腕しか使えないとなるのか、簡単に言つてしまえば色々と不自由になる。じゃあ、そうなると我が主の腹黒ドS王女は何をしてくるのか。

知らんのか。俺にあれこれするように命令してくる。  
ベッドから起きた時に俺の手を借りるのは分かる。片手だけだと

意外と難しいし、変にやろうとすると痛いからな。

ご飯を食べさせて欲しいは、まあ1万歩譲れば分かる。片手だけだと思つたより食べずらいもんな。でもやる側は恥ずかしいし、夜は料理人さんが気を利かせて片手でも食べれるサンドイッチにしてくれたのにも関わらず要求するのはおかしいと思う。

そして、着替え手伝つては一生分かんないねん。頼むから恥じらいを持つて欲しい。断つたら断つたで「主の命令に背くのかしら?」とまるで俺が悪いかのように言つてくるし、頭が痛い。昨日応急処置した際に間違えて頭のネジを抜いてしまつたのだろうか。結局メイドさん呼んで代わつて貰つたけど。

とりあえず、この着替えの件はアイリス様にチクるか。あ、でもアイリス様は結構初心つてことをアレクシアから聞いてるし、話していの最中でなんかツッコまれそうだな……うーん、どうしたものか。まあ、なるようになるか。アイリス様のことだから大丈夫やろ、うん。

#### %月÷日

今日は時間を見つけてアイリス様のところに行き、昨日のアレクシアの件で相談したのだが、面白かつた。

ベッドから起きる時のことはセーフだつた。でも食べさせてあげるところからもうアイリス様からしたらアウトらしい。王族としての意識が云々から始まり、恥じらいが足りないやら、そういうのは恋仲になつて2ヶ月経つてからやるべき事やら色々言つていた。

そしてその時俺は興味半分で着替えの話をしてしまつた。するとアイリス様は顔を真っ赤に染めて余計に騒ぎ始めたから面白かつた。でも今思うとあまりにも耐性無さすぎだろ。これ、アイリス様の旦那になる人めちゃくちゃ苦労するやん。流石に子供はコウノトリが運んでくるとか、キスしたら出来るとかそんなことは思つてないとは思うけど、なんか不安になつてきたな……まあ、これは未來の旦那様に全て任せよう、ヨシ。

まあ、それはさておき近いうちに開催される選抜大会にエントリー

されていることが今日アレクシアと話している時に判明した。そう、人の意見を聞かずに勝手にエントリーしやがったのだ、あの腹黒王女様は。

理由を聞いたら、「私が出れなくなつたからその代わりよ。あなたならいい線行けると思ってるから楽しみにしてるわ」と笑顔で言いながらつた。

色々言いたい気持ちにはなつたが、裏を返せばそれだけ俺の実力を買っているということになる。あまり目立つ訳には行かないから初戦でさつさと負けたかつたんだけど、そもそもいかなくなつたな……クレアと当たつた時いい感じに負ける感じで行くしかないな、これ。

## %月<日

今日は1人で学校に行つた。

本当はアレクシアの看病をしたかつたのだが、メイドさんに「勉学を疎かにするな」という旨のありがたい言葉が飛んできたので渋々向かつた。

それで登校したらクラスメイトが一齊に集まつてきて大変だつた。まあ、アレクシアが休んだことが気になつて聞いてきた感じだつたんだが……まあ、これは知らないを貫き通らせてもらつた。シドのモブ友達であるヒヨロとジャガも色々聞いてきたが、適当にあしらつた。

その後、学園に用事があつて来ていた父さんと少し話していたところ、この前通り魔に襲われているところを助けた女子生徒の子が「この前のお礼です！」つて言つてミツゴシ商会のチョコレートを渡しに来た。

ミツゴシ商会のチョコレートは大人気なため中々買えないことで有名で、いくらお礼といえど貰うのは凄い気が引けたため気持ちだけで十分だということを根気強く言つたのだが、向こうは中々折れてくれずどうしたものかと頭を抱え込んだところ、父さんが「2人で食べたらどうだろう?」と提案したこととでそれに決定。その後はその女子生徒——アンナさんと俺の部屋でお茶をすることになつた。

アンナさんは学術学園の2年生であり、魔力に関することを専門に

研究をしているとのこと。話してみた感じ、前々世でいうギャルみた  
いな雰囲気だつたものの、アレクシアの取りに入るために近寄つてくる  
奴らと比べたら下心を感じなかつたためかなり話しやすかつたし、リ  
ラックスして話すことができたと思う。

そして話題は近日行われる選抜大会のことになり、アンナさんから  
俺は出るのかどうか聞かれ、出るということを答えたところ「応援し  
てるよ！」と激励されてしまつた。どつかでわざと負ける予定だから  
罪悪感で胸が痛い……。まあ、それはそれとして前々世では全く縁の  
なかつたギャル系女子とお近付きになれたのはなんか嬉しい。

そういえば、アンナさんとの出来事をアレクシアに話したらティー  
カツプからコーヒーが零れるぐらい震えてたけどどうしたんだろう  
か。熱はなさそうだつたけど、ちょっと心配だなあ。

\* それからアンナと話したことやそのことを話す度にアレクシア  
が変な挙動を取つたことを書いた内容が続く \*

選抜大会当日、ルイスは順調に試合を勝ち進んで行つていた。ルイ  
スの実力を考えればこれは当然の結果ではあるが、他の人間からした  
らそうはいかない。何故ならルイスは1年生であり、彼の評価はアレ  
クシアの近くにいる従者、人によつては金魚のフンというものであ  
り、学園の稽古の授業でも魔力をそんなに込めずに剣を振つているの  
を知つてゐる人物からすれば、強いと思う人間はいない。

だが、蓋を開けてみればどうだろうか？ルイスは優勝候補とはい  
ずとも、学園の中では上位の実力に位置する上級生の魔剣士相手に圧  
勝とは言わずとも危なげなく勝つてゐる。そのため、生徒たちの中で  
ルイスの評価はだんだんと変わつてきていた。

「ねえ、ルイスくん凄くない？」

「いや、私はルイスくんは凄い人だつて思つてたし？それによく見ればイケメンだと思つてたし？」

「…………」

が、それを聞いていて面白くないのがルイスの主であるアレクシアだ。本当であれば自室で安静にすべきなのだが、ルイスの晴れ舞台を見ないなんてことはしたくなかったため、無理を言つてこの場に変装して来ていたのだが。

「ルイスくんつて考えてみたら結構優良物件じゃない？アレクシア様の従者でお父様は騎士団の元副団長らしいし！」

「それになんか一途っぽい感じするよね。ほかの男子みたいに変な目で見てこないし」

「…………」

先程から耳に入つてくるのはルイスを賞賛する声。別にルイスのことを褒めるのは悪いことでは無いし、アレクシアとしても自分の従者はすごい人間というのを分かつてもらえてるのが認識できるから良い。

だが、ルイスのことを異性として見て優良物件だのなんだの言つていることが気に食わなかつた。

——貴方たちはルイスの何を知つているんだ？

——貴方たちはルイスと長い時間過ごしてきたのか？

——貴方たちはルイスの欠点を知つているのか？

アレクシアは好き勝手言う生徒達に色々言いたいのを堪えつつ、準決勝の試合が始まるのをまだかと右手の指で膝を叩きながら待つのだつた。

\*\*\*\*\*

「ふう……疲れた」

ルイスは控え室で少し疲れたように息を吐いた。結果を言えばル

イスは準決勝であたつたシドの姉であるクレアに敗退した。無論、なるべく接戦を演じた上で敗北だつたのだが、これがルイスにとつてはなかなか難しくクレアの実力もそれなりにあるせいで調整でかなり神経を尖らせていたのだ。最終的にはクレアが自分が敢えて作った隙を突かせて剣を弾き飛ばされる、という形で終わらせたので無様な負けではないだろうと内心思う。

そしてその一方で全力で相手をしなかつたことに罪悪感も覚えていた。元々、ルイスは手を抜いて何かをやるというのに抵抗を覚える性格をしており、今回は自身の置かれている立場などを考えてやむを得ず手を抜いてわざと負けたのだが、そこで理解はできても納得し、何も感じないか言われたらそれは難しい話であった。

(……あれこれ考えるのはよそう。これは俺が自分で選んだ上でやつた事なんだから、被害者ぶるのはダメだ)

ルイス頭を振つて思考を切り替えると、控え室の扉を開け。

「やつほー、ルイスくん！お疲れ様〜！」

「……アンナ先輩？」

明るい調子で声をかけてきたアンナが目の前に出てきたことにルイスは目を丸くさせた。

「うん、私だよ。ルイスくん、この後予定ある？」

「え？いや、特にないんですけど……」

「それならこれからお疲れ様会やろーー！場所はもう決めてあるからさ、行こー！」

「あ、ちょっと!?」

ぐいっ、とルイスの手を掴んで強引に歩き出したアンナにルイスは驚きの声をあげるも、抵抗することも出来ずそのまま引きずられて行つたのだった。

「は？」

それを見ていた人物がいたというのを気づかずに。

アレクシアやデルタたちにモブ子を庇つた結果、血だらけで倒れるルイス見せたいな（こういうほのぼのラブコメっぽいのいいですよね）

キヤラ紹介

ルイス

なんか気がついたらフラグを建てていたアホ。シドがローズに全力でボコられにいつているのを見た時はドン引きしていた。ちなみにギャルに対しての耐性はほぼ皆無。自称童〇くんさあ……

アンナ

20冊目の%月・日にて通り魔に襲われているところをルイスに助けられた女子生徒。イメージ的にはサイドテールで制服の上着を腰に巻いているギャルっぽい感じ。彼女視点の話は次辺りになる予定。

アレクシア

健闘したルイスを褒めようと出の女に連れてかれて思考停止中。

アイク

息子がモテモテっぽいことにちょっとだけ危機感を募らせている。

次回予告。

やめて！アンナと仲良く食事してデレデレしているのをアレクシアやデルタに見られたら、ルイスへの好感度がバグってる2人の手でルイスとアンナが大変な目に遭っちゃう！

お願ひ、デレデレしないでルイス！

あなたが今ここでデレデレしたらアレクシアの精神とデルタのまだ残ってるなんでも言うこと聞く約束はどうなるの？

猶予はまだある。デレデレしなければ、後日個別でアレクシア、デルタとデートするだけで済むんだから！

次回「ルイス死す」デュエルスタンバイ！

## わからせ！（番外編）：どある従者のバレンタインデー

——バレンタインデー。

それはとある日にチョコを親しい友人や恋焦がれている人物に渡すイベントであり、人によつては勝負の日になつたり、あるいは血涙を流す日もある。

そして我らがルイスはと言うと。

「うーん、何を作ろうかな……」

貰う側ではなく渡す側として自室であれこれ考えていた。

\*\*\*\*\*

ルイスにとつてバレンタインというのは、前前世から自身の日頃の感謝を相手に分かりやすく伝えられるイベントみたいなものであつた。

そのため、前前世では身内の人間だけではなく学校の先生、前世では勇者。パーティのメンバーやお世話になつた人々にチョコを使つたお菓子やクッキーなどを作つて一言添えた手紙と共に渡していた。

そして今世ではミツゴシ商会がバレンタインというイベントを世の中に浸透させ始めた頃からもやつており、エルとしてはシャドウガーデン構成員全員にといふのは流石に無理だつたが、七陰とメンバーの育成を担当しているラムダには手作りを渡しており、ルイスとしては実家の使用人たちには手作りを、アレクシアとアイリス、そしてクレアにはミツゴシ商会で売つてゐる物を渡していた。

なお、初めて渡した時の一部の人たちの反応を抜粋すると。

金髪エルフのαさん

「あなたつてお菓子作りも得意なのね。今度教えてもらおうかしら」

ワニコ系獣人△さん

「エル様が作つてくれたものはやつぱり美味しいのです！」  
とある教官

「エル様が自らの手で作つてくださつたものを……？お、恐れ多いです！」（この後渡した本人が落ち込んだ表情を見せたため食べざるをえなくなつた）

何も無いところで転ぶγさん

「チョコを使ったお菓子でこういうのもあるのですね……差し支えなければレシピをお聞きしてもよろしいでしょうか？」

アレクシア

「あら、自分の立場をよくわかつてゐるじやない。ご褒美としてチョコあげる」

アイリス

「ありがとうございます。ん？手紙が入つて……後で読んで欲しい？」

ふふ、分かりました」

こんな感じであり、ルイスはその手紙を読んだとある王女からは1日中からかわされることになつたのだがそれはまた別の話である。

閑話休題

去年も手作りで渡す人と市販の人は分けていたのだが、ひよんなことでルイスは料理が得意というのがアレクシアたちにも露見したことから、クレアを除いた女性陣から「今年は手作りにしてほしい」という意見を貰つていた。そのため、どういうものを作ろうか考えていたのだが。

「王族に上げても不敬じやない手作りお菓子つてなんだ……？」

ルイスが材料も買いに行かずに頭を抱えている理由はこれであつた。前世では、その王族のとあるお姫様の要望で彼女がリクエストしたものを作つて食べあいをしていたため特に考えていつかつたが、今世ではそのようなことは出来ない。

だからこそこうして悩んでいるわけなのだが。

（クッキーはなんか違う気がするし、かといってトリュフもなんかダメな気がするし……）

これまでここまで悩んだことあつたか？というレベルで中々いい案が出ず、ルイスは机に突つ伏す。

幸いなのはデルタたちとアンナに贈る物はもう作つてあることで、もし彼女らの分も決められず作れていなかつたらルイスは徹夜する羽目になつていただろう。

「……あー、本当にどうしよ」

と、ルイスが呟いた直後「ぐぐ」という盛大な音が鳴り響いた。ふと時計を見ると時間帯的にお昼時を1時間ほどすぎている時間帯であり、ルイスも空腹を感じていた。

「……丁度いいし、ご飯食べに行こうか」

ルイスはそう呟くと色々書き込んだノートを閉じてコートを羽織ると部屋のドアを開けて外に出るのだつた。

\* \* \* \* \*

「そういうえば、ルイスくん量が多いの頼んでたけどそんなにお腹空いてたの？」

「ええ、朝は紅茶1杯で済ませてしまつたので……」

「もー、そんな生活しちゃダメだよ？」

「はは、善処します……」

ルイスは街のレストランでアンナと同席して料理が来るのを待つていた。

何故こうなつたのかというと至つて単純で、たまには街の外でご飯を食べるのもいいかと思つてブラブラしていたところ、たまたまアンナと会い彼女もご飯を済ませてないとの事でそこから彼女に言いくるめられて一緒に食べることになつたのだつた。

「どうでさ、ルイスくん何か悩んでる感じだつたけど大丈夫？」  
「……よく分かりましたね？」

「ふつふー、あまりお姉さんを甘く見ちゃいけないゾ☆」

ふとアンナが心配そうに聞いてきたことにルイスは驚く。誤魔化そうかとルイスは一瞬だけ考えたものの、アンナの聞き方はどこか確

信を持ったものであり、素直に認めた。アンナが盛大なドヤ顔を決め  
る一方でルイスは「この人相手に隠し事は難しいかもしないな」と  
冷や汗を流していたところで、彼の視界に料理を持ってきている店員  
の姿が入った。

「おまたせしました、こちらご注文の——」

（あー、タイミング悪いなー）

店員が注文した料理を置いていく中、アンナは内心残念に思つてい  
た。彼女としては何かで悩んでいるルイスを助けて自分の評価をあげようと思つていたのだが、完全に聞くタイミングを逃してしまつた。食事中に聞こうかともアンナは一瞬考えるも、先程ルイスが朝ご飯を食べていい話をしていたのを思い出し、そこから朝ご飯を食べれなかつたのもその悩みが原因ではないかと結論づけて聞くのをやめた。

「すつごい美味しそうだね！それじゃあ頂きます！」

「頂きます……うん、やっぱりハンバーグは美味しいな」

「ルイスくんつてハンバーグも好きなの？」

「ええ、結構好きですよ。アレクシア様には子供舌だとからかわれましたけどね」

「へ、へえ、そうなんだー」

アンナはさらっと出たアレクシアとルイスの話を聞いて少しだけ胸に痛みが走るも、それを堪えて話をしながら食事を続ける。

「ルイスくんは今までバレンタインとか沢山貰つてたの？」

「そうですね……使用人の皆様から貰つてましたし沢山貰つてましたね。アンナさんの方は？」

「私？私も友達から結構貰うね。でもその分渡すのも大変だつたな

」

「あー……」

「あ、ルイスくん。ハンバーグちょっと貰つてもいい？代わりに私が  
食べてるやつで食べたいのあつたら取つていいからさ」

「別にお返しはいいですよ。はい、ハンバーグどうぞ」

「ありがとうございます。つて流さないでちゃんと選びな？じゃないとテキ

トーに選んであーんしちゃうよ?」

「それやられると色んな人に殺されそうなので選ばせてもらいますね」

「意気地無しだ♪」と割と酷いことを言うアンナをスルーしてルイスは彼女が頼んだものを見る。マカロニサラダとムール貝のピラフと女性にしてはまあまあ多い料理を頼んでおり、そこから改めて自分の周りはよく食べる人が多いなと思いながらルイスはどちらを頂こうか考える。

(どつちも捨て難いなー……あ、そういうえばマカロニって呼ばれてたやつが色々あってマカロンっていうお菓子と呼ばれたって話が――)

ルイスがそこまで考えた瞬間、彼の頭の中に電流が走った。これら王族に渡す物としては不敬では無い。だが、ここでまた別の問題が出てくる。

(いや、でも2人とも同じなのは手抜きな気がするし、あと一つなにかい……ん? そういうや、貝殻みたいな見た目をしたお菓子があつたよな。確か――)

ルイスはそこまで考えつくと頭の中がスッキリし、同時に偶然とはいえ突破口を出してくれたアンナのてを感じ極まって突然握る。

「へ? る、ルイスくん!? 急に――」

「アンナ先輩、ありがとうございます! 先輩のおかげで悩みが解決出来ました!」

「え? そ、 そうなの? ま、 まあ役に立てたなら良かつたけど……」

「本当にありがとうございます! 先輩に今日会えて良かつたです!」

「あ、 あはは……さ、 流石に恥ずかしいな……」

アンナは顔を真っ赤にしながら暫くそのままであったが、途中で我に帰つて「先にご飯食べちゃお?」とルイスを促して何とかその場を切り抜けるのであつた。

\*\*\*\*\*

バレンタイン当日。ルイスは覚悟を決めた表情でアレクシアとアイリスの元へ向かっていた。この時間帯は前から2人とも居ると言つていたため、すれ違いになることは無いし、個別で渡すのはなんか氣恥ずかしかつたからだ。

ちなみにシャドウガーデンのメンバーには朝に来たゼータに渡してあるため、ルイスはそつちの方の心配はしていなかつた。尤も、デルタが明らかにやばいことになるだろうと察していたゼータはルイスに直接渡すよう食い下がつていたのだが。

それはさておき、ルイスの方はかなり緊張していた。

アンナとの昼食のお陰で王族に出しても不敬にならないものを作つたはいいが、2人の口に合うかはまた別問題ではある。

（味見はしたから多分大丈夫なはず……よし、いくか）

ルイスは中にいるであろうアレクシア達に声をかける前にノックを3回する。

「アイリス様、アレクシア様失礼します。ルイス・エアです。入つてもよろしいでしようか？」

「ありがとうございます」

アレクシアが許可を出したのを聞いてからルイスはドアをゆつくりと開ける。

「思つたより早かつたわね。それで、私には何をくれるのかしら？」

部屋の中にはソファーアに座つて優雅にコーヒーを飲むアレクシアと少したけ申し訳なさそうにしているアイリスの姿。ルイスはアレクシアの態度は予想通りだつたものの、アイリスの方は予想してなかつたため内心驚く。

そのアイリスはアレクシアの態度を見て顔を顰めた。

「アレクシア。ただ貰うだけでは無いのですよ？こちらのわがままでわざわざ手作りにしてもらつたのですから……」

「アイリス様、気にしないでください。これぐらいは慣れてますから」「……」

「姉様、その呆れたような目はなんですか？」

「いえ、なにも」

「……とりあえず先に渡しますね」

このままだと何時になつても渡せそうないと判断したルイスはカバンから丁寧に装飾された袋を2つ出し、片方をアレクシアに、もう片方をアイリスに渡した。

「2人とも同じ物、というのも味気ないと思つたので別の物を作らせて頂きました」

「それは気を使わせてしましたね……すみませんルイス」

「気にしないでください、好きでやつた事ですから」

アイリスの謝罪に対してもルイスは即答する。普段作らないものを作れた楽しみというものもあるし、そもそも大事な人のために作れたのだから彼からしたら大変ではあっても苦には感じなかつた。

「あ、私達も渡してしまいましょうか。私からはこちらを」

「私からはこれをあげる」

「ありがとうございます……ん？」

アイリス、アレクシアの2人からオシャレに装飾された袋を受け取つたところで——厳密にはアレクシアからのを受け取つた時にふと違和感を覚えた。

一見見た目はミツゴシ商会で売られているバレンタイン限定のお菓子を包装しているものだ。だが、リボンの結びが少し雑であることルイスは気がついてしまつた。

そしてそれだけではなく。

(そういうえば、ガンマが素直になれない人向けに包装だけのバージョンも売る予定つて言つてたな……)

そしてその瞬間ルイスは察し、追求するのを辞めた。わざわざここまでして隠そうとしてきたのだ。それならばこの場では気付かないふりを通して、味の感想を言う時にちょっと遠回しに手作りお菓子をくれてありがとうと伝えればいいかと考える。

「それでは、私はここで失礼させていただきます」

「あら? なにかこの後予定でもあるの?」

「ええ、父とその隊員の人達にこれを渡しに行く予定でして」

「あー……」

ルイスがまだ膨らんでいるカバンを見せるとアレクシアは納得したような、そしてどこか呆れたような表情を向ける。

「それでは、失礼します」

ルイスはそう言うと、そのまま部屋の外へ出ていった。

アレクシアから貰った手作りのカップケーキは甘く、ルイス個人としてはかなり好きな味であつた。

バレンタインは自分で買ったものがあるので0じゃないです。ブルックサンダーゆめえ。

キヤラ紹介

ルイス

本作オリ主。お菓子作りの腕前もそれなりに高く、子供時代にはイプシロンにお菓子作りを教えたこともあつたとか。デルタからはトリュフ、アンナからはバウムクーヘン、アレクシアからはカップケーキを貰つた。なお、送るお菓子の意味を全く知らない。

アレクシア

分からせ&曇らせ対象。当初はルイスが色々な女性から貰つてゐるのを見てぐちやぐちやにする予定だつたが、流石に可哀想だつたので没に。ルイスのためだけに2週間前からカップケーキを作つたり、さりげなく渡す練習をした。一応送るお菓子の意味は知つてゐるため、ルイスから送られたお菓子であるマカロンを見て顔を真っ赤にした。

デルタ

今回はアプリ版のバレンタインイベの方に行つていたので出番はない。ルイスから直接もらえると思つてたのにゼータを通して渡されたことで脳みそを破壊された。ルイスのベッドに潜り込むまで

○日。ちなみにルイスからはマフィンを貰つた。

# アイリス

マドレーヌ美味しい。

?"?"?"  
? ? ?  
?"?"?"

オリキヤラ。ルイスと昼食デートできたものの、そのせいで恋敵に塩を送るような形になってしまった。ルイスからはガトーショコラを貰った。基本的にはガンガンいこうぜだが、攻められると弱い。

ここからおまけです。とある人物の前世に関係する話になつてくるので、嫌な方はここでブラウザバックして下さい。

——木漏れ日が差す深い森の中、歴史から抹消された英雄が使つたとされる、翡翠色の刀身を持つ刀が刺さった台座の近くに一人の頭から獸の耳を生やし、腰から尻尾を生やした女性が現れる。

座の近くに置く。

「……今日、バレンタインデーだつたから買つてきたよ。本当は手作りが良かつたけど、ボクたちが住んでた屋敷は新しい代の子たちが住んでたからキツチン使えなくてさ……時が経つのつて早いよね」

女性は寂しそうに笑うと  
勝に差していた刀を取ると台座に棗さ  
ている刀を見る。

「……もう、ボクが知ってる人間たちはみんななくなつちやつた。

死に目に立ち会えただけマシなのは分かつてるけど、やつぱり寂しいよ……！」

彼女は自分の中にある全てを絞り出すかのように声を上げていく。『はい、お前らの分のやつね』

『わー！ありがとね！』

『ところでさ、こいつにチョコレートが混ざったお菓子つてあげてもいいのか？』

『えー？私より年上なのにそんなこと知らない『黙れメスガキ』ふんぎやろ』

『……この子なら大丈夫よ。魔物は普通の狼とは違つて有毒にはならないから』

『そなの？それならこれ食べていいぞ！』

女性の脳裏にはかつて大事な人たちと過ごした暖かい思い出が過ぎていく。

女性は目からポロポロと大きな涙を零す。

「ねえ、なんで最後の戦いの時ボクを置いていったの……？」

『ご主人……！』

女性の腰のベルトにかかっている「ポチすけ」と書かれたボロボロの首輪が、軽く揺れた。

## 22 冊目

%月：日

今日は選抜大会当日で準々決勝でクレアと当たったため、そこで敗退した。

ここまで良かつたのだが、俺は控え室から出るところを出待ちしていたアンナ先輩に捕まり、「頑張ったね会」ということでミツゴシ商會が運営している喫茶店でご飯を奢つてもらつた。

アンナ先輩とはそこで軽く雑談し、その後はお礼を言つて帰つたのだが、何故かアレクシアが不機嫌だつた。話しかけてもそっぽ向くし、やつと返事してくれたと思つたら言い方に棘があつたし……うーん、女心というのは分からん。

とりあえず明日は早くアレクシアの方に向かうか。予定とかも特にないし、アンナ先輩になんか誘われても断るしかないな。凄い申し訳ないけど、アレクシアにあんな態度取られるとやっぱり思うところはある。

何とかなればいいなあ。

%月  
丁  
日

今日は色んな人に絡まれた。

原因是昨日の選抜大会でかなりいいところまで行つてしまつたのが原因だ。登校した途端、クラスメイトに囮まれて「お前あんな強かつたのか！」やら「強さの秘訣は？」やらめちゃくちゃ話しかけられた。

普段から全く話してない訳では無いものの、いつもの倍以上話すことになつたからすごい疲れたし、女子からは恋人や婚約者の有無を聞かれたからなんかキツかった。正直、今は色恋沙汰に現を抜かしてられる状況じやないし、そもそもそんなに親しくない人と付き合う気にはなれない。

その後はシェリーサンを護衛しているグレンさんとたまたま会つ

て、選抜大会の事で「真っ直ぐに努力を積み重ね続けた良い剣だつた」と言つてくれた上に、頭を撫でられてちょっと照れくさかつた。考えてみたら、この世界に来てからああいう風に具体的に褒められたことは無かつたような気がする。もし、叔父のような人物が俺にいたとしたらグレンさんがそうなるのだろうか。なんか、話しててすごい落ち着くし、俺は敬語で話してはいるものの距離もそんなに離れてなく、上司ではあるけども親しみやすいところがある。

グレンさんと話してる時間、結構好きだな。

まあ、それはそれとして我が主であるアレクシアの方は一応機嫌は治つた。代わりに夕飯は暫く一緒に寝るというとんでも約束を付けられる羽目になつたわけだけどなあ！

距離感バグり散らかしてゐる気がしてきて、いよいよ本格的にどうにかしないといけなくなつた。かといつても、断ろうとしたらなんか寂しそうな雰囲気出すから断れないし、忠告は結構前にしたけど効果なかつたし……うーん、どうするか。

とりあえずグレンさんに聞いてみようかな。出来たら父さんの話とかも色々聞きたいし。

%月々日

アレクシアの部屋から登校するという明らかにイケナイことをしたし、なんなら寮長や先生に見つかつたがなんのお咎めもなかつたのが凄い怖い。アレクシアさん、まさか賄賂とかやってませんよね？

そして登校後は昨日同様また人が沢山集まつてきて、今度は昼食の時間ですら集まつて話しかけてくるから正直辛かつた。別に人と一緒に食べるのが嫌な訳では無いけども、そんなに親しくもない人と一緒についてるのは抵抗感がある。

そしてそんな日々が暫く続く可能性を考慮して明日から弁当にすることにした。弁当にすれば食堂でわざわざ食べる必要はなくなるし、人気のないところで隠れて食べる」ことが出来る。そのために、もう学園の調理室を使う許可は取つたし、買い物もしたから明日の準備はもう済んでいる。あとは場所だけど……入学した時に穴場っぽい

ところ見つけたからそこで食べようかなと思つてゐる。

……さつきからアレクシアの視線が凄い。言葉にこそ出してはないが、「いつまで日記書いてんのよ」と目が言つてゐる。グレンさんに早く相談したいのに、今日は会えなかつたから本当にどうしようか。こうなつたらマルコさんに聞いてみるのもありだらうか。

とりあえず明日は早起きかな。

#### %月〆日

調理室でお弁当を作つてから教室に行つたが、昨日ほどでは無いがやはりクラスメイトに囲まれた。気持ち女子の方が多かつたよう気がするけど、多分気のせいだらう。というか俺に話しかける暇あつたらほかの仲のいい人と話してればいいと思うんだけど……本当に疲れる。

こう思うと猫被つてゐるアレクシアの精神力つて案外すぐ（字がかなり乱れている）

#### %月〆日

昨日は酷い目にあつた。日記を書いてる最中にアレクシアが中身を覗き見たせいで、肩を掴まれて思いつきり揺らされたせいで続きを書こうに書けなかつた。猫を被つてゐる云々に関しては事実だらうに……あと、女子生徒に言い寄られてないかとか聞かれたけど、あれは言い寄られてるとカウンントしていいのだらうか？ 正直、ただ勢いで恋人や婚約者の有無を聞いてるような感じがするし。

まあ、そんなことは置いといて今日も昼食中に囲まれそだつたため、一瞬の隙を着いて抜け出しそのまま昨日も使つた人気のないところで食べようとしたのだが、たまたまアンナ先輩がいたため一緒に食べることになつた。

アンナ先輩はクラスメイトの皆と比べるとまだ話しやすい。こつちのペースを考えて話してくれるし、こちらの空氣を察して口を噤んでくれたりと気を遣つてくれる。いや、そもそも気を遣わしてゐる時点

でダメなんだけども。

そういえばアンナ先輩、俺の弁当に入つてた野菜炒め食べた時固まつてたけど……どうしたんだろう。「なんでもないよ～」とは言ってくれたけど、声が凄い震えてたし、大丈夫だろうか。

そしてこの話をアレクシアにしたらなんか凄い同情したような目をしてたな。その後、「明日、私の夕食作りなさい」というありがたいご命令も頂いたけども。片手で食べて尚且つがつたりしたものか……明日の放課後までにメニューを決めておかないと。

%月一日

今日もアンナ先輩と昼ご飯と一緒に食べた。

やはりアンナ先輩と食べてる時は全く苦じやない。見た目がギャルっぽい感じから勘違いされてると思うけど、根は誰よりも優しくて人の事を気遣える人だ。こういう人と結婚出来たら多分楽しく過ごせるんだろうなあ。

そして今日はやっとグレンさんと話せる時間が取れたため、アレクシアやデルタ（彼女は地元の幼馴染という感じで説明した）が自分となんか距離が近いというのを具体例を挙げて相談したところ、なんか困ったような顔をされてしまった。

暫くグレンさんは唸っていたが、「私からは教えることは出来ないな」という否定の言葉だった。疑問に思い理由を聞いたのだが「これはルイスくん、君が自分で気づくべきことだ」と教えてくれなかつた。まあ、取り返しのつかない事態になる前にはちゃんと手助けするという言質は貰つたので、その時はちゃんと助けてもらおうと思う。

あとグレンさんから昔の父さんの話も少し聞けただけど、どうやら父さんは昔はまあまあヤンチャだつたらしく、副団長になる前に後輩をいびついていた上司の人を殴つたこともあつたとか。しかも、その件で呼び出されたら、集めていたその上司がこれまでやつてきたことの証拠をぶちまけてその上司を左遷させたとのこと。

他にも、とある貴族の令嬢に気に入られて拉致された際はその証拠を集めた後に空き箱に隠れて脱出したり、騎士団内でやつた大食い選

手権でぶつちぎりの1位をとつたりだと様々な武勇伝……武勇伝  
？を聞かせてもらつた。

今の物腰が柔らかい優男を体現している父さんからはとても想像  
できない話の数々に驚いていたが、どうやら他にもまだあるらし  
い。昔の父さん、結構ヤンチャというかアグレッシブだつたんだなあ  
……。

そしてその聞いた父さんの昔話をアレクシアにしたらなんか妙に  
納得した顔をして、「その話を聞いて貴方たちが親子つて実感できた  
わ」とまあまあ失礼なこと言いやがつた。

俺は昔の父さんほど直情的なタイプじゃないし、女子にもモテてい  
ない。まあ、ご飯に関しては普段はセーブしてるけど食べようと思つ  
たら沢山食べられるからそこは似てるかも、つて反論したら呆れたよう  
な表情をしながら鼻で笑われた。

……近いうちに本気で作つたご飯食べさせて分からせてやるか。

\*\*\*\*\*

グレンにとつてルイス・エアという少年は尊敬している元上司の息  
子だ。もし、舐め腐つている態度だつたら元上司の息子でも関係なく  
その性根を叩き直そうと思つていたが、ルイスはかなり礼儀正しい少  
年で寧ろ年齢の割に大人びているように感じた。

ただ、ルイスの父親であるアイクの若い頃の話をすると言つた際に  
は顔を輝かせていたためそこは年相応らしい顔をするのだな、とグレ  
ンは思つた。

そして彼にとつてルイスの評価が決定的に変わつたきっかけはこ  
の前行われたブシン祭の選抜大会であつた。

実を言えばグレンはルイスに剣の才能がないことを最初に会つた  
段階で見抜いており、全く失望しなかつたと言つたら嘘になるものの  
子が親に必ずしも似るという訳では無い、と自身を納得させ、シエ

リーの護衛も兼ねて見に行つた選抜大会でグレンは自分を納得させた考えを後悔した。

ルイスの剣はグレンが予想できないほどに鋭く、そして積み重ねられた凄まじい剣であった。才能がない身なのにも関わらずあれほど の境地に至るのにどれほどの努力を積み重ねてきたのか、グレンには 全く想像できなかつた。気がつけば、声には出さなかつたもののルイ 斯のことを心の底から応援し、彼がクレア・カゲノーに敗れた時は我 が身のようにショックであつた。

「あ、グレンさん。お疲れ様です」

「む、ルイスか」

次の日、学園でたまたま会つたルイスの挨拶を返してからグレンは ふと考える。ルイスのことを褒めながら頭を撫でてみたらどういう 反応をするのだろうか。

ルイスの身長は平均よりほんのちょっとだけ低いぐらいで特別低い 訳では無いのだが、グレンの身長的にはルイスの頭は撫でるには丁 度いい位置にある。昨日の健闘とその努力を称えてあげたい、という 想いと少しは子供らしいところを見せるだろうかという期待をもあ り。

「ルイス。先日の大会で君の試合を見たが、真っ直ぐに努力を積み重ね 続けた良い剣だつた。久々に心が躍つた」

「へつ……!」

ルイスの頭にポンと手を乗つけて軽く撫でながら褒めると、当のや られた本人は間抜けな声を出して驚いたような顔をしていた。そし て数秒後には顔を赤くして恥ずかしそうに顔を下に背ける。

「そ、その。褒めてくださつたのは嬉しいのですが……あの、頭を撫で るのは、恥ずかしいので、止めていただけれど……幸いなのですが ……」

(ほう……)ういうところは年相応だな)

段々と声が小さくなつていくルイスの声を聞いてグレンは少しだけ笑みを浮かべる。無理に振り払おうとせず、チラチラとグレンをみながら早く撫でるのを止めてくれないかと目線で訴えるルイスに対

して。

「何、君はまだ子供なのだからこういうのは素直に受けとつておきなさい。それに……」

「それに……なんですか？」

「減るもののは無いだろう？」

「……私のなけなしのプライドが減つてるんですか？」

案外反応がいいルイスはグレンからするとまあまあ面白く、これらも時間があつたらこういう風に話すのも有りか、とグレンはそろそろ噴火しそうなルイスを見ながらそう思うのだった。

そしてそれから4日後のこと。

「グレンさん。今お時間ありますか？」

「ルイスか。どうかしたのか」

丁度休憩時間の時に悩まし気な表情と共に現れたルイスにグレンは少し目を見開く。かなり短い付き合いではあるものの、グレンの知るルイスからは想像もつかない表情に驚きつつも、かなり重大なことなのだろうとグレンは判断し続きを促す。

「実は相談したいことがあります……」

「ほう、アイク殿ではなく私に相談か」

「はい、正直父さ……父上には相談しづらいこととして」

「ほう？」

ルイスの言葉を聞いてグレンは少し眉を動かす。実の父親にすら相談しずらい事とは一体何なのだろうか？それよりも何故自分のかという疑問は尽きないものの、深刻そうな雰囲気を出しているルイスにそんなことを聞くことは出来なかつた。

「では、早速聞こうか。どういうことで相談をしに来た？」

グレンは軽く息を吐いてから、聞く体勢に入り——

「——ということなんですが、どうしたらいいですか？」

(とてつもない話を持ってきたな……)

滅茶苦茶後悔した。まさか、女性にモテるというところで敬愛している元上司とルイスの血の繋がりがあると実感することになるとは、それなりに生きているグレンでも予想出来なかつた。というよりもしかしながらもアイクよりルイスの方が状況的には酷いだろう。

王族、しかも第2王女に好かれているというのをルイスの話から確信してしまつたグレンはかなり困つていた。ルイスの悩みを解決するにはアレクシアと彼の幼馴染が彼に異性に向ける好意を持つているということを伝えなければならぬのだが、それを第三者の自分が言つてしまつていいものではない。

グレンは思考を重ねに重ねて、最終的に。

「……私から教えることは出来んな」

「え!? その口ぶりからして何かしら分かつてますよね? なんで教えてくれないんですか?」

「これはルイスくん、君が気づくべき問題だ」

はぐらかす方向に舵を切つた。それに対してもルイスは少し不満そうな表情をしており、無論グレンもこうなるのは予想していたため次の一手を取る。

「なに、本当にどうしようもならない時が来たら助けよう。約束する」「……その時はお願ひしますよ?」

グレンはちゃんとフォローを入れることをルイスに伝える。というか、これはフォローいれないと3人のうち誰かの血が飛び散る可能性が高くなるため必須事項ではあるのだが。

そしてグレンはこの場を乗切るための切り札を続けざまに切つた。  
「ついでに君のお父さんである、アイク殿の昔の話を――」  
「聞かせてください」

グレンはちょっとだけルイスのことが心配になつた。

「……」

「……」

「……」

(き、気まずい……!)

揺れる馬車の中、アレクシアは目の前にいるアイク・エアと彼の家の使用人であるアイネを見ながらそんなことを思った。

アレクシアは完治こそしてないものの、もう登校してもよいという医者の意見の元学園に登校しようとしたのだが、そこに姉であるアイリスが片腕が使えない状態で1人だけで登校するのは危険だと意見した。最初はルイスを連れていくこうとしたのだが、今日に関してはアレクシアは医者からの言葉もあつて遅れて登校することになつてしまつた。それではルイスを護衛にすることが出来なくなつてしまつた。しかし、かといってアイリスが護衛になつてしまふと色々と問題が出てきしまうのも事実であつたのだが、そこにアイクが自ら立候補したのだ。

当初は『紅の騎士団』に関係ない小隊の隊長を護衛にするのはだめではないか、という反対意見もあつたが最終的に第2王女のアレクシアの護衛と考えたら適任ということになり、念の為アイク小隊からもう1人騎士を馬車の御者として足し、アイクとはこうして一緒の馬車にいるのだが、何を話せばいいのかアレクシアには全く分からなかつた。

(何を話せばいいか分からぬし、隣の使用人も無言だしなんか怖いのよね……)

「アレクシア様、怖がらせてしまい申し訳ございません」

(え、バレた!?)

「本当は私自身もう少し愛嬌良くなしたいのですが、如何せん人と話すのが苦手な上に、笑顔も意識してやろうとすると子供が泣くほど恐ろしいので出来ないです。どうか、お許しを」

「そ、そんな謝らないで下さい。苦労してるのは分かりましたので……」

アレクシアはアイネの何処かしょんぼりとした雰囲気を感じ取つて慌てて励ましにかかる。なお、この時点でアレクシアから見たアイネのクールな印象は若干剥がれた。

「ふふつ……そういえば、息子とはどうですか？」

「どう……とは？」

アレクシアとアイネの様子を見て軽く笑みを浮かべてから質問でしてきたアイクに対し、アレクシアは意図をあまり理解出来ず聞き返す。

「いや、最近息子からアレクシア様に料理を教えている、と聞きましたのでそこまで仲良くなれたなら2人でお忍びでお出かけまでしたのかな、と」

「そ、そういうことでしたか……まあ、（今は）そういうお出かけとかはしてないですね」

アイクの質問に対し何とか誤魔化すようにアレクシアは答える。実はもう行つたことがある上に、ペアルックのネックレスを買つて今もつけてるなんて想い人の父親に向かつて口が裂けても言えなかつた。

「ふふつ、そうですか……おつと、もうすぐ学園に着くみたいですね」「そうですね……（良かつた、追求されなくて……）」

アレクシアはタイミングよく学園に着いたことに安堵しつつ、同時にようやく（離れてから数時間も経つてないのだが）会えることに内心ワクワクしていた。

「どうぞ、アレクシア様」

アイクは馬車が止まると扉を開けて外に出て、アレクシア王女へと手を伸ばす。

「ありがとうございます」

アレクシアは一言お礼を告げてからその手を取つて馬車から降り、アイネはアイクの補助なしで危なげなく外に出る。

（はあ、自由への道は遠そうね……）

「アレクシア様、お待ちを」

「え？」

アレクシアが腕が満足に使えないことやそのせいで護衛が付けられていてることに内心でため息を吐いていると、前にいたアイクが手を出してアレクシアを止めた。心無しかアイクの雰囲気はどこか真剣であり、それを感じたアレクシアはアイクの指示に従い止まり、そして気がついた。

「門が閉まってる……？」

「……門の管理事務所を見てきます。アレックス、君はアレクシア様の護衛を頼む」

「はっ！」

「アイネは馬車をいつでも出せるように準備を」「かしこまりました」

「アレクシア様、貴方はここで待機を——」

「いえ、私も行きます。その方がアレックスさんは馬車の護衛に専念出来ると思いますし、危なくなつたら私はすぐに撤退しますから」

アイクの指示に割り込むように進言したアレクシアの意見を聞いて、アイクは少し考える。合理的に考えれば、正直アレクシアが来る必要は全くなく、むしろ敵がいた場合は片腕が使えない彼女は足でまといになる。それはアレクシアもよく分かっている。

それでもアレクシアがこの意見を出してきた理由をアイクは何となく察し、同時に彼女の目を見て諦めさせるのは無理だと判断した。

「……わかりました。では、アレックスは馬車の護衛を。アレクシア様は私の傍から離れないようにしてください」

「はっ！」

「アイクさん、ありがとうございます」

「いえ、子供の願いを叶えるのは大人の義務ですからね。それと私の指示にはすぐに従うようにしてください、いいですね？」

「分かっています」

アイクは言葉に対して素直に頷いたアレクシアを見て、満足気に頷くと門の管理事務所へと足を進めて中を覗き見て、内心ため息を吐

き、遅れて中の様子を見たアレクシアは顔を青くさせて後ずさる。

「アイクさん、こ、これは……」

「……最悪の予想が当たりました」

管理事務所の中は、駐在員と思われる人物の切り刻まれた死体との血で赤く染まつており、それは学園が今何者かに襲われていることをアイク達に示唆していた。

\*\*\*\*\*

アレクシア達が学園の異常に気がついたのと同じ頃、ルイスは授業中の時間であるのにも関わらず、トイレの個室にいた。

ルイスは朝からお腹の調子が悪く、度々トイレに行つていたのだが授業中でも治まらず結局先生に一言言つてから教室を出てトイレにいるのだが中々調子は戻らなかつた。

（あー、この後生徒会の選挙について話があるのに……クラスメイトに聞くのは避けたいからそれまでに戻りたいんだけど……）

それを避けるのは無理そうだな、とルイスが内心でため息を吐いた直後、彼はすぐに違和感に気がついた。

（魔力が練れない？いや、これは魔力操作が阻害されているのか？）

ルイスは常日頃から自分が練るのが難しいぐらいに微量の魔力を練つては流すという訓練をしているのだが、それが急に出来なくなつた。この事態にルイスは一瞬驚くも、すぐに魔力を鍛れるよう魔力の操作をしながら今の状況を考える。

（まず、この魔力を練れない状況に関して考えられるのは2つ。1つはシェリーサンが解析しているアーティファクトが起動したらそういう効果を発揮するもので、偶然にも作動してしまつた。もう1つは何者か……デイアボロス教団が学園を襲撃するために魔力操作を封じる道具を使つただけど……まあ、ほぼ後者と見ていい……つてことは!）

ルイスはチルドレン1stのネームドが動いていたということと、シェリーが解析していることから「ディアボロス教団の仕業だと結論づけ、目的は何かと考えた瞬間、彼はズボンを上げてベルトを締めながら壁に立て掛けていた剣を取ると個室のドアを開けて、廊下に飛び出した。

（相手の狙いはシェリーさんが解析しているアーティファクトと見ていよい。そうするとシェリーさんだけじゃなく、護衛しているグレンさんやマルコさんも危ない……！）

悠長に構えすぎたか、とルイスは自分の見通しの甘さに舌打ちをしたくなるのを堪えながら走る。が、ルイスの耳に大勢の人物が歩く足音が聞こえ、隠れられる場所がないと判断すると、彼は壁際に寄つて試行錯誤の末、練れるようになつた魔力を使つて覗き穴がある空き箱にスライムソードを変形させ、その中に隠れる。

するとその10数秒後には、黒い外套を羽織り武装している人物たちに誘導されるように歩いていく生徒や学園の関係者と思われる人々が現れた。

（あの服装、やっぱリディニアボロス教団の仕業だつたか……あの様子だと別の場所に集めるのか？でも理由は？全員殺した方が手っ取り早いし、シャドウガーデンに擦り付けた時のリターンは高いはずなのに……いや、敢えて殺さないことで証人として利用するつもりなのかな？）

ルイスは箱の中で思考を働かせる。最後に思いついたのが生徒たちを殺さない理由なのだとしたら、少々面倒くさいことになる。しかし、かと言つて今取れる対策というのもないためルイスは大人しく人気がなくなるのを待つ。

その最中、ルイスは襲撃者と思しき人物達の話し声が耳に入った。「おい、生徒はこれで全員か？」

「いや、話によると男子生徒1人、女子生徒1人が授業中にトイレに行つたらしい。そのまま帰つてこないつてことは多分気取られたな」「そうか……まあ、ガキ2人は見つけ次第講堂に連れていけ。尤も抵抗したら殺して構わんがな」

(……)いつら

ルイスは人気が完全になくなつたのを確認してからスライムソードを戻し、怒りを鎮めるように息を吐く。

(取り敢えず、グレンさんたちとの合流を最優先で行こう。件の女子生徒は見つけることが出来たら保護つて感じで……全く、こういう時こそシドがいたら楽なんだけど、こつちも見つけ次第つて感じかな) 方針をある程度固めたルイスは少しの物音も聞き逃さないよう耳に意識を向けながら、静かに走り出した。

\*\*\*\*\*

「ぐつ……！」

「魔力が使えない状態とはいえ、ここまでやれるとは思つてなかつたぜ？」『獅子髭』のグレンさんよ』

学園にある研究室でグレンは半分ほど刀身が無くなつた剣を手に片膝をついた。彼の体にはあちこちに切り傷があり、息も上がつているところから正に満身創痍といった様子であり、後ろにいるマルコは刀身が無くなつた剣を手に気絶してしまつている。

対してディアボロス教団のチルドレン1stである『叛逆遊戯』のレックスは傷らしい傷というのは頬にある軽い切り傷しかなく、息も全く上がっていない様子からまだ余裕であることが伺えた。

「正直、お前ら2人の連携にはヒヤツとしたぜ。だが、後ろで伸びちまつてるやつが俺を仕留め損なつたのがだめだつたな。折角、お前が隙を作つてやつたというのになあ……」

「貴様……！」

「怒つたか？それは悪かつたな。ただ、少なくともあんたは中々歯ごたえのあるやつだつたぜ」

マルコを貶されたことに対する怒りを募らせるグレンを尻目にレックスは獰猛な笑みを浮かべる。だが、そろそろ頼まれていた仕事の方をやらなければ上司にどやされるため、レックスはグレンに近寄る。

「悪いが俺も仕事があるんでな。もう少し喋りたいとこだがここでお別れだ。案外楽しかつたぜ、『獅子髭』のグレンさんよ」

（これまでか……）

グレンは霞む視界の中、自分に向かつて振り下ろされる刃を見ながら自身の無力さを恥じた。自分の力が至らないばかりに部下のマルコもこんなところで死なせてしまうということ、そしてこれからが楽しみであつたルイスの成長を見守ることが出来なくなる無念が彼の中で広がつていつた。

そして、レツクスの剣がグレンの首を捉えようとしたその時――

「させらかあああああ!!」

「ぐはっ!?」

「アイク……副団長……?」

目の前にいたはずのレツクスが視界から居なくなり、目の前にはこちらに背を向けて立つている人物の姿。そしてその後ろ姿は今も尊敬し、憧れている人物の背中に似ており、それと同時にグレンの意識は無くなつた。

\*\*\*\*\*

「何とか間に合つた……」

ルイスはほつと息を着く。研究室に着いた瞬間、グレンがレツクスに殺されそうになつてているのを目撃したルイスは剣を抜く時間も惜しいと判断して、レツクスを蹴り飛ばした。しかし、ルイスはあくまでグレンの前から退かす程度の力しか込められなかつたため、レツクスに大したダメージはなく、彼は自分を蹴飛ばした存在であるルイスのことを睨みつけていた。

「不意打ちとはいえ、俺を蹴飛ばすとはやるじゃねえか……」

「……直前で俺のことに気がついて咄嗟に防御した人がよく言うよ。流石、ディアボロス教団のチルドレン1stのネームド『叛逆遊戯』のレツクスつてところかな」

少しだけ怒氣を含みながら剣を向けるレックスに対し、ルイスは敵意を少しだけ向けながら芝居掛かつた口調でレックスの2つ名を言つた。

「……てめえ、どこでその情報を手に入れた？」

「さあ？ ああ、一つ言つておくとそんな反応しちやうと暗に肯定することになつちやうから気をつけなよ？」

「はつ、別にお前如きにバレても問題ねえよ。何せ、お前はここで死ぬんだからな！」

不意打ち氣味に放たれたレックスの一刃による攻撃をルイスは危なげなく受け止め、鍔迫り合いの形になつた。

「へえ？ マグレだとは思つたが受け止めたか」

「……それ、本氣で言つてる？ アンタの方が俺より強いって聞こえるんだけど？」

「だから、そう言つてるんだよ！」

ルイスの何処か小馬鹿にしたような問いかけに対し、レックスはイラつきを隠さずに魔力を込めて押し返してルイスの体勢を崩し、そこから本氣で仕留めようと右手の剣で袈裟斬りをしかけるも、ルイスは予め開けていた左手に瞬時にスライムソードを作ると、逆手持ちで剣を振るいレックスの右腕を切り落とした。

「は？」

右肘から先の感覚が無くなり戸惑うレックスに対し、続けざまにルイスは右手の剣を心臓に突き立てる。

「がつ……は……？」

「……悪いね、急いでるから不意を打たせてもらつたよ」

何が起つているのか分からぬまま口から血を吐いたレックスの意識はそこで完全に無くなり、ルイスはレックスの命が尽きたのを確認すると剣を引き抜き鞘にしまい、スライムソードをインナーに戻してグレンたちの方に近寄る。

「……グレンさん、必ず貴方の命は助けます」

ルイスは自分に言い聞かせるように力強く言いながら、グレンの傷に魔力を流し治療を始めたのだつた。

「人質のためにも今すぐにでも突入すべきです！」

「アイリス様、お言葉ですが敵の狙いが分かっていない上に、魔力が扱えない状況では無謀です！」

アイリスと増援としてやつてきた部隊長の口論を聞いていたアレクシアは、自分でも驚く程に冷静であった。

増援が来るまでは学園内にいるルイスのことで頭がいっぱいになり、パニックを起こしてもおかしくないぐらい頭の中がグチャグチャであつたが、焦るアイリスと突入を渋る部隊長の口論を聞いてからは、客観的に自分を見ることが出来、周りの様子を見れる程には落ち着くことが出来た。

「この調子だと、突入にはかなり時間がかかりそうだね」

そんなアレクシアにどこか疲れたような声でアイクが話しかけた。彼女の記憶が確かであれば、彼は突入部隊の編成を先程アイリスに任せられたばかりだつたはずである。

疑問には思うものの、まだ不安な気持ちは残っているため、それを少しでも感じないようにとアレクシアはアイクの方へ向き直つた。

「アイクさん。部隊の編成はもう終わつたんですか？」

「うん。一応今いる中での精銳を選んだつもりだけど……魔力が使えないと考えると正直今突入することには不安なところがあるかな」

「……小隊長である人がそれ言つていいんですか？」

「だからこそだよ。僕は部下を死なせたくないからね」

「……」

アイクの決意を込めた言葉を聞いたアレクシアが思わず固まつた直後。

「お取り込み中のところ失礼します！」

学園前で様子を伺つていた騎士の1人が飛び込んできた。息が上がつてているところから、全力で走つてきたのだろう。ただならぬ雰囲気にアイリスと部隊長は口論を止め、アイリスは走つてきた騎士に続

きを促す。

「何事だ？」

「先程、シャドウガーデンのエルと名乗つた人物が——」

「そんなに遅くては助けられる命も助けられんぞ」

『つ!』

その騎士が話そうとしたタイミングで急に割り込んできた黒ずくめのフードを被つた男の姿を見て全員が驚き、そして戦闘態勢に入つた。それもそうだろう、なぜならアイリスたちは男の接近にまつたく気が付かなかつたのだ。それに加えて、男が両肩に担いでいる2人が更にアイリスたちの警戒心を搔き立てた。

「グレンにマルコ……あなたがやつたの?」

「いや、私ではない。それよりもこの2人の治療を早くしろ。応急処置はしたが、早急に本格的に治療しないとダメだ」

アイリスの問い合わせながら男はグレンとマルコを丁寧に地面に下ろすと、もう用はないと言わんばかりに背を向けた。

「待て! お前の目的はなんだ? 学園を占拠したのはお前たちなのかな?」

「……私たちの目的は陰に潜むものを狩ること。そして学園を占拠したのは私たちではない……アイリス王女、敵を見誤るなよ」

「つ! 話はまだ——!」

「時間切れだ。私も忙しいのでな」

「ぐつ!?

エルは呼び止めようとするとアイリスを軽く一瞥してから、指を鳴らすとそこから強烈な光が放たれ思わずアイリス達は目を閉じてしまつた。そして光が收まり目を開けると、そこにはまるで最初から居なかつたかのようにエルの姿はなかつた。

「クソッ!」

「アイリス様、今は悔やむよりもグレンさんたちの治療を——」

(……)

アイクがアイリスに進言し、それに伴つて慌て始める現場の中、アレクシアは1つ気になつていたことがあつた。それはエルという青

年の存在とその実力の一端を前から知っていたこと、アイリスたちより比較的冷静に周りを見れたことだからこそ、気がついてしまったことであった。

(……なんであの人はエルがいきなり現れた時、動搖こそしてたのに

|

——全く警戒心を抱いていなかつたのか。

\*\*\*\*\*

「……まだ戻っていないのか」

学園の大講堂に出てきた仮面を被つた黒ずくめの姿をした男は、部下であるレックスがまだ戻つてこないことに悪態をついた。

経過時間としてはもう戻つてもおかしくないというのに、未だに戻つてきて来ないところを見るに道草を食つているのだろう、と男は判断し大講堂の奥にある控え室に戻る。

「上の者がそう分かりやすく不満気な雰囲気を出すのはやめておけ。士氣に関わるからな」

するとそこには入る前には居なかつたはずの仮面をつけた黒ずくめの女性がソファーに座つており、コーヒーが入つているカップを片手に寛ぎながら男の態度を指摘した。

男は忌々しそうな目線を向けながら、イラつきを隠さずに問い合わせる。

「貴様……いつからいた？」

「つい先程だ。何となく寄つてみたんだが、面白いことになつてるじやないか」

「……茶化しに来たのなら——」

「レックスが殺られた」

男が言うよりも早くその女性は男にとつては信じ難い情報をなん

て事ないように告げる。

「……なんだと？」

「右腕を斬り落とされてから心臓を一突き。しかも室内の血の量からして殺した相手は騎士団の雑魚2匹ではなく、別の第三者でそいつは無傷と見ていい。相手はそれなりの手練だな……中々楽しめそうだ」

「……っ」

女性が出した仮面越しからでも伝わる殺氣と歓喜の感情に男は動搖した。男は彼女のことを探してはいるものの、ここまで分かりやすく感情を出したことは今まで無かつたからだ。

「……それで、貴様はこの後どうする？」

「レックスを討つたやつと遊ばせてもらう。まあ、さつき講堂にいる奴らを見たからある程度予想は立てられたがな。ああ、それと貴様の計画には干渉はしないつもりだから安心しろ」

「……そうか」

「では私はもう出る。あと出来たら次来るまでに紅茶の茶葉を置いてくれ、コーヒーはあんまり好きじゃないのでな」

女性は言いたいことだけ言うと大講堂の方へ続くドアへと向かい、そのまま部屋を出ていった。それを見届けた男は長いため息を吐く。先程の女性は実力だけは組織内では最強とも言える人物ではあったが、どこか近寄り難い雰囲気や組織に入した経緯も相まってあまり会いたくない人物でもあつた。そして、何よりも。

(あの女、見た目こそ10代後半から20代前半ではあるのに、そう思えないほど人格が完成しきつている)  
それが不気味であつた。

\* \* \* \*

(……やっぱりそれなりに親しい人に敵意を向けられると結構堪えるな)

グレンとマルコを門にいたアイリスたちに引き渡したルイスは、学園内にある外の倉庫付近で変装を解いてため息を吐いた。前世で精

神を乗つ取られ操られた仲間に剣を向けられた経験はあつたが、それでもルイスにとつては慣れなものであつた。

(さてと、とりあえずまだ捕まつてないらしい女子生徒の捜索をしつつ敵も減らしてシドと合流。その後は魔力が扱えない原因を解明して、それから事件の解決か……しかも騎士団が動く前に片をつける必要があると……ハードスケジュールだな)

「離して！」

「……」

ルイスはやるべき事の多さに内心でため息を深く吐いていると、ルイスの耳に女性のものと思われる声が聞こえた。しかも内容的に、何者かに対して抵抗していると思われているため、急ぐ必要がある。

ルイスは音を立てないように注意しながら、声がした方向へ全力で走り出す。

その数秒後には見覚えのある女子生徒の腕を掴んで強引に連れていこうとする男と周りを見ている男の姿が入り、ルイスは後先考えず魔力を思いつきり込めて周りを見渡している男に対して強烈な飛び蹴りを浴びせた。

「なつ、おま——」

「黙れ

「がっ！」

「至近距離なら剣より格闘術の方が早い。覚えておけ」

飛び蹴りを食らった男は声を出す前に吹き飛ばされ、それを1拍おいて気づいたもう1人が剣に手をかける前にルイスは鳩尾に拳を叩き込み、止めに顎を蹴りあげて気絶させた。

ルイス自身、本当であれば剣を使つて確実に仕留めたかつたところであるが、血に慣れていないであろう女子生徒にトラウマを植え付ける訳にはいかなかつたため、格闘術で倒すことになつた。

周囲を見渡し、念には念を込めて魔力探知を行つた上で周辺に他の人間が居ないのを確認すると、呆然としている女子生徒——アンナへ声をかける。

「大丈夫ですか、アンナ先輩……アンナ先輩？」

「ひつぐ……ぐすつ……」

声をかけた瞬間に抱きつかれたルイスは戸惑いの声をあげるも、アンナが嗚咽を漏らしていたことに気づいた。普通に考えてみれば、アンナは争い事なんかに耐性がない普通の女性であり、しかも先程アンナに対して迫っていた男たちの特徴が前に彼女を殺そうとした人物と同じであれば恐怖を感じるのは当然のことだ。

「……大丈夫ですよ、もう怖い人はいませんから」

「……ぐすつ」

「大丈夫、あなたのことには俺が守りますから……」

ルイスはアンナの背に自分の腕を回すと、幼い子供をあやすかのように彼女の背中を優しく叩き、穏やかな口調で話しかけ続けた。

\* \* \* \*

「私は後輩に父性を感じたダメな先輩です……」

「で、結果ああなつたと」

「うん……良かれと思つてやつたのにどうして……」

僕は部屋の隅っこで体育座りして懺悔しているアンナ先輩という女子生徒と、頭を抱えるルイスを見てため息を吐いた。

僕とシェリーが副学園長室に入つてから1分も経たない内にあの二人が入ってきたんだけど、その時からアンナ先輩はあんな感じだった。まあ、理由を聞いたらある程度は分かつたけども。というより、僕の相棒ことルイスはやはり主人公ムードが上手い。知らないうちに新しい女性を堕としてヒロインにするとか、正しく主人公だ。

だから、僕の考えだと今回のイベントも本来はルイスとシェリー、そして恐らくアンナ先輩の3人が進めるべきはず。しかし、アンナ先輩は暫く使えなさそうだし、ちょっと疲れてる感じのルイスに全てを押し付けるのは流石に可哀想だ。

乗り気では無いけど、ここも手伝つてあげるべきなんだろう。あくまでゲームでいうところの名無しのお助けモブつて感じで貰かせて

もううけども。

「ありました」

方針を決めた直後、シェリーが机の向こうから資料を抱えて戻ってきた。因みに彼女はルイスとアンナの事を前から知っていたみたいで、僕が先程の結論に至ったのもこれが理由になつてたりする。「えつと……アンナさんはそのままでいいんですか？」

「そつとしておいてください」

「わ、分かりました……現在学園は『強欲の瞳』という効果範囲にある魔剣士や魔力体から魔力を吸收して、一時的に溜め込むことが出来るアーティファクトの効果を受けています」

あ、ルイスが魔力を吸收するつて説明聞いて嫌そうな顔した。前世でそれ関連で嫌な思い出あつたのかな？

「でもさ、黒ずくめの人達は魔力を使つてたよ？」

「そういうえばそうだつたな……シェリー先輩、なんとか分かります？」  
「吸収させたくない魔力なら何でも吸収しちゃうつてことになるの？」  
「うでなくては『強欲の瞳』を使用している本人の魔力まで吸収されてしましますから」

「なるほど」

「シェリーちゃん、教え方上手いよね……そういうばその説明だと記憶させていない魔力なら何でも吸収しちゃうつてことになるの？」

「おつ、アンナ先輩復活した。」

僕も考えていたことを質問したあたり、ただ黙つて落ち込んでいたわけでは無かつたみたいだ。

「どうでしよう……感知出来ない程の微細な魔力や、容量を超える強大な魔力なんかは吸収出来ないと思います。まあ、普通の人間にそんな魔力は使えないんで無縁な話ですね」  
「なるほど、だから僕とルイスは魔力を使えるわけか。」

「次に『強欲の瞳』の厄介なところは、魔力を溜め込むだけ溜め込むと一気に解放してしまう点にあるんです。膨大な魔力は爆弾と同じ、解放されてしまえばこの学園は跡形も無く消えてしまうでしよう」

「消える!? え、そんな危険な物を学園を占拠した奴ら使つてゐるの?」

「はい。だからこそお父様は『強欲の瞳』を国に預けて管理をしたのですか……」

「盗まれたとか、実はもう1つあつたとか?」

「いや、今はその話をしたところで意味は無い。それにこれで黒ずくめたちの狙いはハッキリしたな」

「魔力を集めるのが狙いなら『強欲の瞳』があるのは皆が集められてゐる大講堂つてことだね……でもなんかおかしい気がする……」

アンナ先輩の呟きが耳に入るがそれはスルーしよう。

「それで、解決策はあるの?」

「あ、はい!あります!」

僕の問いに対してもシェリーは手を前に出して開く。そこには銀色に輝くペンドントのようなものがあつた。

「これは『強欲の瞳』の制御装置です。解析した事で分かつたんですが、本来『強欲の瞳』はこのアーティファクトを使い、魔力を長期保存するための物だったんです」

「「長期保存?」」

「魔力の解放を止められるつてことです。凄いんですよ!この性能を上手く使えば——」

「ど、取り敢えず!それを使えば魔力を使えない事態を何とかできるつてことでいいんだよね?」

「あ、はい……」

アンナ先輩ナイス。止めなかつたら多分シェリーはそのまま延々と話しつづけてたと思うからね。

「それでは、そのアーティファクトを使つて『強欲の瞳』の効果を打ち消し、その後大講堂の生徒と一緒に敵を殲滅という流れでしようか」「あ、その実はまだ調整が終わつてなくて……しかもそれに必要な道具も全部研究室に置いてきてしまつてしまつていて……」

「そうでしたか……それなら俺とシドで取りに行つてきます」

丁度トイレ行きたいと思つてたから僕も一緒に行くことにしてくれるなんて、ルイスはやっぱり頼れる相棒だなあ。

「え、シドくんもですか……？」

「その、出来たらどちらか1人は残つてくれた方が安心なんだけど……」

おつと、女子2名から反対の意見が出ちやつたか。うーん、これはどうしようかな。

と思つていたらルイスが先に動いた。

「確かにそうですね。そしたらシド、お前に道具の回収頼んでもいいか？本当なら俺が行つた方がいいとは思うんだが、『紅の騎士団』の人としてはシェリーさんの身の安全が最優先しないといけないからさ……」

「わかつた、それなら行つてくるよ。丁度トイレ行きたかったしね」

「シドくん……」

ルイスのバスのお陰で何とかなつたかな。

まあ、シェリーの顔を見た後に僕の方を信じられないものを見るかのように見てきたルイスはスルーしよう。

「それでは、お願ひしますね。これがメモです」

「うん、それじやあ行つてくるね」

\*\*\*\*\*

「できました！」

「「おお～」」

シドがシェリーからのお使いを済ませ、外が暗い夜に包まれた頃に『強欲の瞳』の制御装置の調整が終わり、それを待つていたルイスたちは感嘆の声をあげる。

これは暗に彼らの作戦が次の段階に入つたことを示しており、次に取る手段も既に打ち合させていた。

「えつと……確かこれとこれ……あとこれだつたかな？」

シェリーは室内にある本棚の本を数冊抜き取る。するとその本棚は回転し、奥に地下への階段が現れた。

「すごいね」

「さつき聞いてたけど、こういうの本当にあるんだ……」

(……魔王軍の砦にあつた隠し通路から雌のオークが飛びかかってきた時のこと思い出しちゃつた)

「……お父様、必ず助け出してみせます」

三者三様の反応をする中、シェリーは決意を込めた様に手にある制御装置を握りしめる。

「お父様、ご無事だといいわね」

「はい……あの、シドくん道具を持つてきてくれてありがとうございます」といいました

「ほんの少し助けただけさ。これ以上はもう僕に手伝えることはない。ここからは君の力で、世界を救ってくれ」

「……取り敢えず、シドとアンナ先輩はさつき打ち合わせた通り、これから5分経つまでは動かないで下さい。まあ、トイレは行つてもいいですが5分たつたら互いを待たずにさつさと脱出してくださいね?」

「うん、分かった」

「分かつたよ……ルイスくん、どうか無事で……」

「ありがとうございます……それではシェリー先輩、行きましょう」「はい。それでは、皆さんまた!」

ルイスはシェリーと一緒に隠し通路の奥へと進み、シドとアンナはそれを見送ったのであった。

\*\*\*\*\*

——違和感がある。

ルイスとシェリーが隠し通路の奥へと進み、その10数秒後にシドがトイレに行き、1人部屋に残っていたアンナは考え方をしていた。これまで得た情報を彼女は改めて整理する。

(まず、『強欲の瞳』っていうのは元々はシェリーちゃんのお母様が研究していたもので、お母様の死後シェリーちゃんが研究を継いだ。そしてその途中で『強欲の瞳』の性能と危険性に気がついて副学園長に国へ管理するようにお願いし預けたわけだけど……)

アンナが引っかかっていることの一つが正にそこだつた。

国が管理しているはずの『強欲の瞳』を何故テロリストたちが持っているのか、そのことに異様な違和感を彼女は感じていた。

(そんな危険な物が盗まれるほど杜撰な管理はしないはず。そうすると国の内部に協力者がいた事になるけど、それで盗んだとしても騒ぎにはなるはず。少なくともアイリス様が設立した騎士団にいるルイスくんが『強欲の瞳』の存在を知らないはずがないし、もう少し反応するはず。だから盗まれたっていうのはなし。そうすると、同じようなものがあつたつてことになるけど……)

——果たしてそんな都合のいいことがあるのだろうか？

そもそもアーティファクト自体、貴重なものであるため同じような物がたまたまあるという可能性は〇では無いがかなり低い。

そして仮に同じようなものがあつたとしてもまだ疑問は残つていた。

(本当の目的が分からぬ。生徒を人質にして金銭とかを要求するために学園を襲つたなら分かる。でもそんな素振りは無さそうだし、かといって『強欲の瞳』の性能を使つて学園を吹き飛ばすのは正直メリットがない。吹き飛ばすにしてもやるなら城とかの方が国を乗つ取るには都合がいい。この、目的さえ分かれば少しは進展するんだけど……ダメだ、分からぬいや)

アンナはため息を吐きながらこめかみを抑える。あと一步まで来ているような気がするのに、その一步が遠い。

もう諦めてしまおうか、とアンナは一瞬考えるもそれをすぐに思考から消した。何故なら、漠然とではあるがこの違和感を放つておくととてつもなくまずいことが起こる予感がするからだ。  
(でも、このまま考えてもなあ……そういう『強欲の瞳』は魔力を吸収して溜め込むことができるんだつけ。確かにそれを上手く利用すれば色々と応用できそ……う……)

アンナはシェリーの説明を思い出したところで目を見開き、同時に彼女の思考がスムーズに回り出した

(もし、今回のテロリストの目的が『強欲の瞳』に魔力を溜め込みたい

だけならあいつらの行動は納得が行く。それにそもそも最初から『強欲の瞳』が国に預けられてなかつたとしたら……！）

アンナは最終的に信じたくない答えに辿り着くと、急いで紙にシドへの走り書きをし、カンテラを手にシェリーたちが通つて行つた隠し通路へと駆け込み全力で走る。

（あいつらの本当の目的は『強欲の瞳』に魔力の吸収をさせて、その魔力を制御装置を使って保存すること！学園を襲つたのはそのために魔剣士だけじゃなく大勢の人間がいて、尚且つ制御装置はシェリーちゃんが持つていたからだ！だから首謀者はあの人……！）

埃で出来た足跡を見ながらアンナは手遅れになる前に必死に走る。もし、自分の推理が正しければ――

「急がないと……！きやつ！」

自分を友人と読んだ女の子と、想い人のためち足を動かす彼女の耳に突然轟音が聞こえてきた。その音におもわず悲鳴をあげる。

「そんなに遠くなかったとは思うけど、一体何が……？」

アンナは何が起こっているのかという不安と恐怖に足が震え出するも、意を決して、足跡を頼りにまた走り出すのであった。

アンナが地下通路にて轟音を聞く前。

その頃にはシェリーが制御装置を講堂に向かつて投げ入れ、人質であつた生徒たちが反撃し出してから数分も経たぬうちにトイレを理由に上手く抜け出したシャドウに扮したシドが講堂の天井を突破して乱入しており、加えてそれを合図にシャドウガーデンの構成員も中に入りすぐさまディアボロス教団との戦闘という名の蹂躪が始まっていた。

（凄いな、うちの子たちは……ここまで強くしてくれたラムダ教官には頭が上がらないな）

それを見ていたルイスはここまでシャドウガーデンのメンバーを強くしてくれたラムダに感謝の気持ちを抱いていた。尤もこのことを本人に伝えた場合、「そんな、エル様には指導のことで有意義な意見も貰いましたし、その上手伝つてくださいたのですから恐れ多いです！」と慌てて言われるのだが。

（それにしても、デルタは相変わらず凄いな……対集団戦の方もある程度は教えてはいたけど、ここまで上手くできるようになつてるとは思わなかつたな……っ！）

ルイスは下で一撃でディアボロス教団の構成員を倒していくデルタを見ながら内心苦笑いを浮かべ、その直後とあることに気がつくと隣で呆然としているシェリーのことを片手で抱えるように持つた。

「ふえ!? る、ルイスくん！」

「この場を離れます。口閉じてくださいね」

シェリーがどういうことかと聞こうとしたが、どこからか起こつた爆発と講堂を包み込むように炎が燃え上がつたことによつてそれは出来なかつた。

ルイスはシェリーを抱えた状態で元の方向へ来た隠し通路へ滑り込み、自分たちを包みこもうとしていた炎から難を逃れた。

「た、助かりました……ルイスくん、ありがとうございます！」

「いえ、気にしないでください」

シェリーのお礼を聞いてルイスは間に合つたことにはつとしつつも、状況があまり好ましくないことになつてゐるのに内心舌打ちをする。

ルイズとしてはなるべく早くシェリーを外にいる騎士団に渡したかった。だが副学園長室まで戻るというのは下策すぎる上、下手すれば今回の事件の黒幕に出会う可能性もある。それに加えて火の回りが予想以上に早そうだつたため、ちんたらしてたら火のせいで脱出できませんでしたというオチになりかねない。

(仕方ないか)

ルイスは内心でレイたちのことを笑えないな、と思ひながらシェリーを下ろすと彼女に質問を投げかけた。

「シェリー先輩、ここから最短で廊下に出れるところはありますか?」

「え? ありますけど……」

「ふむ……失礼を承知でもう1つ聞きたいのですが壁などを無視した直線距離だとどの方角ですか?」

「それならこちらですけど……」

「ありがとうございます。ではシェリー先輩、少し下がつててください」

「は、はい……」

ルイスはシェリーが下がつたのを確認してから魔力を右手に集める。

「え? ま、まさかルイスくん!」

そしてそれを見たシェリーはルイスが何をしようとしているのか察し、慌てて止めようとするも――

「はあっ!!」

その直後にルイスの無駄のないストレートが壁にぶつけられ、轟音とともに壁は吹き飛び人1人なら余裕で通れるほどの穴を開けた。「時間が無い時はこれしかないのがほんとなあ……シェリー先輩、行きま……シェリー先輩?」

「ルイスくんつて乱暴な人なんですね……」「心外です」

本当に心外だとルイスは思いながらも壁をどんどんぶち抜いていき、そして壊した壁が4枚目になつたところで2人は隠し通路から出た。

（思つたより壁ありましたね。ここは2階か……火の手は匂いからしてそんなに余裕はない。階段は東口の方が近いしそこからなら出口もそんなに遠くない）

「ううつ、お義父様になんて言えば……」

「ちゃんと私から説明するので安心してください。さあ、早く脱出し——つ！」

ルイスのあんまりな行動によつて隠し通路が隠し通路でなくなつたことに、義父になんて説明すればいいのかと悩むシェリーに声をかけた直後、ルイスはシェリーを庇うように前に立つと剣を抜いてこちらに猛スピードで迫つてくる黒い影に向かつて剣を振るつた。

その直後、ガキン！という金属と金属がぶつかり合う甲高い音が通路の中を響き、黒い影はそのままルイスを通り過ぎて5m先のところで立ち止まつた。

「きゃあ！？」

「ほう、レックスなら反応できない攻撃を防ぐとはな……」

「お前は……！」

悲鳴を上げてしゃがむシェリーをよそにルイスは黒い影——否黒ずくめの格好をした人物を見て冷や汗を流した。先程受けた剣と女性の声は忘れたくても忘れられないほどルイスの脳裏に焼き付いている。

「久しぶりだな、少年」

その人物はまるで最近会つた長年の友人のような話し方でルイスに声をかけた。しかし、声をかけられた側のルイスからすれば溜まつたものではなかつた。

「……シェリー先輩、早く逃げてください」

「え？」

「いいから早く！あいつ相手だと貴方にまで気を配る余裕は無い!!」

「は、はい！どうか無事で……！」

ルイスはシエリーガ慌てて後ろの階段に向かつて走つていくのを音で察しつつも、目の前の女性から目を全く逸らさずに注視していた。

「まずはよく生きていた、と言うべきか」

「……シャドウガーデンっていう組織が運良く助けてくれただけだよ」

「ふむ、そしたら私の部下が助けたのかもしかんな」

「そしたら笑えない冗談だね、とんだマッチポンプだよ」

「そうかもしかんな」

二人の会話はそこで止まり、その後互いの姿が消え1秒も経たぬ間に刀と剣がぶつかり合い、先程消えた2人の姿も現れた。

「なるほど、レックスを殺つたのはやはり貴様のようだな」

「俺が来た時にはもう死んでた、よつ！」

ルイスは女性の言葉を否定し押し返すと、その勢いのまま剣を叩きつけるもそれはあっさりと受け流されお返しと言わんばかりに一瞬のうちに女性の剣が1回振られたが、ルイスの目は斬撃が2つ自分へ迫つているのを捉えていた。

「くっ！」

ルイスは瞬時に剣を動かして2つの斬撃を防ぐも、その後に今度は3つの斬撃が放たれたように見えすぐさま防御の構えを取り1つの斬撃を受け流し、2つ目を防ぎ、そして最後の3つ目を弾くように防いだ。しかし、その隙を女性が見逃すはずもなく、ルイスの腹に蹴りを入れそのまま隠し通路へ続く穴へと吹き飛ばした。

「私の剣を防いだ褒美も兼ねて敢えて思惑に乗つてやつたが……どう出る？」

女性は不敵な笑みを浮かべながら、ルイスがどう出てくるのか楽しみに待つた。

\* \* \* \* \*

(スライムスーツに加えて魔力の防護すら貫通してくるなんて、パワーもだけど技術もバケモノクラスだな……でも、賭けには勝った) ルイスは傷ついた内臓を魔力を使つて癒しながら立ち上がる。

彼は最初からこのような状況になるのを狙つていた。あの女性の実力はルイスの前世込みで考えても、自身の師を除けば、いやその師を入れても1番強い相手と断言出来る。彼女相手にまともに戦えるのは今世だとシドが自分くらいで、七陰でもアルファとデルタなら辛うじて30秒ほど持ち堪えられるかどうか、とルイスは推測していた。

そしてこの推測が当たつていれば、万が一あの女性に会った場合デルタたちは殺されてしまう。

故にルイスはここであの女性を全力で討つと決断した。

だが、そのために普通の剣では分が悪すぎた。先程まで使つていた剣は以前女性と戦つた時より品質は良くなつてはいるものの、たつた数回受けただけでヒビが入つており、あと2回も受けければ碎け散るだろうとルイスは予想していた。

だからこそ、女性と渡り合うには彼が持つ武器の中で尤も耐久力があるスライムソードが必須であり、それには魔剣士の1人であるルイス・エアではなくシャドウガーデンのエルになる必要があった。だが、あの場面でスライムソードを使うとシェリーに見られてしまう可能性があつたため使うことが出来ず、かと言つて女性がスライムソードを出す隙を作つてくれる可能性はなかつたためこうして姿を1度消す必要があつた。

尤もあの女性は自分の考えに気づいていただろうとルイスは考える。それでも彼女なら自分が楽しむためにこちらの考えに乗つてくれるだろうと、ルイスはそんな彼女の自信と慢心の2つに賭けた。

結果は無事にその賭けに勝ち、気になることはあれど後はインナーとして纏つっていたスライムスーツをエルとしての服装にしてあの女性を倒すだけである。

ルイスは早速魔力を操作してスライムスーツを全身に纏い、念の為フードで自身の顔を隠すと手に刀の形をしたスライムソードを作り、足に必要最低限の力を入れて床を蹴る。

女性は突如穴から飛び出してきたエルの攻撃を受け止め鍔迫り合いの状態に持ち込んだ直後、その剣から伝わる本気の殺意を感じ取り笑みを浮かべ、同時にルイスと目の前の男の剣が同一であることを瞬時に理解した。

「なるほど、このためにわざわざ蹴飛ばされに来たわけか！いいぞエル、この私……『凶星』ネメシスの渴きを潤してみろ！」

漆黒の刀と白銀の刀がぶつかり合い火花を散らす。

とてつもない速さで聞こえる剣戟の音は永遠に続くのではないかと錯覚するぐらい、全く途絶える気配がない。

そしてそれは女性のあらゆる斬撃をエルが全て凌いでいるという事実でもあった。

だからこそネメシスはとある違和感に気がついた。

彼女は先程から自分の攻撃が全て防がれているのに気づいてから、所々フェイントを混ぜたり、スピードの緩急や足さばきを絶妙なタイミングでズラしたりしているのだが、自身の刀を異様に刃を通さない黒い外套に刃を当てるのが精々であまり通用していない。

（どういうことだ？まるで全部先読みされている、いや私の剣を知られているような感覚だ……ここまで防がれる可能性として挙げられるのいくつかあるが……ふむ、ここは試してみるか）

ネメシスはこの違和感を突き止めるために距離を大幅にとった。

これから放つ一撃はまだ教団の人間にすら見せていないものだ。先程感じた違和感から立てた推測が当たっているかどうかを確認するには、これが手つ取り早い。

彼女は左手に魔力を練りながら目の前のエルがどう出るか、楽しみでしようがなかつた。

刀というのは近距離で戦うことを想定されている武器だ。そのためお互いの間合いであつた距離を離すというのは仕切り直しとして

はありではある。

しかしエルの長年の戦闘経験と直感がそうではないと警告していた。距離を離すという行為は仕切り直し以外にも取られることがある。

そう、例えば新たな攻撃を加えるために必要だつた場合が正にそうだ。

（手に魔力を集めてる？……まさか！？）

エルはネメシスがしようとしていることをすぐに察知した。何故ならそれは、前世の自分がよく使っていた技の発動準備に酷似していたからだ。

可能であるならば魔力の収束を阻止したいところはあるが、阻止する前に至近距離で放たれたらスライムスーツの防護を貫通するのは必然。

ならば取る手段は回避ではあるが、もしそれが原因で外にいる騎士団やデルタたちが来たらかなり厳しい戦いになるため却下。

回避の手段は取れず、かといって剣を使つてはじき飛ばしてしまえば外にバレてしまう可能性がある。防ぐにしても今から防御の姿勢をとつて間に合うかはギリギリだ。

ならばこちらも同じもので迎撃するしかない。

「ちつ……！」

エルは魔力で自身の身体能力と視力をさらに強化し、更に左手とスライムソードに魔力を収束させる。

「さあ、どう凌ぐか見せてもらおうか……はつ！」

それと同時に紫色の光弾が連續で2つがネメシスの手から放たれ、エルを貫かんと廊下を抉りながら凄まじい速さで迫る。

そしてエルはその光弾2つを見て再度目を見開くもすぐに意識を切り替え、光弾を見据える。

一発目。

——左手に溜めていた魔力を4割使って魔力弾を放ち相殺する。

二発目。

——先程より大きい光弾のため左手に残っている魔力を全部使つ

て魔力弾を放ち迎撃する。

そして三発目。

——予想通りこちらが魔力弾に対応している間に放たれた紫色の魔力の斬撃波を、前世でもやつたようにスライムソードを振り下ろし魔力の衝撃波によつて打ち消す。

「やはりそう対処してきたか……！」

ネメシスはエルの対応を見て自身の予想通りだつたと獰猛な笑みを浮かべる。

だが一方でエルの表情は強ばつていた。先程の三連撃は前世で自身の手札として多用した技であり、そして嫌という程叩き込まれたものであつたせいで、ネメシスが誰なのかはつきりしてしまつたからだ。

（これを使えるということは、やっぱり……！いや、今はあの人を倒すのが優先だ！）

しかしそう考える時間さえ惜しいと言わんばかりにエルは地面を蹴つてネメシスは接近し、強烈な刺突を放つ。ネメシスはそれを体を逸らして回避するも、エルは踏み込んだ片足を軸に回転し横に薙ぎ払う。しかしそれも容易く剣で受け止められ、そのまま鎧迫り合いになる前にネメシスは力任せに刀を振るいエルを吹き飛ばした。地に足をつけた状態で吹き飛ばされながらも、バランスを崩さないようになえたエルは接近してきたネメシスの嵐のような斬撃を的確に防いでいるものの、内心穏やかではなかつた。

力、技共に自分より上の相手ではあるが、彼女の剣技をよく知つてゐるというアドバンテージのおかげでこうして互角に持ち込めてゐる。だがそれをもつてしても、五分五分に持ち込めるのがやつとというのが現状だ。そしてこの均衡も些細な事でも一瞬で崩れるのを、加えてその要因が起こりやすいのも自分の方だとエルは確信していた。

ただでさえ格上の相手をしているのにも関わらず、向こうはまともに食らえば魔力が練れなくなる毒を使つてゐるためかすり傷を許容することも出来ず、加えて剣技が読めるとは言つてもデタラメな速さとパワーのせいで全神経を注ぐ必要があるため消耗はエルの方が激

しい。

さらに付け加えると、この攻防をしている間に今彼らがいる校舎にも火の手が回り始めており、エルが壊した隠し通路の方からとある人物だと思われる魔力反応があることも踏まえると、あまり時間をかける訳にもいかない。

だからこそすぐに打開策を考えなければならぬわけなのだが、先述したとある人物を巻き込む恐れがあるため思い切った手段が取れず苦戦していた。

「どうした、その程度では私を殺すことはできないぞ？」

「チツ……！」

ネメシスの煽るような発言にエルは舌打ちをつきながらも、意識は彼女の嵐のような斬撃に向けていた。そしてもう何度も目かも分からぬほどの斬撃を捌いた直後、エルの目は一瞬の隙を捉え勝つための糸筋をすぐに掴んだ。

「そこっ！」

瞬きする間すらあつたか怪しい一瞬の隙に無理やりねじ込んだリイスの斬り上げをネメシスはバックステップで躱そうとしたが、すぐに悪寒を感じ身体を捻つた。すると先程ネメシスがいた位置を伸びた漆黒の刃が通り過ぎ回避が間に合わなかつた彼女の右腕を斬り飛ばした。

そしてエルはそのままスライムソードを上段に構え振り下ろそうとして——スライムソードを手放し、左肩を突き出すように体当たりを行つた。

明らかに虚をついた攻撃であり、体当たりした直後にスライムスライツを変形させ、左肩から剣を出して突き刺す。それがエルがネメシスの隙を捉えてからすぐに導き出した必勝の道筋であった。

「お前なら来るだろうと思つていた！」

「なっ！」

だが、その体当たりを女性はそう来ると知つていたように屈むとエルの襟首を左手で掴み、力任せに投げ飛ばした。

「くっ……」

エルは空中で体勢を立て直しながら着地する。投げられたせいで距離ができてしまつたものの、片腕を切り落としたというのは変わりない。両手で武器を持てないというのは、武器を振るうスピードや威力が落ちる。油断は出来ないものの、状況はエルの方に傾いておりそもそもそれを理解した上で攻撃を仕掛けようと彼女に視線を向け、舌打ちをした。

「あの僅かな隙から勝ち筋を見つけるその日の良さと自身の装備を余すことなく使うその器用さ、賞賛に値する」

「……嫌味か？」

「まさか、素直に褒めてるだけだ」

エルは切り落としたはずのネメシスの右腕があるべき場所に戻っているのを見て、自身の想定が甘かつたことを後悔する。魔力制御の練度によつては四肢をくつづけて治すことを彼はシャドウから聞いていたが、ネメシスがその域に達していることを考えていなかつた。「私としてはこのまま続けてもいいが……ここで退散するとしよう。この校舎もそろそろ限界みたいだし、『瘦騎士』の方も終わつたみたいだからな」

「……逃がすとでも？」

「このままやりあえба自分が負ける、というのを理解していないお前ではないだろう？」

「……」

それはこのまま戦い続けていた場合起こりうる1番高い可能性であつた。そもそも、エルがネメシスの片腕を切り落とせたのはスマッシュソードという武器の特性を活かした初見殺しのおかげだ。初見殺しの手札が1枚減つた上に、体力や集中力を消耗しているのはエルの方なため、このまま続けるのは得策ではない。だが、それでもエルには引けない理由があつた。

「あなたを野放しにするわけにはいかない」

「安心しろ、別にお前の正体は報告せんし、お前の仲間と遭遇しても殺しあしないでおいてやる。それに、考えてみたらここでお前を殺したらまた退屈な日々を過ごす羽目になるからな……そらつ！」

「このてい……っ」

ネメシスが不意に左手から出された魔力弾。反応が僅かに遅れたエルはそれを躱そうとして、自分の後ろの壁の裏に魔力反応があることに気がついた。もし、エルがこのまま躱してしまえば魔力弾は壁を貫きその後ろにいるであろう人物をも貫くだろう。

だが、エルという人間は助けられる命を見捨てるということを選べない人間であつた。彼はすぐさまスライムソードを新たに生成し、込められるだけの魔力を流し込み、魔力の斬撃波を飛ばして相殺することに成功したのだが。

「……撤退されたか」

魔力弾を飛ばしたネメシスの姿はもうそこにはなく、エルは自身の正体をバラしたのにも関わらず仕留めきれなかつたこと悔やんだ。他にも考へるべきことはあるが、まずは壁の裏にいる人物の救出が先だと判断し、そちらの方へ向かおうとして――

「誰かいませんかーっ!?」

（どうして）

アイリスの声が聞こえたと同時に、タイミングの悪さにエルは思わず顔を上に向けて額に手を当てた。本来であれば隠し通路の中に入る人物を回収して外へ出ようと思つていたのだが、今からそんなことをすればアイリスと戦闘になる可能性が高い。

ここから逃走するのもありだが、そうするとルイス・エアとして帰還する方法がかなり限られてくる。

（待てよ、考えてみたらルイス・エアっていう人物はそこまで重要な人間じやないよな？）

ふとエルはそう思つた。ミドガル王国内部にも教団の手があるのは分かつたが、いくら第2王女のとはいへ一介の従者であるルイスではあまり探りを入れることは出来ない。それにネメシスの言うことがあまり信用出来ないというのもあるし、彼女の言い分を信じたとしても「殺しはしない」という発言は「殺さない程度の怪我は負わせる」という風にも受け取れる。

それならばルイス・エアという人間はここで退場して、シャドウ

ガーデンのエルとしてこの先生きていい、ネメシスの警戒とアルファたちの補助に回つた方がいいのではないか。

と、エルがそこまで考えて早速死んだように痕跡を残そうとしたその時だった。

「ルイスーっ！ いるなら返事しなさい！」

「アレクシア……!?」

予想していなかつた人物の声を聞いてエルは動搖した。後から学校に来る、という話は聞いてはいたもののまさか突撃してくるなんて全く思つていなかつたからだ。

だが状況は困惑するエルを置き去りにしていく。

「アレクシア!? 外で待つてなさいと言つたでしよう！」

「そんなことはいいのです！ それより早くルイスを助けないと!!」

「そんなことって……いい加減にしなさい！ ルイスは私が——」

「待つのは嫌なんです！ それに、まだあいつとやりたいことも伝えたいことも伝えてないんです！」

「ちょっと、アレクシア！」

(……)

アイリスとアレクシアの口論を聞いたエルはすぐさま近くの空き教室に入り込みスライムスースを解除、ルイスの姿になると腰からビビが入つた剣を取り出した。

「ごめん、シャドウガーデンの皆。次は絶対に仕留めるから……っ！」

ルイスは燃える壁の近くで懺悔するように呟くと、手に持つている剣を思いつきり突き刺した。

## 26 冊目

。月☆日

昨日は日記を書く暇がなくて1日空いてしまった。

取り敢えず昨日起きた襲撃事件の分かつている範囲での結末をまとめようと思う。

まず、校舎は火事によつて全焼した。そのためまだ発表はされていないけど、早めの夏休みに入るのは確定だろう。

次に被害状況については、学校側の死傷者はやはりそれなりの数にはなつてしまつた。特に教員や当時警備に入つていた騎士が多く、そちらの補充の目処も少し難航しているらしい。ただ、グレンさんとマルコさんは治療が間に合つたため復帰はまだ目処が立たないものの、一命は取り留めたとの事なので安心している。

そんな中多くの人たちに衝撃が走つたのは死亡者の中にルスラン副学園長がいたことだろうか。見つけたのはシェリー先輩らしく、彼女はシャドウガーデンの主と思われるシャドウによつてルスラン副学園長が殺されるのを目撃したことだ。これに関して思うところはあるし、何でシャドウがわざわざシェリー先輩のお母さん殺されたのと同じ方法でルスラン副学園長を殺したのか、何故黙つてその場を去つたのかも分かる。

けど、シャドウにこの罪を着せてしまつたのは本当に申し訳ないし、自分の力不足が本当にいらだしく感じる。

話を戻そう。最後にシャドウガーデンが指名手配犯になつた。言つてしまえば今回の騒動全ての責任を押し付けられたのだ。特にシャドウには間違いなく歴史の教科書に乗るレベルの大罪人と言えるぐらい、犯した犯罪が多く記載されていた。ちなみにエルに関しては手配書を出された程度だつたけど……正直複雑ではあつた。

ちなみに俺に関してだが、3日ほどまたベッドの上生活をすることになつた。まあ、腹に剣がぶつ刺さつていたのだから寧ろ3日というのが短いぐらいだ。

そう、俺はまだルイス・エアとしても生きることにした。あの時、ア

レクシアの叫びを聞いて何故か残してしまった前世の勇者パーティやポチすけ、姫さんの事が頭の中に浮かび、気がついたらルイス・エアはどうすれば生きられるかを考え、行動に移していた。

結果として取り敢えず負傷して動けなくなつた形を取つたのだが

……まあ、大変だった。

俺を見つけてくれたのはアレクシアなんだが……その時の俺の状態つてのが燃える教室の中で腹に剣ぶつ刺さつたまま倒れてるつて感じだつたんだよな。うん、パツと見死んでるつて思うよな、俺も同じ状況ならそう思う。

だから「ル……イス？」つて目を見開きながらよろよろと歩いてくるアレクシアは本当に見てられなかつたし、罪悪感で死ぬかと思つた。そして、俺のそばに辿り着いたら「う、そ……よね？ ルイス、なに寝てるのよ……早く起きてなさいよ……」つて泣き始めたもんだから思わず「勝手に死なせないでくれません？」つて言つたらキヨトンとした顔になつたと思つたら、「このバカっ！ 紛らわしいわよ！」つて罵倒されながら思いつきり抱きつかれた。俺、パツと見は死にかけの重傷者なのに、どうして。

その後は隠し通路にいた生徒——予想通りアンナ先輩だつた——を連れてやつてきたアイリス様の助け（一悶着あつたけど）もあつて燃える校舎から無事脱出した。

その後直ぐに仮の医務室にぶち込まれて処置を受け、自分の寮に運び込まれたのが昨日の流れだ。

そして今日は事情聴取をアイリス様が俺に対して単独で行つたのだが、ルイス・エアとして動いた時の話を主にした。ただグレンさんはレックスに対して飛び蹴りをまつたところをみられているため、そこは少しだけ戦闘したあとレックスに蹴飛ばされて気を失つたことにした。あとはシャドウガーデンとは別の組織がいるかもしれないことを嘘と事実を混ぜて話した。実際、ディアボロス教団が今回の大幕だし、エルとネメシスが戦つたのも事実だからそれをあつさり負けたルイスがそれを少しだけ見れたつて感じにした。

そしたらアイリス様に「お願いですから無茶をしないでください」

と怒られてしまった。いや、仕方ないやん。あの時ネメシスはシリーア先輩のこといつでも殺せたし、外に出たら出で騎士団への被害がさらに酷くなるし、そもそもスライムソードとスライムスースないとまともに相手できないし……。

だが、そんなこと言えるわけないので「被害をなるべく抑えたかってんです」つて言つたら「そういう問題ではありません!」つて怒られてしまつた、どうして。その後、アイリス様は「すみません、取り乱しました」つて謝つたあと安静にするよう告げてから部屋を出ていった。

取り敢えず今日はもう誰も来なきそうだし寝よう。アイリス様には明日謝りに行こう。俺のせいだ怒らせてしまつたのは事実だからな……なんで怒つたのか正直わからないけども。

。月♪日

アイリス様に謝るためにこつそり抜け出そうとしたタイミングで、アレクシアに見つかってベッドにぶち込まれた。そしてその後に「あんたは怪我人なんだから休みなさい!」と無理やり寝かされ、何故か俺の看病をしてくれた。具体的に言うとご飯はアレクシアが食べさせてくれたし、トイレ行こうとしたら体を起こすのを手伝ってくれた。

いや俺は要介護者かよ、と思ったのだが「あんたが変なことしないかの監視よ」と言われた。アレクシアから俺への信頼が厚いようで泣きそうになつた。というか、あなたもちよつと前までは腕を固定してた怪我人だったはずなんんですけどねえ……てか、今思つたけど腕固定してたやつ外れるの早くね?

さて、そんなアレクシアは先程俺の様子を見に来たと思われるアイリス様の手によつてドナドナされて行つた。何でそんなことになつたのかというと、俺の看病が楽しくなつたのか調子に乗つたアレクシアが俺の体を拭くと言い始めたのだ。うん、つまり俺はアレクシア相手に上裸になる必要が出てきたのだ。

そうなると絵面と俺の首がまずいため、俺は気持ちだけ受け取つて

おくとやんわりと断つたのだがあの王女、「いいからいいから、遠慮なんていらないのよ♪」とノリツノリでタオル片手に迫つてきやがつた。お互い譲らなかつたため、結局ベッドの上で取つ組み合いが始まり、僅かな隙をついて俺のバランスを崩して押し倒したアレクシアが俺の服に手をかけ、もう終わつたと思つた時にアイリス様が訪ねてきてくれたのだ。

まあ、むつりと思われるアイリス様が俺を押し倒すどころか服を今まさに脱がそうとしているアレクシアを見て爆発するわけがなかつた。顔を真つ赤にして「な、ななななななにをしてるの?!」って言つた時は思わず笑いそうになつて危なかつた。

その後はアレクシアが何か言う前に俺が「なにつて……ナニですけども」……とは言わずに「無理やり服を脱がされ体を拭かされそうになりました」と言つたので、アレクシアはその場でお説教。その後アイリス様に首根っこ掴まれて連れていかれた。美しい姉妹愛を見て感動しましたよ、僕は。

ちなみにその後窓からデルタが入つてきて「デルタが拭くー！」とタオル片手に言つてきた時は頭を抱えた。まあ、今更デルタに裸見せることに抵抗は無いし、断ると落ち込むのが目に見えていたのでお願ひした。ただ、そのまま一緒に寝ようとしたので流石にそれはダメだと諭して帰らせた。

デルタの寂しそうな顔が未だに頭によぎる……今度2人で過ごす時間作ろうかな。それこそ、デルタが好きな狩り（対象は人間じゃない）でもいいかもしれない。

つて、今思つたけど「デルタが拭くー！」って言つてたつてことはどこかで会話を聞いてたのだろうか？いや、偶然だよな？  
俺はデルタを信じるぞ。

。月→日

今日はアイリス様とアンナ先輩がやつてきた。

アイリス様からは先日取り乱してしまつたこと、アレクシアの暴走を謝罪されてしまつた。無論、どちらに關してもアイリス様は悪くな

いため俺の方も頭を下げて謝罪しまくったのだが、お互に譲らないため中々シユールな光景になつていたと思う。

結局、お互い何かしら相手に約束を設けるという風に落ち着き、アイリス様から俺へは「絶対に無理はしないこと」を、俺からアイリス様へは「もつと周りを頼ること」というのを約束した。ただ、俺がアイリス様にあの約束を持ちかけた時は「あなたがそれを言いますか……」と呆れられたのは誠に遺憾である。俺は困つた時はちゃんと周りに頼つてゐるのに……。

アイリス様が帰つて大体1時間くらいだろうか？お昼前にアンナ先輩がバスクケットを片手に訪ねてきた。なんでも、助けてくれたお礼とお見舞いも兼ねて懃々サンドウイッチを作つて持つてきたとのこと。

そこまで気にしなくていい、と言つたものの「まあまあ、そう言わずに受け取つて欲しいな」つて困つた顔で言われてしまつたので頂いたのだが……夢中になつて食べるぐらい美味しかつた。卵サンドは塩コショウの味付けが俺の好みだつたし、魚のフライサンドもタルタルソースの味が薄すぎず濃すぎずと絶妙な調整だつた。特にそのフライサンドに関してはフライに関しては市販のことだが、タルタルソースは自分で作つたとのことだから味の調整に苦労かけたと思われる。

まあ、アンナ先輩はそんな俺の様子をニコニコ嬉しそうに見ていたのに気が付いてからは、なんか恥ずかしかつた。そして俺が恥ずかしがつてるのを分かつたアンナ先輩は「可愛いところあるじやん♪そういうところあたしは好きだよ？」と言つてきた。

なんか、俺年上には全然勝てないや。クレアとアイリス様は別枠だけどね。片方はブラコン拗らせてるから寧ろこつちが抑えたりしてる側だし、アイリス様はむつつりだからなあ。あ、でも権力やたまに見せる不器用な姉みたいなところには勝てないかも。実質年上で負けないのクレアだけじゃん……なんかやだなあ。

と、ここまでなら良かったがこの後は悪い話を聞くことになつた。シェリー先輩は学術都市のラワガスに留学することを決めたそうだ。

恐らく、ルスラン副学園長の仇を取るために、それに必要な力を得るために決めたのだろう。アンナ先輩もそれを察しており止められなかつた、と悔しそうに呟いていた。

出来たらその道には行かないで欲しかつたけど、本来俺は復讐に関してとやかく言える立場ではない。何故なら少なくとも、俺は復讐を志したから色んなものを得た側の人間だし、結果的には復讐を果たして気持ちを切り替えられた。だから、シェリーさんが選んだ道を否定することは出来ない。

でも、少しでもいい結末になるように動くように手を出したいとは思う。それが、先にこの道を選んだ人間としてやるべき事だと思うから。

\*\*\*\*\*

私、アンナにとつてルイス・エアという少年は一目惚れした相手だ。フードを被った男に2度も襲われた時、その2回とも颯爽と駆けつけてくれた彼の姿にベタ惚れしてしまつた。

彼の気を引き付けたくて、友人に手伝つてもらつて彼の好きな食べ物や恋人の有無など調べたし、お礼としてミツゴシ商会のチョコレートを買ってあげようとした。まあ、このチョコレートに関するところはルイスくんの部屋で2人つきりで食べるという役得な感じになつたけども。

そしてルイスくんと交流していく度に、情報には無かつた彼の色んなことを知れた。

例えば、落ち着いてるようで子供っぽいところがあつたり、本当に嫌な時は目付きがさらに悪くなつたり、意外と意地悪だつたり、そしてかなりの人たらしの才があることなどだ。

いや、最初の2つはギャップ萌えというかそういうのがあつていいと思う。でも人たらしの点に関してはダメだ。ただでさえ、アレクシア王女っていうとんでもないライバル候補がいるのにこれ以上増え

たら大惨事になる。

——なんて学園が襲われるまでは思っていた。

でも今は違う。私はあの日、ルイスくんの秘密を知つてしまつてからこの想いは揺らぎつつある。

隠し通路に吹き飛ばされたように入ってきたルイスくんが、制服から黒衣のコートを着るところを私は見つめてしまった。そして指名手配書を見た時、ルイスくんがシャドウガーデンのメンバーの一人だということに思い至つてしまつた。

私は急にルイスくんのことが分からなくなってしまった。彼が私に見せていたものは全て偽つていてものなのだろうか？私を助けたのは気まぐれなのだろうか。けど、それ以上に好きな人に対する疑心暗鬼になつていて自分に戸惑つた。

でも向き合うべき気がして、勇氣を出してルイスくんのお見舞いに行つた日、彼の笑顔を見た瞬間私の中にあつた疑問は一気に吹き飛び、同時に理解してしまつた。

——ああ、結局私はルイスくんにどうしようもないほど恋してしまつてるんだ。

考えてみたらベタ惚れしてしまう出来事だらけだつたし、仮に彼が何者であつても私のこの気持ちは本物だ。それにどうもルイスくんが悪さをしているテロリストとは思えない。魔剣士だから必要とならば人を殺せる覚悟があるのは当然かもしれないけど、少なくとも進んで悪を成すタイプとは思えないし、するとしてもそうしないといけない時にしかやらない人間のような気がする。

だから君が隠していることは私だけの秘密にしておくね。

いつか、君が打ち明けた時に「知つてたよ」って笑いながら言える日が来るのを楽しみにしてるよ。

# 番外編：ユウトが体験したトラウマや日常話 その壱

## その1：スバルタ修行（トラウマ）

「さて、ユウトよ。お前に修行をつけるにあたって1番の課題になるのはお前の魔力量だ。従つて今日から魔力量を解決するための修行も行う」

「はい、師匠！」

「うむ、いい返事だ」

とある森にて、中性的な顔立ちをした剣士とユウトと呼ばれた子供（5歳児）の2人がいた。

師匠呼ばれた剣士は真っ直ぐな目で自分を見つめ気合いの入った返事をした子供に笑みを浮かべると、ポケットから腕輪を取り出す。

「師匠、それは？」

「さつき言っていた魔力量の修行で使う物だ。ユウト、これからお前はこの腕輪を食事や寝る時、そして私が許可した時以外ずっと付けてもらう」

「？　はい、分かりました……っ！」

ユウトは師匠から渡された腕輪を受け取ると、なんの躊躇いもなく身につける。すると急に何かを抜き取られるような感覚に襲われ、思わず膝をつきそうになるも彼は根性で耐えた。

「い、一体何が……？」

（ほう……膝をつかないとは大したものだ。流石、私の魔眼と目をもつてしても完成形が分からなかつただけのことはあるな）

困惑しながら何とか立っているユウトを見て剣士は満足そうに笑みを浮かべる。なぜなら剣士がこれまで取ってきた弟子の中で、あの腕輪を初めて付けて膝をつかなかつたのはユウトが初めてだつたらだ。早速自分の予想を裏切つた新たな弟子に対して、剣士は更に期待を募らせる。

だがユウトはその様子に気づく余裕はなく、絶え間なく続く慣れな感覚を堪えながら声を出す。

「師匠、これは……？」

「ああ、説明してなかつたな。それは『ドレインブレスレット』と呼ばれている魔導具だ。簡単に言うとそれを身につけている間、魔力を吸収される」

師匠と呼ぶ剣士からの説明を聞いてユウトは「なるほど」と理解した。先程感じた感覚は魔力を吸い取られる感覚であり、初めて感じたと思つたのはこれまで魔力を使つたことがないからだろう。

だが、それはそれとして聞きたくは無いが聞かなければならぬ質問がユウトに出来た。恐る恐るユウトは質問を投げかける。

「師匠、質問なんですか？」

「ん？ そんなの魔力はブレスレットを通して外部に出されるだけだが」

「デメリットしかないゴミじゃないですか！……あ、あれ？ 外れない……？」

ユウトは衝動的にブレスレットを外して地面に叩きつけようとするも、ブレスレットは何故か手首から離れずどんなに力を入れても、まるで固定されているかのようにビクともしない。

そしてそれを見ていた剣士は「あ、しまつた」と呟きながら――

「すまん、それ解呪する前のやつだつた」

「なんでよりによつて呪われてる方を弟子に渡すんですか？」というこれ元々は呪いの装備だつたんですか？！そもそもなんでそんなん持つてるんですか！」

「まあそう言うな。ほれ、えんがちよ」

ギヤーギヤー喚くユウトを流しながらその剣士はブレスレットにチョップする。するとブレスレットはあっさりと取れたが、ファンタジーにまだ夢を見ていたユウトからしたらとんでもない光景だつた。「解呪つて物理なんですか!? こう、魔法みたいな詠唱とかないんですか？」

「あるにはあるが殴つた方が早いし、そもそも詠唱なんてやつてたら時間の無駄だ。それに楽できる方でやつた方がいいだろう？」  
「思つたより現実的だつた！」

「お前が魔法に憧れているのはわかる。だが魔法と剣、どつちも使つてゐる私からしたら魔法は詠唱破棄出来ないと不便なものだ。だからお前には詠唱破棄の訓練もさせるというのは覚えておけ」

（魔法つて詠唱破棄が必須レベルなのか……）

さらつととんでもないことを言いやがったな、とユウトは思いつつもこれがこの世界の常識ならば仕方ない、と納得した。それよりとりあえず魔力を抜き取られる感覚に慣れようとそちらに意識を向けようとして――

「話は置いといて、今から大剣と重りをつけた状態で素振り1000回と筋トレ100回5セットをやつてもらう」

「…………え？」

師匠と呼んでいる剣士が投げた指示と足元に転がる木刀を見て固まる。

「し、師匠…………？ 今なんて…………？」

「だから素振り1000回と筋トレ100回5セットだ。ほら、時間は有限なんだからさっさと始めろ」

「わ、分かりました…………」

少し言いたいことはあるものの自分がお願ひした結果なため、文句を師匠に言うのは筋違いではある。ユウトはそう自分を納得させていつも通り重りを身につけ、そして鉄製の大剣を持って素振り1000回をこなそうとして――

「ちなみに昼前までに2セット終わらなかつたらプレスレット追加だ」

「それを先に言つてください!!」

恐ろしいことを言つてきた師匠にツッコミながらユウトは急いで素振りを開始した。

――なおユウトは魔力を吸われているせいですぐに体力が尽きてしまい、そのせいでプレスレットを追加された拳句本当に死ぬかと思うほど魔力を吸われ、走馬燈本當に死にかけたを見ながら氣を失つた。

この出来事をきっかけに、ユウトは『ドレインプレスレット』を見る度に体を震わせるようになつたとかならなかつたとか。

なお、その日の師匠特製のご飯はいつもより豪勢だつたとか。

\*\*\*\*\*

## その2：たまにはのんびりと（日常）

勇者パーティの活躍で魔王軍の前線基地を守っていた魔王軍幹部を撤退させたことにより、彼らは暫し休息の時間を与えられた。

パーティで話し合った結果、各自好きに過ごそうということになり、聖剣の扱い手である勇者レイは国から与えられた屋敷で休み、シーフのユラは城下町にある孤児院へと向かった。

そしてユウトとその相棒のポチすけは――

「ユウト、エサの付け方教えて」

「ん、いいぞー」

「ワフウ……（特別意識：ご主人に教えて貰えていいなあ……）」

城下町の外にある近くの川で聖女のマリアと魚釣りをしていた。

事の発端はパーティの話し合いが終わつたあとにマリアが「何して過ごせばいいか分からない。だから休息の間はユウトについていく」と謎の宣言をユウトにしたからだ。ユウトはマリアからの宣言に困惑した。しかし、とある事情で娯楽をよく知らないマリアの力にはなりたい。

そんな訳でユウト2人と1匹でできることは無いか、と考えた結果自分とポチすけの2人旅でよくしていった釣りならまつたり過ごせるだろうと思いつき、現在に至る。

「ユウト、魚はいつかかるの？」

「それはその時次第だよ。運が良ければすぐかかるし、ダメな時は釣果なしで帰ることもあるから」

「そう……そんなのが好きなんてやつぱりユウトは変わり者」

「はは、もしかしたらマリアもその変わり者の一員になるかもよ？」

「……だといいな」

マリアはユウトの返事に對して小さく呟いてからは川に浮かぶウキをじつと見つめ、そんな彼女をユウトは優しく見守る。

「……」

「ねえ、ユウト」

「んー、なにー？」

「無茶してない？」

「……別にしてないよ」

不意打ち氣味に聞かれたマリアの質問に、ユウトは少し間を置いてから答える。確かに開発とまでは言えないものの、自分なりにアレンジしたとある魔法はそれなりのデメリットがある。實際、最初にそれを試しに使った時は吐血した上に全身筋肉痛にもなった。

だが、今ではたまに吐血しかける程度には慣れてきたため、ユウトの中では無茶には入っていなかつた。

マリアはこの質問が何となく聞いたということ、間があつたとは言えユウトが自分たちに嘘をつくとは思えなかつたため納得し、「そう」と言つて話を切り上げた。

また二人の間に沈黙が流れる。だが、2人にとってこの沈黙は気まずさといったものはない。寧ろたまに吹く風の音やちようど良い気温も相まって、心地良さを感じていた。

「……ねえ、ユウト」

「ん、なに？」

「こういうのもいいね」

「そうでしょ？」

「うん。だから次も行く時は誘つて欲しい」

「ん、いい——あつ、マリア！糸引いてる!!」

「あ、本当だ……これは引っ張ればいいの？」

「それで大丈夫！俺は網を……」

「はあつ！」

「ちよつ、マリア!?」

——この後、マリアは網を使わずに魚を釣り上げるという感覚がクセになつたらしく、その日だけに限らず毎回持ち前の馬鹿力を利用して魚を釣りあげまくつた。

そしてマリアは後にとある国で行われていた釣り大会で見事1位を取り、大衆の前で満面の笑みでのダブルピース（ユウト基準）をするのだが、この時はそんなそとになるとは誰も思ってはいなかつた。

### キャラ紹介

ユウト：本作オリ主の前世。幼い頃にドレインプレスレットで何度も死にかけたため、魔力吸収に関しては不快感が出てくる程度には嫌な思い出。

なおこの世界での趣味は釣れればその日の食料にもなる十肉より魚派＋なんか落ち着くという理由で釣り。釣り道具はそれなりに凝つているらしく、マリアに買ってあげたのも結構いいもの。

なお自分が吐血する程度は無茶には入らない。

師匠：弟子のユウトに解呪されてないブレスレットを渡すというボケをしたり、一步間違えたら死ぬ鬼畜な修行させたりと結構厳しい一面もあれば、ご飯を豪華にしたりと優しい面もある。なお、魔眼を持つてゐるらしいが……？

マリア：勇者パーティの聖女。感情を表に出すことはなく、表情もほとんど出ない。だが勇者パーティのメンバー、特にユウトは彼女の感情や表情には鋭く、またとあることがきつかけでマリアはユウトのことを無自覚ながら恋い慕うようになる。

釣り竿はずつとユウトがくれたものを使つてゐる。

ポチすけ：「これ以上のもふもふにはこれから先出会えない」とユウトが自信を持つて言うぐらいにはもふつもふ。特殊能力の念力で寄りかかるユウトが心地いいぐらいの温度と湿度の空間、そして最高のモフモフ具合を作つてゐる。正に特殊能力の無駄使い。

その3：とある聖女の誓い

——私は孤児だ。

私を拾ってくれた教会の人たちが言うには、雨が降っている日に教会の前に捨てられていたらしい。

だが、私の出生なんかは正直どうでもいい。問題なのはその教会が未来の聖女を育成するための教会だということだつた。

私は……いや私たちはそこで拷問のような日々を送つた。

かつて世界を救つた歴代の聖女達のように美しく、そして強くあるために様々なことをやらされた。

それこそ聖女らしく傷を癒すための魔法や防御魔法といった白魔法の習得、いざと言う時に前線に出るための戦闘術、そして聖女らしい立ち振る舞いや表情の作り方など色々あつた。そして少しでもミスや出来ないことがあれば「禊」という名目でムチで叩かれ、罵詈雑言を浴びせられた。特に私の場合は、子供たちの中ではずつと1番魔法がダメだつたから毎日のようにムチで叩かれ、罵倒された。

そんな厳しい日々を送れば、人によつては精神を病んだり、ムチで叩かれた時に死ぬこともある。実際、私より先にいた子、一緒に入つた子、後から入つた子関係なく居なくなつていつたし、ある1人の例外を除けば残つていた子も作った微笑み以外の表情は浮かべることはほぼ無くなつた。無論、私も例外なく喜怒哀楽が無くなつた。

いつそ死んだ方がマシだと思えた日々だつたのが急に変わつたのは、私と一緒の時期に入つていながらも明るかつた例外の子が死んだ時の事だつた。

あの子はどんなに辛くても作った笑みではない明るい笑みを浮かべて私たちを励まし、誰よりも真面目に魔法や戦闘の訓練を受けていた。だから、聖女になるのはあの子だろうと思っていたし、生き残つて欲しいとも思っていた。

そんなあの子が死んだ時、言い表せないような胸の中がぽつかりと空いた痛みを感じそれと同時に私の魔力が体が一気に吹き出した。

これは勇者や聖女、もしくは神に選ばれた者のみが起こせる現象らしく、その日を境に私は『白魔法を上手く使えない聖女』になつた。

そしてそれから数年後、私は『勇者』のレイ、『密偵』のユラ、そして偶然仲間になつてくれた『魔法戦士』のユウトと『フエンリルの子供』のポチすけと魔王軍を倒す旅に出た。

——そう、私が人生でただ1人だけ愛したユウトと出会えたお陰で私は『聖女』ではなく『1人の人間』になれた。

——ユウトは私が浮かべる笑みが作っているもの、感情の起伏がないことに誰よりも早く気づき、私のこれまでを聞いてからは私によく話しかけてくれた。

——ユウトは魔王軍幹部との戦いであの子の幻影を見せられて折れかけた私を引っ張りあげてくれた。

——ユウトのおかげで人と一緒にご飯を食べる温かさを知れた。

——そして、ユウトのおかげで私は人を愛することを知れた。他にも私はユウトのおかげで色々なことを知れた。だからこそ、私はユウトと……いや、皆で平和な世界を過ごしたいと心から思つていたし、過ぎるとなんの根拠もない自信を持つていた。

でも、ユウトは死んだ。

魔王が苦し紛れに放つた魔弾からレイを庇つてあっさり死んだ。

地面に倒れ込んだユウトは死ぬ間際だというのに、まるで「私たちが無事でよかつた」と言わんばかりに優しくて、そして何処か満足したような笑みを浮かべながら死んだ。

最初はユウトがいない世界が嫌で死のうと思つた。

そうすればユウトにも、あの子にも会える気がしたから。

でも――

『俺は世界をゆっくり見て回りたいかな』

『俺が遠慮なく世界一周やれるためにも、レイたち皆無事でこの旅を終わらせよう』

いつの日か話した平和になつたら何をしたいか、ということでユウトが優しげな表情で言つていたことを自殺する間際に思い出して、死ぬに死ねなかつた。

何故ならここでそのまま死んでしまえばユウトがやりたかつた夢を踏みにじるような気がしてしまつたからだ。

そして死のうとしてその度にユウトの夢を思い出しては留まつてを数ヶ月繰り返した後、私は教会からの許可を得てから旅に出た。皮肉にもユウトが死んだあの日に傷を癒す力に目覚めたから、教会は私が1人で旅に出ることを拒むと思っていたけども、予想外にもすぐには承諾の返事が来た。

理由は分からぬけども、許可がすぐに出たのは有難かつた。ユウトがエンチャントしてくれたモーニングスターとローブ、そして釣竿と冒険用道具を持つて襲つてきた魔物や魔族を倒しながら各地を回つた。

そしたらどうだろうか、皆笑顔で過ごしていた。

とある地方の村では子供たちが元気よく広場を走り、夜になれば大人たちが酒を飲みながら楽しそうに話していた。

とある国の城下町では子供たちが「勇者ごっこ」をしていて、大人たちは「魔王が倒されて平和になつてよかつた」と安堵していた。

そして私たちが以前魔王軍の魔族たちから助けた村では、私を歓迎

してユウトの死を悼んでいた。特にユウトのお陰で命を助けられた見張り兵や、魔族に連れ去られそうになつたのを助けられた幼い兄妹はより一層悲しんでくれていた。

こここの村だけじやない。色んなところでユウトの死を悲しむ人が大勢いて、それが何だか嬉しくて同時にここに彼がいないというのが余計に悲しかつた。

ユウトは今頃天国で穏やかに過ごせているのだろうか。もしくは生まれ変わつて変わらず誰かのために生きているのだろうか。

私には今彼がどうしているのか分からぬけども、この旅を通して彼が、私たちと彼が守ってきたものを認識できた。

だからこそユウトに誓おう。

私は貴方が守つたものを生命尽きるまで守り続けていく。  
そして何かしらの奇跡が起きてあなたに会えたら――

。月・日

医者からもう日常生活に戻つてもいいというお達しが出たので、早速最近見つけた人目がつかない場所で鍛錬をしていたら、アレクシアに見つかり呆れられた。

だが、ネメシスを討つということを考えれば1日も無駄にしたくない。正直、今の状態で挑んでも良くて勝率は4……いや3割ぐらいだ。少なくとも前世で使っていた身体能力強化の魔術と俺の最大火力技の再現及び質の向上、加えて今より2段階程剣技を高めないと勝率は上げられない。一応ベッドの中でも魔力操作はしていたが、それでも体を実際に動かしながらでやると結構違つたりする。

特に身体能力強化の方は動きながらでないと、ちゃんと出来ているのか分からぬ。まあ、再現しようとしているものが前世で使つていた上にシドが使つているオーバードライブより強力だから人の目があるところで練習はできないのだが。

だからこそちよつとした穴場でやろうとしていたのだが、まさか見つかるとは思わなかつた。まだウォーミングアップの筋トレの段階で良かったわ。

その後は珍しくアレクシアから模擬戦の相手を頼まれ、何試合かしたのだがやはり強くなつていて。魔力操作の緻密さやスピード、そして剣の振り方やフェイントが前よりも巧くなつた。

個人的にはこういう技術の上達というか飲み込みが早いタイプはかなり手強くなる、と見てゐる。実際シドなんかはそれを体現してい るようなもんだしね。

だが着実に実力を伸ばしている当のアレクシアは、「逆転の一手になりうる一撃必殺の手段が一個しかない」と気にしてゐた。これに関しては変に気にしなくていいと思う、とは言つたもののそういう必殺技というか切り札が何個かあるのとないのでは安心感が全く違う。まあ、裏を返せばその技が通用しなかつたり、破られた時はかなり精

神的に来るわけだし、それなら今あるその技を鍛えるべきとかあるが……個人的には、アレクシアのことも期待してるし明後日実家行きの馬車に乗るまでにそれとなくヒントを出すか。

その教えようとしてる技はやる工程だけは単純なのだが、魔力の収束具合や速さ、そして振るう剣のスピードとシンブルな技だからこそ気をつける点が多く、極めようとするとかなり難しい技だ。俺はこの技を自信を持つて「切り札の1つ」として完成させるのに5年ほどかかつたが、アレクシアなら恐らく遅くて2年ぐらいでモノに出来ると思う。

本当に俺の周りは将来有望な子が多い。だからどのくらい強くなるのか楽しみになっている自分がいるのは否定できない。

師匠も俺を鍛えてる時はこんな

あ、そういうばアーリス様がなんか「ルイスが1番使いやすい剣の形はなんですか?」って聞いてきたな。断つても前世含めてトツプクラスの気迫でゴリ押ししてきたから、つい刀つて答えちゃつたけど……ここからエル!俺つてならないよな?

。月\$日

夏休みに入つたため本来なら俺は実家に帰つてているのだが、現在王都ミドガルと聖地リンドブルムの間にある宿場町にいる。何故こうなつたのかの経緯を簡単にまとめると。

1. 朝イチに、アレクシアから実家の帰省期間が減つてしまふ代わりに、給与を多めにあげるからリンドブルムの大司教の調査に同行して欲しいと頼まれる。
2. 特に断る理由無かつたし、アレクシアの鍛錬も見たかつたため了承。
3. 昼からリンドブルム行きの馬車に乗つて移動することを告げられる。
4. 急いで父さんに手紙を書き、荷物を纏める。
5. 時間の15分前には何とか間に合い馬車に乗る。
6. 宿場街に着く。↑イマココ

と言つた感じだ。

いや、せめて前日に言つてくれと思つた。そうすれば慌ただしく動く必要はなかつたし……もしかしたら俺が断りにくくいようにいきなり言つたのだろうか。そしたら流石というべきだと褒めるべきなんか、いい性格してると嘆くべきなのか分からねえや。

さて現在、今回もアレクシアは部屋にいる。

いやね？普通は王族と一般貴族は分けるべきだと思うんだ。實際

王族御用達とそれ以外で宿あつたし。

だがこの王女、どんな手段を使つたのか俺を同じ部屋にぶち込みやがつた。「護衛も兼ねてるんだから当たり前よね？」じやねえよ!!普通は護衛でも一緒の部屋で寝ないわ!!部屋の出入口に立つて交代で見張るんだよ!!というか不用心すぎるわ!!

もうどうすればえんや、この王女……

。月%日

昨日分の日記が空いてしまつたが、特に書くことがなかつたので書かなかつた。強いて言うなら抱き枕にされたぐらいだ。

何がとは言わんが柔らかかつた。でも理性が残つたのはデルタのお陰だろう。ありがとう、デルタ。けど布団に潜り込んだきたり、裸で風呂に入つてくるのはやめてくれ。最近慣れてきた自分が怖くなつてきたから……

さて、そんなこんなでリンドブルムに着いたわけなのだが念の為ネメシスがいなか魔力探知を行つた結果、魔力的にアルファ、ベータ、デルタ、イプシロンとその他構成員、何故かシドもいるのがわかつた。これがわかつた時変な声を出さずに冷や汗だけで留めた俺を褒めたい。いや、これ絶対コトを起こすパターンでしょ。七陰のうち4人もいるのはもう「ここでなんかやります」と言つているようなもんだ。でも俺、報告はおろか相談や連絡も来てないのよね……あれか？敵幹部を何回も逃した無能だから?……書いてる段階で泣きそうになつてきた。いや、確かに最初負けたし、2回目は取り逃した上に自分の感情優先してシャドウガーデン1本に絞らなかつた……こう書

いてるとハブられても仕方ない気がしてき——

先程珍しくアルファが窓から入つてきて、なんで俺に話さなかつたのか説明してくれた。

とは言つても、アレクシアが来るなら俺も来るはずだと思つていたから着いてから話そうと思つていたらしい。ちなみに来たのがデルタじゃないのは手紙を書く手間を省くためと言つてたけど……流石にデルタのことをアホの子扱いしすぎではないだろうか。

「あの子に任せたら本来の目的忘れると思うし」とも言つてたし、アルファってたまーに辛辣なこと言うよな……天然だとしたらナチュラル畜生の素質あるぞ。

それは置いといて、アルファから告げられたのは女神の試練の時に仕掛けるという事、ディアボロス教団と英雄たちの真相をあかしに行くこと、俺はアルファたちの護衛と万が一のためのデルタ抑え役として最初から同行して欲しいということだつた。

つまり、俺は当日アレクシアの護衛から何とかして外れる必要がある。

という訳でそこからアルファとどうやつて護衛から抜け出すか話し合い……にならなかつた。

何故なら教会側の精銳たちがアレクシアを護衛する+女神の試練に出場確定というふうに決まつてしまつたからだ。尤もアレクシアは何としても俺を傍に置きたかったみたいで色々意見を出していたが、「私たちのことが信用出来ないのでですかな?」と大司教代理のハゲおつさん……略して代理ハゲが切り出したため失敗に終わつた挙句、「これはあくまで助言ですが、もう少し強い人間を置いていたらどうかな?」と挑発されて乗つてしまつた、というわけだ。まあ、向こうからしたらメンツを良くしたい+聖騎士の力を信じてる+ちよつとしたからかい、つてところなんだろうが……もう少しこつちに譲歩する形をとつても良かつただろうに。お陰で俺はとばつちりを食らつたよ、ちくしそう。

というか大司教が死んだつてのも今日の打ち合わせで初めて聞いた。あの大司教に関しては元々黒い噂が結構あつた。だからこそ俺

らは調査をしに来たわけだし、場合によつてはアイリス様も動くという話もあつた。

しかし殺害されたというのなら証拠がなくなる前に捜査する必要がある。そのことをアレクシアと俺はかなり丁寧に説明したもののは、当の代理ハゲは「調査は許可を取つてからに！」とお前が犯人だろとしか思えないことを言つてのけた。

確実な証拠がないから捕まえることは出来ないが、もしもアレクシアに危害を加えるようならば先にやるしかないだろう。

そんな訳で明日はぐく自然に合流できるだろうし、計画もアルファと話し合つて元の計画から変更点が出てしまつたが恐らく大丈夫だ。懸念点をあげるとすればシドがやらかす程度だが……まあ、なんやかんやいい方向に向かうだろうし、やっぱそうになつても俺がカバーすればいい。

とりあえず、今できる準備を軽くしておこう。聖域とかそういうやバそななところの内部とかは経験上魔力が使えないとか、とある条件を満たすまで魔物無限湧きとか面倒な仕掛けがあつたことが多かつたし。

それはそれとして、アレクシアと俺を別部屋にしてくれた点だけは本当に良くやつてくれたと心底思う。ナイス、代理ハゲ。

\*\*\*\*\*

「やれやれ……まさかこんなことになるなんて……」

エルは女神の試練が行われている会場の屋根から、本来自分が戦うことになつていただろう『災厄の魔女アウロラ』と、漆黒のスライムスーツを身に纏つたシャドウが激しい戦闘をしているの見ていた。

元々の計画ではルイスが選手として出る前に自分の姿に変装したニューと入れ替わり、エルとして女神の試練に乱入。そのまま魔人ディアボロスを封印した英雄たちのうち1人か、その魔人ディアボロスを倒す、というものだつた。しかしその計画から変更せざるおえな

い状況になってしまった。

というのも――

(シドが女神の試練に出場することになつてたのは予想外だつた  
……)

そう、シドが女神の試練に挑む人間の1人にいたからだ。

エルから見ても出場者の相手として出てきた敵はその出場者の実力に見合つたものがほとんどであり、勝てた者もそこまで多くなかつた。それを踏まえると、何で判断しているのかは確証こそもてないもののこの仕掛けはその人物の実力をかなりの精度で読み取れるといふのはエルもシドも分かつた。だからこそ、シドが普通に出てしまえばかなりの実力を持つた敵――それこそディアボロスを封印した英雄の誰か――を召喚しかねない。

そうなつてしまえばシドの夢は碎け散る。それを察したエルは計画変更の合図、そしてシドならこちらの意図を察してくれるだろうと祈りながら、目に止まらぬ早業で上空へ打ち上がってから数秒後に破裂する魔力弾を放つた。そして魔力弾が破裂したと同時に魔力の色からルイスだということ、意図を瞬時に察したシドはスライムスースを纏いシャドウとして乱入した。

結果としてそれは正解だつた。

今シャドウが対峙しているのは、『厄災の魔女アウロラ』という魔人ディアボロスとの戦いより昔に世界を混乱と破滅にもたらしたとされるかなりの実力を持つた女性だ。尤も、その情報はディアボロス教団によつて抹消されているため、ルイスたちは知る由もない。だが、見ればかの女性の実力はわかる。事実、彼女の攻撃は自身の血を使って大量の杭を形成しシャドウに放つてゐる。そしてその攻撃はかなり精密な魔力操作によつて実現しており、エルは内心でアウロラへ賞賛を送ると同時に全力の状態だつたらどれくらいの強さなのか、内心冷や汗を流していた。

(何故かは分からぬけれど彼女は本来の実力を出せていない。もし、本当の実力だつたら前世の魔王軍の幹部クラス以上は確定だな……下手すると師匠や魔王レベルであることも視野に入れる必要が

あるな）

また頭を悩ます問題が出てきた、とエルはため息を思わず吐いた。  
だがすぐさま敵対するということにはならないだろうと判断し、アル  
ファたちと合流するためにその場から離脱した。

——この時エルことルイスはあることを失念していた。そしてそ  
れがどう転ぶかも誰にも分からぬ。